

〔表紙〕

忠義公史料

明治元年閏四月二

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

四〇一 道島日記

明治元年戊辰閏四月

館林藩秋元但馬守〔秋元〕ヨリ届書写

物頭

石川喜四郎

小頭一人

組下二十五人

持筒頭

關口喜兵衛

小頭一人

組下二十五人

今般野州辺騒動ニ付、出兵被 仰付候間、不取敢右二組、四月四日在所表出立之処、途中野州芋カラ新田〔新木原山也〕ト申所ニテ賊徒ニ行逢、石川喜四郎手ニテ生捕等モ有之候由、其後結城表戦争之節出張致シ、官軍御勝利ニ相成候、其節石川喜四郎手ニテ生捕並二分捕等モ多有之候哉之由、猶又十七日・十八日野州小山宿辺、彰義隊・草鳳隊ト相唱候二千人程之賊徒ト大合戦之節モ出張之処、何分小勢ニシテ力不及、甚以苦戦之至リ、終ニ敗軍ニ相成、石川喜四郎始メ討死等有之候旨、其外討死・手負等モ多有之候由候得共、取調モ付兼候旨、在所迄注進有之候段申来候、猶追々可申上候得共、此段不取敢御届申上候、以上、

秋元但馬守家来

閏四月五日

高山藤内

物頭

討死 石川喜四郎

討死 同人組下三人

姓名不分明

關口喜兵衛組下

討死 杉本勝造

右之通ニ御座候、外討死・手負之儀取調付次第可奉申上候、以上、

四〇二 真田信濃守家臣長谷川深美上申書

明治元年閏四月五日

(真田幸民、松代藩主)  
信濃守儀、去月廿八日御届申上候通、関東脱走之賊徒、

古屋佐久左衛門多勢引連、越後国ヨリ信濃国ニ侵入、

本多豊後守在所(助成、飯山藩主)飯山城下江押来、同所屯集近辺所々出

没致候ニ付、信濃守人数追々右地方へ繰出候処、其後

時機見計ヒ、同月廿四日尾州藩並近隣出兵諸藩申合、

千曲川東西持口分配仕、翌廿四日早天信濃守先手人数、

尾州藩一同右川之末岸安田渡船場ノ方相進候処、明ヶ

六ツ時過比西岸ニ屯在ノ賊臣ヨリ発砲致候ニ付、信濃

守人数不取敢及砲撃ニ、賊兵少敷退候処、飯山城ヨリ

使者差越、数日賊徒城下ニ屯集為致置候段、全微力ニ

テ打掛方行届兼、深く恐入候趣申聞候ニ付、尾州藩申談

及挨拶罷在候内、飯山城中ヨリ及発砲、賊徒打払候間、

信濃守人数其機ニ応シ、嚴撃打立候処、賊徒忽散乱致

シ、敗走ニ乍及市中所々へ放火イタシ候ニ付、尾州藩

並信濃守人数ノ内ヨリ川水へ飛入、向岸ニ繫置候賊船

式艘大奪取、川ヲ渡シ弥進撃ニ及候処、豊後守家来ノ

者罷越、案内イタシ候ニ付、尾州藩並信濃守役掛ノ者

共城内へ入、猶手配等申談、一同追伐仕候処、賊徒悉

ク富倉峠ヨリ越後路へ逃去候儀ニ御座候、依之豊後守

重臣之者、尾州藩及ヒ信濃守役掛ノ者へ面会仕、賊徒

打掛方行届兼奉恐入候次第等、歎願御取成シノ儀申聞

候ニ付、相当及挨拶、猶尾州藩並信濃守人数飯山城ニ

罷在、此上ノ守備並賊徒追討ノ儀等、一同厚ク申談候

旨、出張之重臣ヨリ申越候、右之趣東山道御総督府へ

モ、早々申立仕候儀御座候、猶賊徒打取人数並死傷等、

其他委細ノ儀、追テ可申上候得共、先不取敢右ノ段御

届申上候様、信濃守申達越候ニ付此段申上候、以上、

真田信濃守内

閏四月五日

長谷川深美

四〇三 彦根藩ヨリ届書之写

明治元年閏四月三日

先達テ御届申上置候下総国流山宿屯集之賊徒、平治上之  
後〔次城原〕結城ニテ水野日向守父子之争ヨリ、既ニ賊徒ノ巢窟  
ト相成候勢ニ付、長藩祖式金八郎須坂〔長野県〕・館林ノ人数ヲ  
率ヒ打向ヒ候処、賊兵不戦シテ逃候ニ付、入城鎮定、  
下野国宇都宮ヘハ、督府軍監香川敬三〔広安〕・平川和太郎〔光傳〕斥  
候上田楠次・南部静太郎、弊藩物頭小泉彌一右衛門・  
渡邊九郎左衛門・青木貞兵衛三小隊、並大砲一門、及  
ヒ岩村田・揖斐等ノ人数出張、追々進軍候、同国日光  
辺ニ屯集罷在候會賊及浮浪之徒、奥州之方ヘ退去、於  
日光板倉伊賀父子弊藩ニ依テ降伏、則督府軍監ヨリ父  
子ハ宇都宮、從者ハ壬生〔栃木県〕ヘ被預、下野国既ニ及鎮定候、  
奥羽ハ別ニ鎮撫使ヲ被置候儀ニ付、四月十一日総軍一  
トマヅ宇都宮ヘ引揚相成候、然ル処下総国小金宿ニ賊  
兵屯集罷在候処、船ニテ利根川ヲ廻リ〔千葉縣〕關宿〔栃木県〕・寶木辺ヘ  
相進候趣、同十五日軍監平川和太郎、斥候上田楠次、南  
部静太郎、弊藩渡邊九郎左衛門・青木貞兵衛並大砲組、  
及笠間〔茨城縣〕・壬生等ノ人数宇都宮出立、其夜石橋宿〔栃木県下都賀郡〕ニ陣ス、

翌十六日未明同所出立、既ニ小山〔栃木県小山市〕・間々田辺迄相進候  
処、結城ヨリ祖式金八郎以飛使、賊兵五六百人諸川宿〔茨城縣廣  
島郡〕ヨリ結城ヲ可襲之勢、孤城寡兵不可防禦、迅速応援可  
有之申来候ニ付、渡邊九郎左衛門隊、為斥候直ニ結城ヘ  
発向、無程総軍進發之処、賊兵小山之方ヘ進来候由、  
探索之者注進致候ニ付、総軍再分配之内、賊兵既ニ相  
近付、忽互ニ発砲、笠間・壬生之勢、槍ヲ入接戰候得  
共、衆寡難当引揚候折柄、青木貞兵衛隊・大砲組等踏  
コタヘ、頻ニ攻撃相支候処、終ニ彈藥・彈果候ニ付、  
不得止結城之方ヘ引揚候途中、渡邊九郎左衛門隊此戰  
争ヲ聞付馳返リ候間、再小山ヘ相向候処、賊兵既ニ大  
行寺ノ渡ヲ越ヘ、栃木宿ノ方ヘ引揚候由、且日暮ニ及  
ヒ候間、弊藩人数小山・新田両宿之間ニ野陣ヲ張ル、  
此日青木貞兵衛隊賊七八人討取候得共、其暇ナク僅  
ニ一首級ヲ揚ル、  
翌十七日朝、諸川宿ニ留リ居候賊二千人計、小山ヘ繰  
込候趣注進之折柄、宇都宮ヨリ軍監香川敬三、弊藩小  
泉彌一右衛門隊足利・岩村田・揖斐之人数ヲ率ヒ、為  
応援来レリ、則弊藩大砲一門・小泉彌一右衛門隊、並  
諸藩之兵小山宿之正面ニ向ヒ、渡邊九郎左衛門隊宿之

東裏手、青木貞兵衛隊西之裏手ニ向ヒ、分配既ニ相定  
 リ、正面之兵直ニ進撃、賊兵ハ撒兵ニ配リ、頻ニ新手  
 ヲ入替候得共、味方ハ代援之兵モ無之、諸藩苦戦、終  
 ニ宿外迄引揚候処、青木貞兵衛半小隊賊中被取囲、引  
 揚兼候様子ニ付、小泉彌一右衛門・渡邊九郎左衛門兩  
 隊是ヲ救ハント、再宿内ヘ討入候得共、賊兵衆多砲丸  
 烈敷打立候ニ付、無拠引揚申候、青木貞兵衛始メ半小  
 隊ハ、賊中ニ陥リ彈藥殲候処ヨリ、短兵接戦終ニ尽ク  
 討死致候由、一人重囲ヲ切抜ケ罷歸リ報知仕候、此日  
 七ツ時官軍兵ヲ収メ、宇都宮ヘ引揚ケ、賊兵ハ栃木ヘ  
 引取候由、弊藩死傷左之通ニ御座候、

物頭

討死

青木貞兵衛

手負

柳瀬儀右衛門

同隊下

同

田部萬之助

同

半小隊

同

林九左衛門

此分姓名・員數混雜中難相分致不申越候、

同

梅本磯次

小泉彌一右衛門隊

同

河内半大夫

同

塚越鐵三郎

同

川瀬柳蔵

渡邊九郎左衛門隊

同

岩崎久馬次

同

高木帆次郎

同

野田延次郎

矢島佐吉

雨宮良之助

大砲組

河島嘉四郎

飯塚平輔

安田覺三郎

渡邊九郎左衛門隊

差図役松下專之助

同隊

星野八十太

中谷元之進

小泉彌一右衛門隊

同

伊藤壽右衛門

同

若林專之助

十七日、小山戦争後弊藩三小隊宇都宮江引揚、籠城罷在候処、十九日朝、結城辺屯集之賊〔栃本島〕真岡ニ集リ、宇都宮へ襲来ノ勢ニ付、為追討城兵及ヒ弊藩三小隊出張候

同

青木貞兵衛隊

村田藤三郎

城下ヨリ一里半許先ニテ其来ルヲ待受、未刻ヨリ戦争ニ及ヒ、必死ノ力ヲ尽シ候得共、何分味方二十倍ノ賊勢ニ付、其所ヲ保チ得ス、城中へ引揚候処、賊兵所々ニ放

同

室川半次郎

火、四方ヨリ攻入候間、防禦ノ術ヲ尽シ、彈藥ノ限り攻撃致候得共、賊勢倍相加リ、栃木之賊鹿沼宿ヨリ横

右之趣出先之者ヨリ申越候、此段御届申上候様、掃部頭申付越候、以上、

閏四月三日

彦根中将内

合ニ進ミ、會賊〔福島栃本真境山王峠〕三王峠ヨリ繰出シ、大澤ヨリ押来候、城中寡兵持久ノ策ナシ、不得止夜八ツ時城之南門ヨリ

引取候折柄、賊兵追ヒ討候ニ付、且戦且退、終〔茨城島〕二古河へ引揚申候、右之節弊藩死傷左之通御座候、

關 由太郎

渡邊九郎左衛門隊

常盤藤右衛門

同隊

討死

松本外馬

水野庄右衛門

手負

小泉彌一右衛門隊

右一等

一秩祿之儀ハ、壹百万石限可被賜之事、

一地所之儀ハ、駿河国一円可被下之事、

但石高不足之分ハ、追テ御取調之上、御治定可有之事、

一家名相統人之儀ハ、田安龜之助可被仰付之事、

明治元年閏四月九日岩倉具視徳川氏処分ノ草案

右一等

四〇四

關

由太郎

一地所之儀ハ、江戸城其俣被下、武蔵国総石高之儀、追テ御取調可被成下之事、

一右御達之上ハ、大久保・勝等早々可被為召之事、

一秩祿之石数・相続之人体ハ、前条同断之事、

右二等

右之内断然御決定御沙汰被為在度事、

#### 四〇五 大山格之助ヨリ吉井幸輔・大久保一蔵へ

書翰

奥羽ノ挙動追々御承知之筈奉推候、(奉脱力)総督九條殿・醍醐殿御事、仙府へ會討之為ニ今御東陣、副総督澤殿(澤)ニハ、

羽州鎮撫トシテ、去月十四日ヨリ御別レ相成、小子參謀被召付、世良修藏ニハ総督府へ相付、当分會討中ニ

御座候、扱羽州庄内之儀、最初仙臺へ御着陳之節ヨリ、御領柴橋七万石余有之候、陳屋へ襲来、領地庄内へ侵

掠ノ為兵差出、強勢之段注進有之候付、早鎮撫方トシテ被差出候処、夫ヨリ立去リ、引続自ラ朝敵ト名乗、

去ル廿三日当庄内境目へ、別紙之通矢状等差出候付、

実ニ不堪憤懣、即夜副總督手勢ヲ以、直ニ討入ノ令ヲ

発シ、当地ヨリ八里程有之候最上川ヲ下リ、半丁程土揚村ト申所へ上陸、夫ヨリ山水ノ嶮岨ヲ踏越へ、清川之關へ行懸リ候処、早日出過ニテ、折柄敵斥候目付直

ニ寄太鼓ヲ打、賊兵繰出シ、川ヲ隔テ砲台へ大小銃繰

打ニ討出シ、薩・長ノ兵惣計百五六十人ニ限り打合、

関門去候事三四丁程、賊猶兵ヲ募リ、大凡千内外之守

兵、兩藩ノ兵ト携臼砲二挺、其他小銃ノミナリ、後岡

ノ上ヨリ打合候処、必死ノ兵終ニ川原迄押出シ、敵兵

ヲ抽キ、二ノ台場ヲ捨テ、杉山林ニ引取り、雨ノ如ク

大小砲ヲ放ス、兩兵終ニ川ヲ抱渡リ、四方ニ分隊、終

ニ陳屋迄押付、此川ヲ去ル事敵守口へ一丁計ナリ、是

迄ノ苦戦時ヲ移ス事昼八ツ時過比ニ及ヘリ、于時城下

元ヨリ繰出ス賊兵逢ノ山岡へ相見得、此二ノ死地ト相

成、兩藩共ニ陳宮へ打入テ死ヲ決セント談ス、然ルニ

今總督ヲ一人孤城ニ殘シ置、賊ノ為ニ死亡ニ及候儀、

対

天朝大罪之至ト論シテ、一先兵ヲ引揚ント、衆皆然ト

シテ戦地ヲ退、一里計有之土揚村へ至リ、夫ヨリ古江

ト申所へ四里、同夜夫へ滯陳、翌廿五日、新庄本陳へ

着時吐氣ノ法ヲ行ヒ、実ニ薩・長ノ進撃數度涙ヲ拭ニ

至、夫ヨリ諸藩眼ヲ覚候模様ニ御座候、引続廿五日ヨリ、庄内勢六十里越ト申所へ繰出シ候処、全ク無勢ニテ最上川ヲ守リ、薩ノ兵士川路七次郎・篠崎東次郎指揮役申付置候処、去月廿七日川越ニ戦争引続、去ル四日千人計ノ賊、川ヲ越テ天童へ打入、城下共不殘放火、此川ノ守兵別紙ノ人数ニテ、実ニ一笑ニ不堪候、就中天童ハ無二ノ勤王、終ニ賊ノ為ニ被亡、可憐次第ニ御座候得共、満々タル仙臺會討ノ寄手二万ニ及候得共、一向援兵ノ兵一人モ不差出、夫ヨリ新庄ヨリ五里有之候楯岡ト申所へ押寄候処、不得止守衛ヲ捨テ副総督へ潜メ置、又両藩ヲ押出ス事去ル五日ノ事也、然ル賊軍大ニ恐懼シ、五六里ヲ隔テ引退候間、追討トシテ山形上山藩ヲ応援相添へ、一昨日ヨリ十一里有之候天童へ、昨八日米津伊勢守〔政敏、長藩藩主〕陳屋、賊ヲ追討、城ヲ焼大砲少々分捕ノ段、今朝注進有之、実ニ暫時ハ累卵ノアヤウキニ至リ、乍併山形杯モ大糺賊ヨリ被討亡候付、大奮激弥官軍式三百人ヲ以、数万ノ勢ニ色ヲ直シ申候、是ヨリ先楽ニ御座候、不日庄内へ討入、成功ノ期モ可有之、庄内ハ會二十倍シ、兵ヲ張り居申候、夫故諸藩大ニ恐レ、一向出兵モ及遅延ニ、如何共スルヲ得ス、會

モ早歎願ノ次第ニ立至リ、今日岩城左京大夫飛脚差立候付、形行甚以乱筆早々如斯御座候、以上、  
〔隆敏、龜田藩主〕

辰閏四月九日

大山格之助  
〔綱良〕

吉井幸輔様  
〔友美〕

大久保一蔵様  
〔利通〕

#### 四〇六 総督府へ御届書写

〔松平〕  
會津容保為謝罪歎願家来共相越候付、陳門へ相通承候次第ハ、別テ御届申上置候通ニ御座候処、右容保恭順謹慎降伏謝罪之儀、只管歎願申出候付、一先戰為相扣置候、全体ノ儀ハ追テ可申上候得共、先以為御聞置、此段申上候、以上、

仙臺中將内  
〔伊達慶邦〕

米澤侍從内  
〔上杉齊憲〕

但木土佐  
〔成行〕

竹俣美作  
〔当綱〕

#### 四〇七 中外新聞

明治元年(1868)

四〇七ノ一  
慶應四年閏四月

聽雨

世の常にあらぬか月も空なれば

詠むる袖もうるふ頃かな

こいしらす

岡本長之

年を経し千代田賣田荒にけり

とくすきかへせ千代田賣田

いかなるをりにか

武蔵野の尾花か波はさわくとも

二荒の山の月は曇らし

おのか身の上は思はてかこつふり

角のあらそひあはれいつまで

感慨偶作

水哉逸史

要息干戈解内憂 其如外寇覬神州

桓文功業王家貴 周召風治民庶休

万世応須全玉璽 一時莫誤欠金甌

請看角逐分争勢 蚌鹵并遭漁父収

四〇七ノ二  
慶應四年閏四月

御かへりことゝはならて美作守のもとに

安房守義邦

さみたれにしはしは濁れすみた川

すむを常なる世にしあるれば

四〇七ノ三  
慶應四年閏四月

こいしらす

中島信敬

ほとゝきす忍か岡のしのひ音を

おのか五月に早くしてしか

うつきついたちの日 具賀田守蔭

立かへる御代にもかもな更に又

葵かゝさん月は来にけり

千年功業夢中夢 小中村清矩 紀藩

そのかみの根さしも深き葵草

露を袖にと思ひかけをや

失題 廣澤安任 會藩

欲因大義挙綱維 一決此心何又疑

休逐未流煩口舌 至誠自有貫天時

四〇七ノ四  
慶應四年閏四月

ロンドンエントチャイネット名クル新聞紙ニ、佛国帝ナポ  
(Napoleon)



レオン大病ノ由ヲ記セシ故ニ、之ヲ訳シテ第十五号ニ出セリ、其後公私雜報ニモ同事ヲ載セタリ、然ルニ右ハ全ク伝聞ノ誤ナリ、病氣ハ一時ノ事ニテ速ニ全快シ、當時壯健無事ナリ、既ニ近日帝妃同道ニテ、芝居見物ニ行カレシ事モ有リ、右ノ如キ風聞ノ起リシハ、英吉利ノプリンス鉄砲ニ中リシ頃ノ事ニテ、西洋諸州様々ノ風説有リシ故ナリト、仏蘭西人ノ物語ナリ、因テ爰ニ記シテ十五号ノ誤ヲ正ス、

#### 四〇八 横濱出版新聞紙ノ抄訳中外新聞

慶應四年閏四月

亞細亞人ハ歐羅巴人ヨリモ慘酷ナル事多シ、輕罪ト雖モ死刑ニ処シ、年々非命ニ死スルモノ夥シ、或ハ喧嘩口論ニ依テ殺害セラレハ、其子弟タル者必ス敵討ト云フ事ヲナシ、甚シキニ至リテハ、怨ヲ報ユルカ為ニ全家ノ男女ヲ殺シ、何モ知ラヌ赤子サヘ屠リ尽スニ至ル、就中日本ニテハ怨モナキ歐羅巴人ヲ殺シ、或ハ暗夜ニ往來ノ人ヲ切害スルナト、甚タイハレナキ事ナリ、尤モ人ヲ殺シタル者ハ死罪ニ行ヒ、其外刑罰ノ法ハ設ケアリト雖モ、

刑トイフモノハ愈重ケレハ、随テ犯ス者愈多シ、罪人ヲ少カラシメント欲セハ、家毎ニ教ヘ、人毎ニ諭シテ、人命ノ大切ナル事ヲ會得セシメ、道理ヲ弁ヘ開化ノ民トナルニ非ラサレハ、罪人ノ絶ユル時無ルヘシ、日本ノ武士ノ平話ヲ聞クニ、人ヲ切ル事業ヲ切ルカ如シ、ト云ヲ愉快ノ事トシ、自身ヲ捨ル事塵芥ヨリモ輕シ、トイフ事ニ誇ル者多シ、全国ヲ保護スルカ為ニ、戰場ニ臨ミテ命ヲ輕ンシ、嘗レヲ重シトスルコソ武士ノ本意ナレ、平日私ノ怨ヲ以テ、業ヲ切ルカ如ク人ヲ切り、塵芥ヲ捨ルカ如ク命ヲ捨ル事、豈天地ノ正理ナランヤ、造物主生ヲ好ミ、人ヲ愛シ玉フノ眼ヲ以テ、看ソナハサバ何トカ思ヒ玉フラン、前將軍ノ親族ナル水戸ト云フ諸侯ノ家臣、先年争鬪アリテ互ニ相殺戮シ、終ニ野州トイフ地ニテ戰爭アリ、一旦平治セシカ、近日又水戸ノ屋敷ニ於テ、十余人ノ重臣ヲ殺セシ由、又同シ親族ナル諸侯尾張ニテモ、今年第二月其重臣十三人ヲ同日ニ殺害セリ、日本人從前之例ヲ以テ考フレハ、他日必其敵討トイフ事、幾度モ有ルヘシ、此ノ如キ事屢々コレアルニ於テハ、互ニ相怨ミ相殺シテ、結局一國ノ人民子遺ナキニ至ルヘシ、若シ日本人互ニ相残害シ、人種減少スルニ至ラハ、唾手シテ此豊饒膏沃ノ

明治元年(1868)

地ヲ占領スル者アラン、是レ日本全国ノ為ニ憂フヘキノ  
第一ナリ、窃ニ希クハ、日本人上ハ王公ヨリ、下ハ細民  
ニ至ルマテ、生命ヲ重シ、私怨ヲ捨テ、民口増殖、全国  
繁栄ノ事ヲ謀ル様ニ致シタキモノナリ、

#### 四〇九 某書翰中外新聞

閏四月

或ル人一封ノ書ヲ投ス、看客ノ総代括囊軒ト書ケリ、其  
文ニ曰、新聞紙ノ益盛ナル事喜悦ニ堪ヘス、然ルニ新聞  
アリ、新報アリ、何新聞・何雜報トイフ類、陸続トシテ  
出ツレトモ、其事ハ大同小異ニシテ、繁擾厭フヘキニ似  
タリ、若シ新聞・新報ノ二ヲ以テ、遠國ノ報告ヲ網羅シ、  
別報・雜報ヲ以テ、都下ノ東偏ヨリ西辺ニ布告シ、南郷  
ヨリ北部ニ伝達セバ、則チ脱漏ノ憾無カルヘシ云々、其  
言実ニ理有リト雖モ、他ノ諸新聞皆撰者各異ニシテ、一  
手ニ出サルヲ以テ、互ニ重複アルヲ免レス、吾カ社中ニ  
於テ之ヲ如何トモスル事能ハス、中外新聞外編ノ如キ、  
吾カ社友ノ撰ニ係ルソレサヘ、第九号ニ出セシ詩ヲ重ネ  
テ、彼ノ第二号ニ出セリ、心附カサルニ非レトモ、既ニ

広ク發兌セシ後ナレハ、復コレヲ止ムルニ由ナシ、況ヤ  
其余ノ新聞会社、絶ヘテ吾カ社中ニ關係ナキヲヤ、吾等  
此事ヲ以テ、前ノ書ヲ寄セシ人ニ面告セント欲スレト  
モ、真姓名知ル可ラサルカ故ニ、茲ニ記シテ、其厚意ニ  
答フルノミ、

#### 四一〇 英国在留ノ友人ヨリ書翰中外新聞

中外新聞節錄

閏四月

今月六日、英船サラミス兵庫ヨリ横濱ニ入津シ、ミニス  
トルパークス帰着ス、  
(Under Parkes)  
英国ロンドン在留ノ友人ヨリ書状ヲ贈レリ、当三月上旬  
ニ出タル者ニシテ、左ノ事ヲ申送レリ、

西洋各国平和無事ナリ、

合衆国大統領ジョンソン國律ヲ犯シタル事アリテ、即  
今裁判所ノ吟味ヲ受ケ居ル由、亜墨利加ノ便ニ申越シ  
タリ、總テ國律ニ違背スル事アレハ、王公・貴人ト雖  
モ、裁判所ノ所置ニ従ハサル事ヲ得サルナリ、

亞弗利加州アヒシニー國ニテハ英国人トノ戰爭起レ  
リ、英国第一等宰相辭職シ、其代リニジールレルト云フ  
(Abraham)  
(Benjamin Disraeli)

人登用セラレタリ、此人ハ元來著述家ナリシ由、其後  
議事堂ノ役人トナリシカ、才学兼備ニシテ、政府ノ有  
司コレニ敵スル者無キヲ以テ、今ノ顯職江拔擢セラレ  
タリト云フ、

#### 四二一 佛蘭西在留友人書狀ノ写中外新聞

#### 中外新聞節録

閏四月

博覽会モ、去ル十月八日終ニ相成申候、

博覽会ニ付、諸国ノ帝王当国ヘ参ラレ候、当時境地利  
帝兄弟三人逗留致サレ候ニ付、訓練一覽ニ相成候、三  
兵合セテ五万人、其内騎兵一万、大砲百挺有之、目サ  
マシキ事ニ御座候、

佛蘭西帝ノ輕便ナル事ハ、自ラ馬車ノ馬ヲ使ヒ、諸人  
ニ交リ往来致サレ候、從者僅ニ三四人ニ御座候、後宮  
モ宮女僅ニ三四名ノ由、輿向ノ入用ハ至テ少キ事ニテ、  
其代リニ兵備ニハ莫大ノ入費ヲ不惜由、スヘテ宮女ノ  
多キ国ハ必衰微イタシ候ト、西洋人常々申居候、  
巴勒ノ警衛ハ都ノ周圍ニ大ナル溝ヲ堀、高土手ヲ築キ、

要処々々ニ小堡アリ、事有ル時ハ、土手ヘ大砲ヲ備ヘ  
兵ヲ出ス、右ニ付如何ナル侵襲有之候トモ、巴勒ノ住  
人立退ノ沙汰無之、安心ノ至ニ御座候、且外國ノ氣風  
ハ唯其主君ヲ守ルノミニ無之、國民ヲ保護スル事ヲ專  
一ト致シ候故、連年ノ戰爭有之候テモ、左ノミ百姓・  
町人ニ大ナル難儀ハ掛リ不申候、

屯所ハ都下ニモ多ク有之、常々番兵ヲ置キ、事有ル時  
ハ、互ニテレガラーフ(Telegraph 電信機)ニテ合図イタシ候、都下ハ勿論  
在方村々ニ至ル迄、蒸氣車ノ通路自由ニ御座候故、千  
里ノ遠キニ兵ヲ出シ候モ、極迅速ニ御座候、兵糧モ蒸  
氣車ニテ運送イタシ候故、思ノ外遠國ノ軍モ手輕ナル  
事ニ御座候、

巴勒ハ実ニ馬ノ多キ所ニテ驚入候、騎兵ノ分ヲ除キ馬  
車ニ用ユル馬、凡三万余匹コレ有リ候、

境地利帝巴勒ノ窮民ヘ十万フランクノ金ヲ施行イタサ  
レ候、土耳其・俄羅斯・李瀾生ノ帝王モ同様ト申事ニ  
候、巴勒ハ日本ノ京都ヨリ少シ大ナリ、江戸程ノ大都  
会ハ歐羅巴ニ無之候、都府ノ立派ナル事ハ世界第一ト  
申候、去ナカラ窮民多ク、三十歳ニテ妻ヲ迎ヘ候者ハ  
早キ方ナリ、早く子ヲ持候ヘハ、養育ニ困リ候由ナリ、

婦人悉ク内職ヲ致シ候、但衣類ハ何レモ立派ニ御座候、  
婦人ハ実ニ美ナリ、色飽マテ白ク肌細カニテ、鼻高ク  
唇薄ク、言葉ヤサシク候、

同 銚一  
野村清庵  
小田切八郎

帝王イツレモ時々芝居見物ニ出ラレ候、既ニ此頃モ塊  
地利帝芝居ヘ往カレ候、平人ニ異ナル事ナク、往来制  
止モナク、只帽子ヲ脱スル計ニテ、誠ニ手輕ノ事ナリ、  
諸國ノ帝王本国ヨリ巴勒ニ來ル從者、僅ニ六七人ニ過  
キ不申候、

諸色高価ニハ殆閉口致候、大凡日本ヨリ三四倍ト被存  
候、乍去器械・鉄砲ナトハ日本ヨリモ下直ニ御座候、

四二三 津田真道上書  
慶應四年閏四月

四二二 口上扣遠近新聞

慶應四年閏四月

微賤ノ私共、殊ニ老年ニテ恐多ク奉存候得共、勳  
王ノ夙願ニ御座候テ、門人ノ外同志共モ信ニ有志ノ者、  
方今ノ形勢故、苦心合集罷在候、依之御用ニモ相立申  
間敷哉ニモ候得共、応 御命粉骨可仕赤心ニ御座候、  
此段奉申上置候、以上、

月岡一郎

掛マクモ畏キ我 天皇皇帝陛下明神ト、大八州國シロ  
シメス事、天地ト共ニ窮リ無シト雖モ、中世以來臨御  
其道ヲ失ヒ玉ヒシニ因テ、国乱相尋ギ 皇威萎再シテ  
振ハス、大權遂ニ武門ニ移リタリ、降りテ足利氏ノ季  
ニ至リ、壞乱極マリ、天下復 天皇陛下ノ尊キヲ知ル  
者ナシ、時ニ我 東照宮天賜ノ智勇ニ資リ、風ニ櫛ケ  
ツリ、雨ニ沐シ、備サニ百戰ノ艱苦ヲ嘗メ、乱ヲ撥ヒ、  
正ニ反シ、遂ニ皇威ノ陵夷ヲ扶ケ、蒼生ノ塗炭ヲ救ヒ、  
能ク天下ノ侯伯ヲ統御シテ、海内復寧靜、風波揚カラ  
ザル事殆ト今ニ三百年、其功豈大ナラスヤ、其德豈盛  
ナラスヤ、然レハ則我神州政權ノ徳川氏ニ帰スルヤ、真  
ニ天授ナリ、人ヲナリ、豈天皇ノ私ニ賜フ所ナランヤ、  
豈將軍ノ私ニ取ル所ナランヤ、然ルヲ我寡君前大將軍

公、一朝祖宗伝承ノ軍職ヲ辞シ、政權ヲ 朝廷ニ帰セラレタルハ、抑何ノ心ソヤ、祖宗在天ノ靈ニ対シテ不孝トヤイハン、不義トヤイハン、蓋シ是レ我徳川氏ノ将士八万人、各疑惑シテ弁解スル能ハサル所ナリ、我請フ、試ニ之ヲ弁解セン、抑東照公ノ天下ヲ治平スルヤ、頗ル意ヲ文学ニ留メラレタリト雖モ、文教猶未甚明ナラス、公ノ令孫水戸ノ源義公大ニ文学ヲ修メ、大日本史ヲ撰ヘリ、我国ノ春秋ト謂フベシ、尔来大義名分大ニ国中ニ明ナルニ至レリ、夫レ天ニ二日ナク、地ニ二王ナシ、我国鎌倉以還ノ形勢、 天皇ノ下ニ將軍アリテ專国政ヲ執リ、大權ヲ握ル、恰モ国ニ二主アルカ如ク、人ニ二頭アルカ如ク、不都合ナル事ニテ国体宜キヲ得ザルナリ、況ヤ近来外国交際ノ道漸ク開ケ、西洋ノ文学東方ノ名教ト和シ、世界ノ文教、将ニ合シテ一トナラントスル秋来レルニ於テヲヤ、此時ニ方リテ、人ニ二頭アルカ如キ不都合ノ国体、永ク我日本国内ニ存スヘカラス、但此義五儕凡人ノ得テ知ル所ニアラス、独我寡君前大將軍公ノ慧眼、能クコレヲ洞視セラル、ノミ、故ニ、一旦断然トシテ、祖宗以来天授相伝ノ政權ヲ朝廷ニ帰サレタルハ、蓋シ是レ他ナシ、我神州ヲシテ

唯一王土一頭ノ国トナシ、永久治安ヲ保チ、海外ノ強国駢立セン事ヲ欲セラレタルナリ、是我寡君前大將軍公ノ至正至公、一毫ノ私無キ數島ノ大倭心ニシテ、啻孝明天皇帝陛下ニ対シテ、忠義ノ心尤深キノミナラス、抑又我皇国億万ノ蒼生ニ対シテ、深仁厚沢千歳比倫ナシト謂フベシ、然レハ則我徳川氏ノ祖宗ニ対シテモ、孝且義ト謂フ可キノミ、抑上古天孫降臨ノ日、當時大八州ノ国主出雲ノ大神奉命恭順、此国ヲ挙テコレヲ天ニ讓レリ、余以テ之ヲ觀レハ、今日寡君政權奉還ノ功業、遠ク大國主ニ踰ユト言フト雖モ、敢テ過言ニ非ス、然ルヲ彼ハ千歳 天子ノ礼享ヲ辱フシ、此ハ從臣ノ異議先駈ノ争鬪等ヨリシテ、方今猶幼冲ニマシマス 今上皇帝陛下ノ逆鱗ニ触レ、遂ニ征討使東下スルニ至レリ、此時ニ方リテ彼建御名方神（神功）ノ類ノ如キ者、極メテ少カラス、或ハ云フ、東兵直ニ西上シテ、遙ニ承久ノ故智ヲ襲ント、或ハ云フ、暫ク之ヲ駿遠ノ間ニ防キ、軍艦ヲ以テ直ニ其巢窟ヲ突カント、議論頗ル紛然、死ヲ以テ寡君ヲ犯ス者少カラス、然リト雖モ寡君平生ノ素心尊王ノ誠意、確乎トシテ變セス、泰然トシテ動カス、富士ノ嶺ノ磐根ヨリモ堅シ、憂国ノ情

益厚ク、伊勢ノ海ノ底ヨリモ深シ、独リ国乱ノ因テ以テ増長セン事ヲ恐レ、又外侮ノ其罅隙ニ乘セン事ヲ患ヒ、窃ニ蘭相如ノ心ヲ師トシ、愈々滋々恪謹恭順、屢諭ヲ下シテ王師ニ抗スル者ハ、刃ヲ我身ニ推スニ同シト云ヘリ、是ニ於テ関東ノ根本タル江戸ノ城ヲ開キ、海陸軍士ノ精神タル銃艦ヲ献シ、水戸ノ僻邑ニ退去シ、伏テ

天裁ヲ待ツニ至レリ、嗚呼其用心ノ深遠ニシテ且苦シキ、何ソ其レ此ノ如ク甚タシキヤ、但懣ラクハ 王師武甕雷経津主ノ神兵ニ非ス、臣ヲシテ君ニ敵シ、末家ヲシテ本家ヲ征シ、弟ヲシテ兄ヲ伐タシム、倫理綱常顛倒滅裂、ソレ是ヲ何トカ言ハン、嗚呼文教ノ盛ナル近時ノ如ク、名義ノ明ナル目今ノ如ク、殊更王政復古紀綱一新ノ際ニアタリテ、此不可思議ノ挙アリ、怪々奇々殆ト将ニ口ヲ開キテ言フ可キ所ヲ知ラス、然リト雖モ、我輩天地間ノ誠ニ忍ブ可カラサル所ヲ忍ヒ、却テ恐懼戰慄恭肅謹慎スルハ他無シ、是レ窃カニ我寡君恭順憂国ノ大倭心ニ体シ、誓テ国ノ為ニ家ヲ忘レ、公義ノ為ニ私利ヲ去ルニテ、日夜昊天ニ号泣シ、明神ニ哀願スラクハ、寡君ノ至誠至忠速ニ天地ニ貫徹シ、神

明ヲ感格シ、明神ト大八州国ヲシロシメサム 天皇皇帝陛下ノ寵恩天賞ヲ、辱フセン事ヲ冀望スト云フ、  
慶應四年閏四月 津田真一郎真道泣血謹識、

四一四 陸奥宗光辞職ヲ請フ書

慶應四年四月

辞職ヲ請フノ表

陸奥宗光俗稱賜之助  
土藩武士

謹テ奉言上候旨趣ハ、当今 皇威四海ニ輝キ、目出度御親政被執行候中ニモ、普ク器量有之者ヲ挙サセラレ、諸国ノ武士及ヒ民間ニ罷在候者ニ至ルマテ、材力ニ応シ、分際ヲ論セス御採用被成候御一条ハ、野無遺賢ノ美事、最ノ御政令、四海一同奉感戴候儀ニ御座候、然ルニ宗光若輩ノ書生ニシテ、御撰擢ヲ蒙リ、外国事務權判事ノ重職ニ被加候段、深重ノ 皇恩山岳猶低ク、蒼海猶浅シ、士タル者ノ光荣何ヲ以テ比類可仕哉、如此候ヘハ、粉骨碎身 皇恩万分ノ一二可奉報儀ハ、不及申事ニハ候ヘ共、不才ノ微身ヲ省候処、孔漆雕開ヲシテ仕ヘシムルニ、未能信ノ明訓有之、其上外国交際

ハ四方ニ使シテ、君命ヲ辱メサル名士ノ職掌、其実無クシテ其任ヲ汚シ候儀、恐惶慙愧ノ限り奉絶言語候、最モ人撰ハ政務ノ根本古今ノ難事、殊ニ以テ、源頼朝以來武家掌握イタシ有之候大政務、皇威ニ依テ再ヒ朝廷ニ復シ、後醍醐天皇、万々御憂苦ノ叡慮ニモ貫徹シ、盛世振々ノ御制令安危ノ一挙、可恐可慎ノ際ニヨヒテ、庸劣僥倖ヲ以テ、重任ニ誇リ、或ハ門地ニ依テ彼ヲ挙ケ、是ヲ捨ルノ嫌疑ヨリ、余儀ナク頭職ニ進ミ候等ノ儀有之候テハ、復古ノ御美事万代ノ御基本タル今日ノ 朝政ニ於テ、安カラサル御大事ト奉存候、最当今賢哲在位、才能在職、固ヨリ撰挙御欠失有之間敷事ニ候ヘトモ、宗光自己ノ不材ヲ省候テ、推考仕候ヘハ、千百中或ハ一二誤テ撰挙ニ応シ候者有之間敷トモ難申、非器在職ノ害ハ遺賢在野ノ害無キニ如カス、一進一退ノ間、利害得失少々ノ事ニ無之、付テハ宗光カ如キ短才微劣、僥倖ノ魁タル者ニ可有御座、雖然容易ニ辞職仕候テハ、可奉背深重之 皇恩、若又辞職不仕候テハ、可奉汚清操之重職、進退殆度ヲ失ヒ候ヘ共、自然御新政ノ上ニ於テ、庸劣愚昧ノ者徒ニ朝典ヲ辱シメ、明鏡ノ塵点トモ相成候テハ、重々奉恐縮候次第ニ

付、依之過日伊達少將殿マテ其段敷願仕候ヘ共、御採用無之、不得止事奉再願候、赤心ノ微衷深く御憐察ヲ奉仰候、恐惶謹言、

慶應四年四月

#### 四一五 牧野遠江守へ御沙汰書

閏四月廿九日

同日尾州藩ハ勿論、駿・遠・三各藩ヘモ同様御達有之候、牧野遠州ヘモ同様ノ御達有之、別段敷願ノ次第ニ依リテ出兵ヲ免サレ、左ノ如ク相達ニテ候、

〔慶賀、小諸藩主〕  
牧野遠江守

信州路へ賊徒侵入ニ付、出兵被仰付候得共、其藩ノ儀碓氷嶺警衛被仰付置候付被免候条、猶亦関門嚴重相守候様、御沙汰候事、

閏四月十五日

#### 四一六 青山峯之助申請書

松平肥後守其他賊徒等、北越ヨリ信州表へ致侵付候ニ

付、尾州前大納言へ追討被

仰出、弊藩之儀モ同様被

仰付、万端尾州へ申談、同心戮力速ニ逆賊討伐可致旨被

仰出奉畏候、弊邑ノ儀ハ飛驒国ト隣接致居、同所ハ信

濃国ト隣境ニモ御座候処、飛驒国ハ当春モ家来共ヨリ

申上候通、地理要害之場所ニテ、賊兵之礎陳ト相成、

致跋扈候得ハ、隣国ト申テモ四方共嶮岨ニテ、路程廿

里内外隔絶致居候間、援兵等之進退迅速ニ相成兼、是

迄モ非常等之節同所ハ第一ニ掛念仕居候、殊ニ飛州へ

屯集等相成候テハ、郡上城モ甚以危殆之事ト痛心仕候、

然処先達テ東山道総督府ヨリ被

仰付人数二百人程出隊、此頃江戸表迄罷越候趣、且又

此度人数差出候儀ハ奉畏候得共、猶又此後出兵致候上

ニテ、万一飛驒国へ多人数繰出等被

仰付候テモ、二重三重之出兵等ハ相勸兼可申ト心配仕

候、兼テ飛驒国ハ近国之大諸侯へ、非常之節人数出被

仰付候儀トハ奉存候得共、賊徒既ニ信州表へ侵襲仕候

ニ付テハ、飛驒国之処別テ心配仕候、奉違

勅候所存ハ決テ無御座候得共、一応申上候、夫共信州

路へ出兵之方御都合筋ニ御座候得ハ、乍少人数モ取調

早々繰出申度、乍併是迄ニモ多人数差出置、並江戸表

家来之者モ未引払過半ニモ及兼、国元之儀モ手薄ニ御

座候間、人数モ繰出兼可申ト奉存候、自然信州路へ諸

侯繰込候内ニ、間道ヨリ賊徒飛驒国ヲ侵掠、夫ヨリ美

濃へ相進候節ハ、京都へモ近付可申哉ト奉痛心候間、

愚存申上、旁此段奉伺候、以上、

閏四月

(幸直、郡上藩志)  
青山峯之助

批紙

願之趣尤之儀ニ付、出兵之儀ハ被免候条、飛驒国取締

可致事、

四一七 日本国当今急務五ヶ条ノ書中外新聞

中外新聞

慶應四年四月

一我日本ハ永久独立国タルベシ、決シテ他国ノ附屬トナ

ルベカラス、

二我日本独立セント欲セハ、是ニ相応セル国力ヲ起サ、

ルベカラス、



三右国力ヲ起サント欲セハ、日本國中宜ク一致スベシ、  
四日本國中ノ一致セン事ヲ欲セハ、国人ヲシテ悉ク政府  
ノ政ニ従ハシムベシ、

五人人ヲシテ政府ノ政ニ従ハシメント欲セハ、政府ニテ  
広ク日本國中ノ説ヲ採ルヘシ、決シテ一方ノ説ニ泥ム  
ヘカラス、

右五ヶ条西洋国法学ノ大綱領ニ基キテ、我国当今ノ急務  
ヲ揭示スルモノナリ、

戊辰四月

江戸開成所神田孝平識

#### 四一八 某詠歌中外新聞

慶應四年四月

題しらす

よみ人しらす

君とおみうからはらからいとみあふ

都もひなもあさましの世や

あたひなき玉てふ玉も何かせむ

瓦と共にくたけゆく世は

或曰安房守義邦詠勝

#### 四一九 勝海舟ヨリ田安へ書翰

慶應四年閏四月

田安殿ニ呈セシ書

亡国負罪之臣義邦、謹ミテ当今ノ形勢情実ヲ陳述奉申  
上候、既ニ去ル十一日都城御渡有之、

大総督御入城遊バサレ候テヨリ以来、今日ニ及候得共、  
御処置ニ付何等ノ被仰出モ無之、江府鎮撫等被仰出、  
厚ク御配慮御座候得共、人心日々恟々疑念相結ヒ、其  
方向ヲ弁セス、重ク君臣ノ礼節ヲ守リ候者ハ、恭慎罷  
在候得ヘ共、往日ノ大城今日ニ至リ候テハ、野草繁茂、  
郭墜落剝、郭門ハ乞丐・非人ノ巢穴ト相變シ、実ニ人臣  
タル者、是ヲ見ルニ忍ヒサルノ形勢ト相成申候、御家  
人ノ面々、其養候所ノ子弟従僕ノ如キモ、其主采邑ヲ  
失ヒ、饑渴ニ及候者大抵三十七八万人ニ下ラス、是カ  
為メニ都下三百万ノ商民、同ク生産ヲ取失ヒ、夜間ハ  
盜賊横行、無辜ヲ切害シ、老幼路上ニ倒レ死シ、壯者  
ハ近郊ニ屯集、強盜ヲ事ト致シ候体誠ニ見聞ニ不堪候、  
如斯シテ尚數日ヲ経候ヘハ、民ヲ水火ノ中ニ投候ニ同

ク、皇天覆戴ノ蒼生亦何等ノ罪御座候哉、一円弁解難仕ト奉存候、固ヨリ小臣輩ニ至候テハ、負罪ノ者速ニ斧鉞ヲ加ラレ、或ハ放逐被遊候共、其罪ニ応シ候嚴罰被仰付、御処置御座候ハ、可然歟、況ヤ今外ニシテハ、強國交際盛ニシテ、外国ノ士民踵ヲ接シ、居住ノ者數千人ニ下ラス、北方ハ強魯ニ接壤シ候、御邦内協力同心雄ヲ海外ニ争候御事ハ、方今第一ノ御急務ト奉存候処、国内ノ人心方向ヲ失ヒ、忌懼ヲ抱キ、窃ニ離散ノ基固ク相成候様御仕向被遊候ハ、何共以テ拙考ニ能ハサル所、仮令鉄艦數艘猛卒數百万ヲ御備御座候共、何ノ御用ニモ不相立、空ク同袍憤争ノ端ト相成可申候、定メテ御推算ハ被為在候御事、負罪ノ小臣輩頗ル過当ノ愚慮ニ御座候へ共、我君上ノ念願爰ニ外ナラス、此誠意至恭ノ心中モ、当今ノ御模様ニ候ハ、終ニ水泡ト相成、誠ニ悲歎痛哭ニ不堪候、御三家・御三卿被立置候モ、此際御輔翼被遊、且ハ

朝廷へ御忠諫御尽力御座候御儀ハ、乍憚其御職掌哉ト奉存候間、不憚忌諱奉申上候、近日小臣

大総督府下へ一書ヲ拝呈仕候へ共、元ヨリ負罪ノ身分御採用不相成候ハ、御尤ノ御事ト奉存候へ共、形勢切

迫大瓦解ニ立到可申ヲ傍觀仕候ハ、実ニ忍ヒサル所、何卒閣下猶御力ヲ添サセラレ、

督府へ御歎願被成下候ハ、難有可奉存候、元ヨリ小臣一人ノ儀ニ無之、都下百万ノ生靈ヲ被為救候ハ、乍恐

大総督府ノ御大任ト奉存候、小臣元來頑愚ノ性質、忌諱ヲ相冒シ候罪ヲ以テ死ヲ賜ハラシハ、死後ノ幸何事カ是ニ過キ可申哉、今心裡ヲ以テ毫モ不包奉申上候、死罪々々謹言、

辰閏四月十三日 勝 安房守

四二〇 大久保利通日記

明治元年閏四月

十六日

一休日不參御邸へ出殿、今日昼ヨリ參 朝、小大夫・後

藤・横井・副島・三岡段々制度之儀御評議有之、

廿七日

一十字參 朝、今日位階 宣下之御猶予奉願候処、御聞濟ニテ 御紙面ハ弁事へ御預相成差上置候、三字比退

出、

内評有之候、

四二二 海舟日記

五日

一出勤掛岩卿へ参殿、太政官へ出仕、今夜西郷帰京、

【参照】

海舟日記節録

一今朝西郷入来、江戸事情承候、岩下氏暫時入来、

閏四月

西郷同道、岩倉家参殿、眞邑廣澤・友孝吉井モ参殿、段々評議有之、今夜西郷へ差越候、

二日

七日

一出勤 主上大坂御出輦、

大久保一翁・僕小共兩人、大総督より被召候ニ付、早速可罷出旨申来、病氣御断、

八日

此夜田安殿御使、大総督より御書付被渡、僕小誠忠を以て御賞誉、且江府鎮撫之儀御委任可有之旨也、

一小大夫帰京懸入来、未刻前 還幸、同刻参 朝イタシ候、今晚三條家へ参殿、岩倉家入来、小大夫・後藤・廣澤・西郷・吉井・林会評不相決候、

四二三 大久保利通日記

九日

一巳刻参 朝、参与一同於小御所

明治元年閏四月

四日

天顔拜被 仰付候、於御所色々御評議被為在候、

一今日ヨリ出仕イタシ候、岩卿就御帰京、退出ヨリ参殿

一官代出席、

申来参上、尤今日林玖十郎從江戸着イタシ、委曲情実相分り候也、林モ同様参殿、徳川御処分一条、段々御

三條卿東下実地御覽之上、御所置振御委任ト申御評決ニ相成候、明日ヨリ御下向ナリ、退出懸西郷へ参ル、

十一日

一今朝岩倉家參殿、三條公へ同断、昼後小大夫・吉井入  
来、

今日三條卿御發途、西郷出立、

十二日

一太政官出席、退出ヨリ岩倉家へ參殿、小大夫・後藤・  
横井・廣澤・副島・吉井會議也、制度一条大議論有之、  
終ニ決議、官位之事、人材御採用の任ノ者御揀出、追  
テ賜之候事ニ決ス、

十三日

一岩倉公へ參殿、密封差出、官代へ出席、退出得能へ相  
訪、

四三三 秋元禮朝・酒井忠強謹慎ヲ免セラル

明治元年四月十三日

秋元(礼朝 館林藩主)  
但馬守

酒井(忠強 伊勢崎藩主)  
下野守

右謹慎被 免候事、

四月十三日

四二四 海舟日記節録

四月七日

水戸淺野作州ヨリ信太歌之助必死ヲ極メ、  
上様へ拜謁相願書付差出候ニ付、説諭可致旨申越ス、

四二五 仁和寺宮箱館裁判所総督被仰出書

明治元年四月十二日

仁和寺宮(露影親王)

箱館裁判所総督被

仰出候事、

但限三年

慶應四辰年四月

総裁 朱印

職務進退録  
東伏見宮家記

東伏見宮家記ニ云、箱館ニ云々之儀ハ被為辞之処、軍防  
事務局督如元被仰出候旨御演達ニテ、別段御達書無之、

四二六 清水谷侍従・土井能登守箱館裁判所副総

督被仰出書

明治元年四月十二日

清水谷侍従

箱館裁判所副総督被

仰出候事、

但限三年

慶應四辰年四月

総裁 朱印

職務進退録  
清水谷公考事蹟

四二六ノ二  
旧邦秘録

明治元年四月十二日

各通 清水谷侍従

土井能登守

右箱館裁判所副総督被 仰出、

井上石見

岡本文平

右同所在勤被 仰出、

四二六ノ三

土井能登守

箱館裁判所副総督被

仰出候事、

但限三年

慶應四辰年四月

総裁 朱印

職務進退録  
土井利恒家記

四二七 五代才助ヨリ桂右衛門ニ贈ル書

封状

從長崎

五代才助

桂 右衛門様

侍史

一筆啓上仕候、向暑之砌御座候処、愈以御壮栄可被成御座、珍重奉恐悦候、然は此節他国修行学生、都て御引取被仰出、高見彌一ニも一同退崎発足仕申候、就ては此内より關係いたし候對藩風帆船一条彼是致相違、

高見老人の難体と罷成、追々相談承申候付、愚存之次第申談置申候得共、此末之処当人罷出、細々可奉申上

候間、宜御指揮被成下度奉願候、且亦岩下新之丞ニも昨日崎着仕候、御沙汰之趣も奉拜承候、松岡・伊地知両

人も未帰崎不仕、同人等出崎仕候へハ、当所之諸件申談、一同罷帰り彼是御差図奉伺上度、唐国米一条之儀

も岩下より承り、則手を付置申候間、後便も申上候様仕度、価之儀ハ上々白米ニテ、百升ニ付七兩貳分位ニ

相当、当時御国許之相場より余程下料相見得申候得共、御国元は正金之融通不自由ニテ、此等之処得と勤考不

仕候ては相整申間敷哉と奉存候、宇和島藩云々一条ニ付、兩三日跡出崎、折角苦心中心ニ御座候間、是以後便

より申上候様仕度、此他細事は何れ不遠中帰国拜謁之上、可奉申上候得共、高見出立ニ付此段奉得尊意候、

恐惶謹言、

四月十二日

五代才助

桂 右衛門様

侍史中へ

追て、高見儀は何分ニも進退相究居候様子、尔来之処、当人存意之次第御聞取被下、宜御指揮被成下候

処、私よりも奉希上候、

〔桂久春氏所藏本にて校訂〕

四二八 寺泊浦へ布告

明治元年五月廿五日

寺泊浦之儀、會津・桑名之逆賊ヲ引入レ、

皇化ニ不服、御一新之 御徳政ヲ妨候儀、不屈至極ニ候、就中賊船ヲ繫置、諸所出役致候段、重疊之罪科難

逃候、仍テ官軍艦ヲ被差向、賊船ヲ一時ニ焼打候、向後村民共旧過ヲ改メ、賊徒ヲ防退ケ候へハ、前罪ヲ赦

スベシ、左無クハ再度不日ニ来リテ、玉石共ニ焚亡スベシ、浦中之者共、屹ト此旨ヲ可心得事、

但観音寺之休右衛門カ輩、賊徒相親ミ手先キト成候罪、甚可悪之所業ニ付、村中之者共、速ニ彼者ヲ斬首御託可申上者也、

天朝御軍艦

〔新編巻一〕  
寺泊浦中へ

四二九 尾州藩ヨリ届書

去月廿四日、飯山城下屯集之賊徒三百人程モ追々差迫リ、寸時モ早ク可討私旨、松代藩へ相談致シ、昼後弊

藩人数引率出張之処、賊勢追々相迫り、弥明朝決戦之旨松代藩ト相約シ、迅ニ田上村ニ夜陣相張、山手ニ篝火ヲ照シ、賊勢ヲ窺ヒ、翌廿五日六ツ時田上村へ出陣、岩井村端衝路ニ付、松代藩・弊藩大砲相備へ、一手ハ山ノ後ヨリ安田村山ノ半腹ニ相備へ候処、賊徒二人乗船致シ、安田村へ来り候之処、先鋒隊ヨリ砲発一人打斃シ、一人ハ逃歸り候、已ニ千隈川ヲ隔テ、砲丸頻発、昼後ニ至り砲声止ミ候処、飯山ヨリ使節之者差越、豊後守歎願之趣ニハ、今日マテニ賊徒城下ニ屯集為致候段、誠ニ以テ奉恐入、少人数不得止因循致候、何卒豊後守儀朝敵之御嫌疑不蒙様、松代藩・弊藩執成呉候様申出候ニ付、而藩申合セ彼是応接時刻相移候処、忽飯山城中ヨリ大砲連発、弊藩ヨリモ応接之銃砲数発一同川岸迄討入候処、千隈川雨後ニテ漲水多ク、船ハ四五日以前賊ニ被奪、向岸ニ繋有之候処、弊藩ヨリ満水ヲ游キ、向岸之船ノ纜ヲ切取り味方へ相廻シ、松代藩・弊藩同船ニテ相渡リ、猶追討仕候処、賊徒敗走、所々放火シ、残兵富倉峠ヨリ越後へ逃ケ去申候、依之松代藩・弊藩人数飯山城中へ繰入、夫々手配申談置候、翌廿六日朝、柳澤ト申越後ニ属候村ヲ放火致シ候注進有

之、松代藩兵士八隊弊藩勢一手ニ相成進軍仕候、賊徒ハ六七百人ツ、所々屯集之趣ニ御座候、追々御注進可申上候得共、右之趣尾州表ヨリ申越候ニ付、私ヨリ御届申上候、

閏四月

尾張大納言内

尾崎将曹

#### 四三〇 六番隊監軍宇都宮戦争届書

一 四月廿三日未明ニ壬生ノ城ヲ繰出シ、一番備ニ六番隊、(久宝)式番備大砲隊壹挺・臼砲打手壹挺、親軍島津式部、三番備大垣一小隊(内大砲)、都合其勢式百余人、六番隊監軍松田健四郎・兒玉平藏狙撃手人数ヲ壹町計先へ進マセ、山林草藪等ヲ探索シテ行軍ス、敵地近クナレハ、惣勢弥コ、ロヲ用ヒテ銳氣ヲ含メリ、然ルニ城ヨリ三拾町(異本三)計ナル処ノ麦畠ノ端ニ、戎服ニテ鉄砲ヲ携シモノ(四町)両三人見得タリ、即チ監軍小指旗ヲ約束ノ通振り、アトへ受次テ次第々々ニ振レリ、直ニ隊長野津七二散兵(通書)ノ令ヲナス、隊ヲ左右へ開テ早足ニテ進ム、右見ヘシ者共畠中へ走去レリ、コレ注進ト覚ユ、無間賊兵共道

向台場へ大砲ヲ押出し、左右麦島ケ中へ散兵シテ、烈敷打懸ル、大砲ヲ四五発モ打テリ、味方少シモ不屈、曳ヲウ声ニテ発射ス、四五発モ銃戦シテ、間合百間計リモノリヌレハ、彼等カ台場踏破ルヘキト決議シテ、曳々声ニテ一同ニ攻掛リ、神速ニカ、レハ賊徒恐レケン、大小銃砲ヲ捨テ敗走ス、死骸纒ニ三ツ計アリ、此時廻源五右衛門手負ス、此処ハ城下ナレハ、隊長喇叭ヲ吹カセテ人数ヲマトメ、監軍狙撃手人数ヲ小路々々へ出シテ、跡ヨリ隊ヲ散シ攻懸ルニ、彼モ大小銃砲ヲ打懸ル、永山覺太郎戦死、松元清右衛門・矢野八次郎・宇宿彦之丞手負ス、惣勢激発シテ追討スルニ、半隊ハ城掘涯、半隊ハカラ掘ヲ踏越へ、土手ノ上マテ責付タリ、彼等ハ土手ノ上又ハ竹山大木等ヲ楯ニシテ、如雨散放射ス、素ヨリ味方ハ小勢、敵ハ十倍ノ人数ナレハ、討トモノ不<sub>レ</sub>尽、進メノ喇叭ヲ吹立勢ヒ懸レリ、味方ノ兵氣強勇ニシテ、曳王声ニテ攻撃ス、シカハアレト敵ハ大勢、殊ニ要害ニ依リ防戦シケレハ、急ニ攻抜カタク、此時加納次右衛門・築地宗次郎・鶴木吉次郎・佐藤彦五郎・松井十郎兵衛土手ノ上ニテ戦死ス、伊集院小藤次・日高郷左衛門手負ス、西田要之進・岩城平右

衛門・川北六左衛門・草野直太郎堀涯ニテ戦死ス、野津七二深手ナレトモ隊中ヲ懸ケ廻リ矢強指揮ス・上原八郎・菱刈七之助・伊東正次郎・有川揚之助・横山勇蔵・脇元喜之助・安田仲左衛門・市成彦右衛門・川上彦八郎手負ストイヘトモ、彼等カ勢ノ強ヲ不恐怖、味方ノ次第々々ニ損亡スルヲ不顧、兵氣勇銳ニシテ烈敷攻撃スルトモ、少勢ナレハ手分シテ敵ノ攻其所ヲ不守出、其所必趨ノ策ヲナスコトアタハス、然ルニ喇叭ノ音後ロノ方ニ聞ユ、狙撃ヲ出シテ見ルニ、最初責取シ台場辺へ賊三小隊計、又大手門ヨリ右ノ方人家ヲ放火シテ、コレヨリモ横ヲ打テリ、城内ヨリハ弥防戦ス、右ノ両所へ纒ニ拾五六人ヲ配リテコレニ当ル、岩切彦次郎戦死ス、凡三時計ノ合戦ナレハ、弾薬已ニ尽ヌトス、朝ヨリ糧ヲツカフニ隙ナシ、敵ノウシロヲ取切レハ、弾薬・糧ヲ壬生ヨリ送ルノ道タ、レタリ、跡ヨリ各藩ノ兵、且我藩五番隊ノ兵モ未<sub>レ</sub>統、大難苦戦ナリトイヘトモ、兵氣不<sub>レ</sub>銳マコ、乍去先帰道ノ敵ヲ打破リ、味方ノ死体・手負ヲ壬生へ送り、兵ヲ引揚ケ弾薬ヲ舛シ、兵ノ勞レヲ休メ、明朝可攻落ト決議シテ静ニ繰引ス、伊地知助五郎戦死、税所龍右衛門・山下喜之助手負ス、当隊一分隊殿トナツ



テ、廻彌五右衛門指揮ス、台場壱町程ナレハ、大砲二發ヲ打懸ケ、コレヲ相凶ニシテ、当隊三分隊ハ一同曳王声ニテ迅速ニ懸破ル、賊兵散々ニ敗走ス、夫ヨリ道ノ俣ニ繰引シケレハ、無程彼等台場又ハ右之方畠中へ散兵シテ攻懸ル、此方ヨリモ繰打ス、野崎善之進手負ス、原中へ次第々々屯集スレト、イマタ当隊一分隊ハ戦累サナルニ、東ノ方本街道ヨリ彼等カ方へ打懸ル銃声聞ヘタリ、味方ナラン哉ト小指旗ヲ振ルニ、彼方ヨリモ同シ旗ヲ振ル、五番隊ナルベシト大ニ喜ンテ、狙撃手大島孫右衛門・上原正八郎ヲ遣シ見ルニ、五番隊大垣勢ナリ、当隊へ弾薬二荷ヲ送レリ、即チ銘々胴乱ニ入レル、又壬生ヨリ因州勢モ来ル、戮力シテ可攻落ト議シテ、又々当隊壱番・式番・因州勢次第二城下へ押懸ル、五番隊・長州・大垣勢ハ本街道ヨリ押カ、ル、賊兵城内へ集リテ難防戦、味方人数モ増シテ嚴敷攻撃スレハ、半時計ノ間ニ彼等カ銃声衰タリ、此時関ノ声ニテ城門又ハカラ堀ヲ乗越、攻入見ルニ、爰カシコニタ、夥敷死骸有之、賊徒惣テ落去リケル、一同ニ勝關ヲ揚テ、城内ニ家陳シテ堅ク守レリ、

但賊兵式千五百人余、マタ死骸且手負人ヲ戸板杯ニ

乗セテ運ヒシハ、数百人ナルヘシト城下ノ人々イフ、

右ハ、宇都宮城ヲ朝敵乗取致籠城候付、攻撃被仰付、中途ノ賊兵打払、城攻仕候処、城ノ要害ハ勿論、彼等ハ大勢ニテ手強致防戦、四ツ時計ノ合戦ノ故、已ニ弾薬モ乏敷罷成、且敵三方ヨリ取囲ミ、味方次第二損シ旁大難苦戦ニテ御座候得共、遂ニ城ヲ攻落シ候次第、右ノ通御座候、各隊ノ御届ハ別段申置筈御座候得共、当隊迄形行御座候、以上、

監軍

松田健四郎

兒玉平藏

右御届ノ草稿ト見へ、兒玉平藏宿許ニ差贈レルヲ写シ置ヌ、

#### 四三二 因州藩ヨリ届書ノ写

戊辰四月十七日、野州・下総辺ノ賊徒既ニ結城ヲ屠リ、勢ニ乗シテ宇都宮へ迫リ、城中兵士器械共乏シク、不得止自焼シテ、館林或ハ古河へ走り候旨急報有之、右

二付因・土兩藩へ出兵被 仰付、

同十八日寅ノ刻市ヶ谷尾州邸ヨリ三小隊、大砲一分隊  
繰出シ、同二十日壬生城へ着、是ヨリ先キ去月中旬頃  
ヨリ會賊歩兵其外種々ノ惡徒共、兩総・二野ノ間ニ出  
没シ、所在ノ小諸侯或ハ土豪ナドヲ恐嚇シ、金穀・兵  
器ヲ横奪シ、所々ノ要地ニ据ノ聞ヘアリ、且結城之城  
主水野日向守其養父ト隙アリ、一旦城ヲ出テ同国小山  
近傍ニ潜匿シ、彰義隊ノ暴徒ト語り合、三月廿六日結城  
ヲ攻テ其養父ヲ逐ヒ、會賊ト合シテ宇都宮ヲ屠ラント  
スルノ勢不日ニ逼リ、宇都宮ノ重役縣勇記ヲ以テ、火  
急ニ御總督府へ歎訴ニ及ヒ、爰ニ於テ大監察香川敬三・  
小監察平川和太郎ニ鎮撫方被 仰付、薩藩有馬藤太・  
長藩祖式金八郎・土藩上田楠次へ軍略御委任、右三名  
彦根藩・須坂藩及ヒ岡田將監ノ兵三百余ヲ率テ、四月  
二日板橋御本宮ヲ發シ、同五日有馬・上田兩人、越ケ  
谷駅ヨリ兵ヲ潛メテ急ニ流山ノ賊ヲ襲フ、賊徒狼狽シ  
為ス所ヲ知ラス、悉ク兵器ヲ獻シ降伏ス、賊魁大久保  
大和本名近藤勇捕ヘテ御本宮へ送ル、  
四月六日有馬・祖式ノ兵士四五十人ヲ率ヒ、結城ノ城  
ヲ攻撃シ、賊徒敗走、獲ル所ノ器械頗ル多シ、祖式ハ

留テ城ヲ守ル、宇都宮四方三四里ノ間、土民動揺所々  
ニ屯集シ、屋ヲ摧キ火ヲ放チ、乱暴至ラサル所ナシ、  
依之官軍ノ入城ヲ促スコト頻ナリ、同七日香川・有馬  
等宇都宮ニ達シ、土民ノ人氣少シク安穩ナラシム、自  
此會賊ハ日光山接近ノ村々へ屯集之聞ヘ有之候ニ付、  
同八日ノ朝兵隊ヲ兩道ニ分チ、香川ハ日光本街道ヨリ  
進ミ、有馬ハ宇都宮ノ右ニ出レハ、賊輩既ニ去リ、香  
川ハ斧市駅ニ進ム頃、日光山ノ僧侶板倉伊賀父子伏罪  
状ヲ捧ク、

同九日右板倉父子軍門ニ來テ降伏シ、因テ同十日宇都  
宮へ御預ケ、尔後香川始メ日光山ヲ巡邏シ、宇都宮へ  
帰ル、既ニシテ日向守再ヒ賊徒ト語合結城城ヲ襲フ、  
祖式ノ兵、衆寡不敵城ヲ捨テ走ル、賊徒兵威俄ニ張り  
勢ニ乘シテ宇都宮ヲ襲フ、是モ又兵寡シテ難守城ヲ燒  
テ逃ル、

同廿一日壬生城ヨリ南方二里計ニ、安塚及幕田ト申処  
凡半里ヲ隔テ、其間ニ賊兵千名許出張ノ由相聞ヘ候、  
廿日ハ弊藩先鋒日ナレハ奇日長州 四日弊藩山國隊一小隊、大久  
保隊一小隊、有馬・戸田合セテ一小隊、大砲三門末ノ  
刻頃推出ス、土州モ一小隊差出シ置候処、地形甚不便

且賊兵多人數故、猶又繰出候様報知有之、土州ヨリ夜半頃一小隊ヲ出ス、又丑ノ半刻土州全軍進發、河田左久馬ハ壬生城ノ保守覺束ナシト曉迄守禦シ、廿一日黎明全隊皆進ミ、安塚ヲ隔ルコト十丁許ノ地ニシテ、互ニ發砲、官軍一旦勝利ノ処、賊兵盛リ返シ勢甚盛ナリ、官軍浮足ニ相見ヘ、弊藩手負・死傷ヲ荷ヒ帰ルヲ見、何レモ今日ヲ死期ト決シ激励奮闘十分苦戰、左久馬一小隊ヲ率ヒ、呐喊シテ進ミ、左久馬自ラ拔刀シ大声シテ曰ク、退ク者ハ他藩ト雖トモ死ヲ免サスト、依之 官軍進テ奮戰ス、賊兵堪兼少シク引揚レハ 官軍其虚ニ乗シ、曳々声ヲ出シ尾撃ス、弊藩及附屬ノ兵幕田・西河田迄一里許ヲ一息ニ追立レハ、賊兵不殘宇都宮ヘ引退ク、因テ暫時休兵喫食ス、此日薩藩有馬藤太其藩ノ兵ヲ將テ壬生城ヲ守ル、然ルニ賊兵雀宮ヨリ潛ニ城下ニ逼リ、市中ヲ放火シ、且城内ヘ發砲スト雖トモ、有馬能ク防禦ノ術ヲ尽シ、賊志ヲ得スシテ去ル、此日有馬ナカリセハ、一城灰トナルベシ、是ニ於テ諸隊喫食ス、是ヨリ直ニ宇都宮ニ逼リ必死決戰ノ意アリト雖トモ、兵卒疲勞、且洪雨ニ因テ衣服沾濡、寒氣肌ニ徹ス、不得止一旦壬生城ニ入ル、此日ノ死傷並ニ獲

ル所左ノ如シ、

分捕

一旗 会東照大権現 一流

討死

石 脇 鼎

吹上兵隊兵士

原田富三郎

寺村幸太郎

足輕

横地 元助

山國隊

田中淺太郎

深手

刀疵吹上兵隊

廣瀬長次郎

砲疵右

西村 要藏

林崎久右衛門

同隊山國

高室誠太郎

明治元年(1868)

薄手

高室治平

池田相摸守家来

松村源之丞

松本兵隊

田邊覺左衛門

大久保駿河守隊

菊池房吉

山國隊

辻肥後

水口康太郎

同廿三日薩藩・大垣藩ヨリ宇都宮城ヲ攻ントス、弊藩ノ兵モ壬生ヲ発シテ進ム、凶ラス安塚ニ於テ賊兵ニ衝当リ、一戦シテ賊ヲ追崩シ、破竹ノ勢ニ乘シテ急ニ宇都宮城ニ進撃シ、薩二小隊・弊藩一小隊相合シ、一同叱咤奮戦、申ノ刻ヨリ同半刻ニ至リ竟ニ一城ヲ屠ル、斯日官軍死傷左ノ如シ、

討死

砲隊長

足羽篤之助

河田左久馬家来

三崎次郎

天野祐次配下

石田仁三郎

松本藩兵隊

尾花忠兵衛

松澤銀齊

吹上人數

鈴木角之丞

熊倉源吾

深手

佐分利鐵次郎配下

竹内八百吉

後藤鐵五郎

旗持足輕

榮吉

久保鶴吉

刀槍砲疵

永多勘藏

薄手

天野祐治配下

岸本又市

岡山忠三郎

山國隊

草木榮次郎

吹上人數

大竹作彌

渡邊作十郎

右之通ニ御座候、此段御届申上候、以上、

因幡中将内

閏四月

河瀬萬吉郎

#### 四三二 長州藩届書之写

閏四月

一東山道先鋒へ兼テ宰相家来出張兵之内、一中隊総・野

国辺へ為心援被差出、四月廿三日朝五ツ時下総国結城

城下発足、宇都宮へ進候処、同日朝四ツ時頃ヨリ、壬

生通り宇都宮へ進候薩兵其外、安塚ト申処ヨリ賊徒ニ

行逢ヒ、追々進撃城下迄相迫候処、賊兵裏ニ討出及苦

戦、漸切抜引取候途中へ、右弊藩中隊ニ出会ヒ、薩州・

大垣・因州等諸手軍議相決シ、八ツ時ヨリ再ヒ賊ノ根

拠宇都宮城へ押寄候処、城下口へ賊ノ斥候隊ニ三十人、

東照宮ト書記有之旗ヲ立備居候ニ付、暫時ニ打敗相進

候処、城並東南之裏ニ当リ八幡明神ト云フ二山ニ、賊

勢盛ニ備居候ニ付、城大手・搦手彼二山正面等ヨリ同

時ニ嚴シク打掛、余程激戦ニテ賊大ニ潰へ、暮六ツ時

城及二山共終ニ攻落、残兵日光辺へ敗走ニ及ヒ、大勝

利ヲ得、賊死人百数十人有之候、官軍ノ内於弊藩ハ、

嚮導河村源之允・鼓手永田峰太郎ト申者、兩人戦死仕

候段、出先ヨリ注進候ニ付、此段御届申上候、以上、

長門宰相内

閏四月

寺内暢三

(維新日誌にて補正)

#### 四三三 薩州六番隊へ感状

明治元年閏四月

御感状

薩州六番隊江

今度江戸脱走ノ賊徒及會賊等、野州表所々ニ屯集致シ、

其勢甚猖獗ノ処、其藩人数速ニ馳向ヒ、与諸藩ト合謀  
協力、屢及奮戰賊徒悉敗散、国内遂ニ令鎮靜候条、神  
妙ノ至感入候、尚此上勉励可抽忠戰候事、

東山道先鋒

閏四月

總督

同

副總督

「岩倉殿兄弟当廿歳・二十五歳」

四月廿三日宇都宮復城ノ砌、衆寡ノ勢モ候処、大垣一  
同令發向、隊中手負・戰死不少、終日列戦ノ故ヲ以、  
遂ニ賊徒令落去候、旁ノ功勞不少段總督府ヘ相聞ヘ、  
別紙ノ通御感状被成下候条、為後証如件、

閏四月十七日

島津式部

六番隊長

野津七二殿

其外兵士中

四三四 大村藩届書写

明治元年閏四月廿七日

四三四ノ一

下野・下総辺賊徒猖獗官軍苦戦之趣ニ付、津藩並弊藩  
兵隊、四月廿日江戸ヨリ進軍、同廿五日宇都宮着陣、  
然ルニ同所既ニ回復、賊兵散乱致シ居候得共、猶江戸ヨ  
リ彈藥取寄之聞ヘ有之候、仍テ運送之道絶ノ為、津藩一  
同關宿<sup>(千葉縣)</sup>ヘ転陳之処、賊徒上総辺横行之由ニ付、閏四月  
四日同所相發、粕壁ヨリ草加<sup>(埼玉縣春日部市)</sup>・新宿<sup>(東京都)</sup>順々進軍、同七日  
賊兵上総五井川<sup>(千葉縣市原市)</sup>辺ヘ相見候ニ付、八幡村ニテ軍配可致  
処、既ニ彼ヨリ砲發ニ付、諸藩一同合撃、賊兵致敗走  
候ニ付、転戦二里余姉ヶ崎城<sup>(千葉縣市原市)</sup>乘取、此日同所宿陣、弊  
藩兵隊傷者二人、同八日諸藩共ニ木更津口ニ進ム、抑  
同所ハ是迄賊兵巢窟ニ候処、去七日之一敗ニテ、所  
在之賊徒尽ク畏縮、諸方ヘ散乱シ、房総辺鎮靜相成候  
旨、右ニ付總督之命ニ依リ、弊藩兵隊一先江戸表ヘ引  
取申候、然処東南為鎮靜副將大田喜<sup>(千葉縣)</sup>ヘ御進軍ニ付、右  
兵隊之内一分隊ヲ分チ、附属仕候段出先ヨリ注進仕候  
ニ付、此段御届申上候、以上、

閏四月廿七日

大村丹後家来<sup>(純密)</sup>

中尾静摩

四三四ノ一  
一十八日、五番隊並大垣一中隊、長州同断板橋出立ニテ、

越ヶ谷へ一泊、翌十九日關宿へ着陳相成候処、近辺へ屯集ノ賊兵關宿城ヲ襲ノ説相聞得候ニ付、利根川筋渡舟都テ引揚、川路ヲ絶テ賊ノ応接ヲ立切、翌廿日晝關宿出立イタシ、境宿ニヲヒテ三藩軍配ヲ定、懸切押前之手順ヲ立、長州之斥候式拾人、大垣同斷、薩摩三拾人ヲ差出テ、賊巢ヲ探索為致候処、賊兵モ關宿ヲ志シ出懸候折柄、岩井馱手前ニヲヒテ斥候隊ニ出會候処、直様賊兵ハ散兵ニ相開キ發砲致候故、斥候隊モ是ニ応シテ、散兵ニ相備攻撃ニ及候故、大垣・薩摩ノ勢ハ惣人数ヲ以撃掛、互ニ大砲相交砲戰ニ及候処、九時頃賊兵敗走之色相見得、十時ニハ岩井馱迄押詰、官軍大勝利ヲ得タリ、長州ノ惣勢ハ後陳之押前ニ候処、戰終テ忍勢跡ニ続テ岩井宿ニ着タリ、賊兵百人余級ヲ打取レリ、味方ノ戰死纔三人ナリ、

長州戰死

田中甚吉

薩摩薄手

瀬戸山吉兵衛

大垣手負

松山幸五郎

同

鶴木五左衛門

薩摩戰死

河野壯八

夫戰死

藤助

深手

野崎喜左衛門

四三五 洲邊直右衛門戰況ヲ黒田了介ニ報スル書

明治元年閏四月廿八日

(新潟県)

一去ル廿五日晝、

(新潟県)

十日町發軍、六日町ヨリ一里程先キ塩

澤村<sup>上</sup>へ進撃、六日町関門へ突入候賦ニテ、尾兵一小隊・

飯山一小隊曳列レ進撃候手配ニテ、長州ニハ松代ノ兵

一小隊曳列、十日町ヨリ直ニ六日町進撃ノ手配ニテ、

双方同町ヨリ攻撃候処、昨廿四日三國時戰ニテ、上州

筋ヨリ相進候官軍之為ニ敗走、小出島<sup>同上</sup>ノ様落去候由ニ

テ、賊一人モ不致屯集、依テ暫時六日町へ兵士休息セ

シメ、川船ニテ上田川<sup>同上</sup>ヲ浦佐ノ宿へ長・薩ノ両藩撃下、

尾兵ヲ以、陸道ヨリ為致攻撃、同日ハ浦佐へ宿陳、同廿六日早天ヨリ大雨故、同所へ休息セシメ、尾兵ヲ以堀内峠小出島ヨリ突出シ、要地故彼地此方ヨリ取固メ可然迎、右同兵ヲ以為致固衛候処、尾兵不計モ堀内駒へ繰込候段報知イタシ候付、速ニ飯山一小隊並薩兵半隊丈為応援為致發陳候、同廿七日晚浦佐發陳、小出島陳屋攻掛リ候、手谷堀内村へ繰込セシ尾・飯・薩之兵、上田川ヲ隔横合ヨリ銃撃ノ手配イタシ、双方当朝六ツ半時ヨリ賊營へ進撃イタセシニヨリ、賊川口上田川堤へ砲台ヲ設ケ、賊頻ニ防銃ニ付、味方敵敷致發砲、堀内ヨリ遣シ候兵ハ、上田川ヲ隔浦佐ヨリ進ミ、長藩ハサナシ川ヲ押渡シ、四方ヨリ賊營ヲ取巻キ致激戰候処、終ニ賊敗走、凡人数二百人計ニテ守リ、賊徒六十里越ヲサシテ落去候故、後ヲ慕フテ致進撃候処、四方へ散乱敗北致候付、味方人数引揚手負ヲ改、四日町ノリへ宿へ飯山兵一小隊、小出島ニテ松代ノ兵ヲ以押サセ、兩藩並尾兵ハ堀内村へ致転陳候事、

内

一味方手負・討死三十人

長十五人 尾一人 薩十四人

一鬪争ハ六半時分ヨリ相始リ、五ツ時分ニハ戰仕舞候事、  
 一昨廿六日小椎谷（小十谷也）ノ方へ相当リ、砲声相聞得候処、彼ノ表モ昨日ヨリ戰相始、悉ク勝利ノ由、別紙長州様方ヨリ御サシ遣相成候間、御披見可被下候、是ハ岩村精一郎ヨリ報知ニテ御座候、

一病院ハ浦佐ノ宿へ相立、養生方行届候様相達置候、尤醫師相少キ致心配候間、其表ヨリ被參候様御取計可給候、

一当駅ヨリ諸方ノ兵繰込候上、押ノ兵睨ト相備、長岡ノ様進撃ノ心組ニ御座候、併今日小椎谷へ差越、岩村等へ示談可致謀計可相建含ニ御座候、先ハ右戰爭之次第荒増申進度、如此御座候、以上、

堀内宿陣

閏四月廿八日

淵邊直右衛門

黒田了介（清徳）

四三六 大垣藩ヨリ届書之写

明治元年閏四月十日

東山道先鋒へ出張為仕置候采女正人数之内、（戸田氏共、美濃大垣藩主）去月廿二



日野州小山駅迄相進候処、賊兵壬生城へ襲来甚危急之趣因州勢ヨリ申来候ニ付、不取敢同所へ駆付候得共、既ニ戰爭後ニ御座候、然ル処賊兵宇都宮城ニ楯籠居候由ニ付、翌廿三日朝薩州勢ト合兵進軍之処、城下七八丁手前ニテ及接戦、頗ル苦戦ニ御座候得共、遂ニ討退ケ、賊兵不殘城内へ引籠候ニ付、直ニ二之丸迄討入候、然ル処薩州・長州・弊藩三手之斥候隊モ、城外ニテ一小戦致シ、同所へ落合来候ニ付軍議ヲ決シ、薩州勢ハ搦手ヨリ攻寄、長州勢ト弊藩人数ハ大手へ向ヒ及發砲、夫ヨリ必死ヲ極メ、諸手救心呐喊奮撃、因州勢モ応援致シ、遂ニ向背ヨリ城中へ乗入、賊兵ハ尽ク日光山ノ方へ落行申候、乃日暮ニ至リ総軍凱歌ヲ奏シ候由、尤討取・分捕ハ取調之上追テ可申達之旨、急便ヲ以申越候、当手之討死・手負ハ別紙之通ニ御座候、此段於出先ニ、御総督府へ御届可申上事ニハ御座候得共、不取敢御届申上候、以上、

閏四月十日

戸田采女正家来

壮合諸之介

柴崎秀左衛門

討死

手負

大砲隊

大島孝次郎

高木辰之助

先手組

岩佐幸之助

大砲隊

高橋養之助

深手

壯士隊

栗田彌保次

同

兼用隊

山田喜太郎

同

清水藤太郎

同

大橋源之助

同

先手組

小寺庄次郎

同

四三七 還幸御沙汰書一通

四三七ノ一  
明治元年閏四月

此度大総督官ヨリ言上之趣モ有之、徳川慶喜降伏謝罪

奉仰

天裁候ニ付テハ、非常至仁之

叡慮ヲ以、寛典之御処置可被 仰出、依之来七日還幸

被為 在候旨、被 仰出候事、

閏四月

四三七之一  
元年閏四月

来ル七日 還幸卯刻

御出輦、天神橋之 御休紀州屋敷、右浜ヨリ

御乗船御座船肥後藩船、引船五艘之事、 御一泊淀城

同八日卯刻

御出輦、 御昼城南宮 御小休六条東殿

還幸、

内侍所、来七日寅刻

御出輦、 御休守口 御昼佐多

御休枚方 御泊淀城、

同八日卯刻

御出輦、 御昼城南宮 御小休六条東殿

還幸、

御道筋総テ

行幸節之通ニ候事、

右之通被 仰出候付、御警衛万端

御出立之節之通、可被相心得候事、

一外ニ一通ハ行在所日誌第六章ニ有之、略ス、

島津忠義家記

四三八 神仏分離達示

達示元年閏四月四日

今般諸国大小之神社ニオイテ、神仏混淆之儀ハ御廢止  
ニ相成候ニ付、別当・社僧之輩ハ還俗之上、神主・社  
人等之称号ニ相転、神道ヲ以勤仕可致候、若又無抛差  
支有之、且ハ仏教信仰ニテ還俗之儀不心得之輩ハ、神  
勳相止立退可申候事、

但還俗之者ハ、僧位・僧官返上勿論ニ候、官位之儀

ハ追テ 御沙汰可有之候間、当今之処、衣服ハ風

折烏帽子・浄衣白差貫着用勤仕可致候事、

是迄神職相勤居候者卜席順之儀ハ、夫々伺出可申候、

其上御取調ニテ 御沙汰可有之候事、

四三九 彦根藩關由太郎申達書

明治元年閏四月三日

宇都宮へ御預ケ被置候板倉父子儀、四月十九日退城之節打捨候由、報知中ニ認有之候間、此段一応申上置候、以上、

閏四月三日

(并伊直憲)  
彦根中將内

關 由太郎

弁事御役所

四四〇 佐土原藩届書写追録

四月廿三日下総国流山辺へ屯集之賊徒入府之企ニテ、千住筋へ押出シ候間へ有之候間、備前藩申合速ニ出兵致シ差止候様、大総督府ヨリ被 仰渡候ニ付兩藩申談、即日千住へ出張之処、此地無別条、松戸口ヨリ入府ノ聞有之候間、廿四日未明ヨリ新宿ノ方へ転陣、果シテ一群松戸へ留リ居候ニ付、田安鎮撫使・須本備前・弊藩応接方一同談判之処、賊無異儀献兵器降伏シ、事落

着仕候、此徒備前藩ニテ檻護仕候、然処亦一群榎戸口間道ヨリ千住江掛リ、入府之由相聞へ候、依之弊藩兵隊千住ノ方へ繰廻候ノ処、賊既ニ千住宿ニ入、糧食ヲ遣ヒ居候ヘトモ、戦地不便成ル故千住川ヲ渡リ、小塚原ノ方へ引揚、要地ニ手配リ致シ置、応接方三浦十郎・町田吉之進兩人、田安鎮撫使同伴千住へ差越、賊ノ隊長ヲ呼出シ糾問仕候処、只管恭順之旨趣申立候ニ付、先兵器ヲ献シ恭順之実ヲ可証ト申論候得共、群徒不服時刻遷延ニ付、弊藩応接方緊敷談判致シ、遂ニ兵器ヲ相請取り、賊徒姓名人別相改事相定候、其中薩兵一小隊為応援馳付、兩藩ニテ賊徒檻護取締仕置、兵器ハ大総督府へ差出候、同廿五日薩兵隊引揚申候、同廿六日大総督府ヨリノ御下知ニテ、賊徒田安ノ手へ引渡、事濟相成申候、然処下総国木更津屯集之賊徒、追々押出候由、依之須本藩へ為応援、八幡へ出張被 仰渡候間、備前・伊賀・弊藩兵隊同所へ可相会旨、大総督府ヨリ御下知ニ付、後四月朔日松戸へ転陣、八幡ニテ須本藩応接之処、謝罪入府之儀難訴致候ト雖、兵器之儀ハ徳川ヨリ相渡品ニモ無之、銘々自物ニ候間、差出候事不相成由申募リ、穩便ニ事可濟之勢ニ無御座候、依之三

藩申談決戦之致用意、且今一応三藩ニテ応接可仕哉之旨、大総督府へ相窺候処、田安・須本両藩へ猶亦説得之儀被 命、翌二日及応接候得共、賊徒承伏之体無之候間、此上ハ三藩ニテ取結可致談判、乍然最早破裂ト相見へ候ニ付、八幡口備前、貝塚村伊賀、行徳口筑前、鎌ヶ谷弊藩、四方ヨリ舟橋宿賊徒宿陣へ仕寄せ、応接事不成時ハ、八幡備前陣ニテ砲声ヲ発シ、ソレヲ相圖ニ惣軍攻掛リ可申手筈相定、同二日夕弊藩ニハ鎌ヶ谷村迄進軍、同三日未明、三藩応接方八幡備前陣へ集会之処、賊不意ニ襲来リ砲発戰爭相始、伊賀陣同断之由、右戰爭ノ砲声ヲ弊藩ニテハ合図之砲声ト相心得、疾速鎌ヶ谷ヲ出テ兵ヲ進候処、小村ハヅレニ一群之賊徒手配リ致シ居候間、会釈モナク押掛砲発、賊ヨリモ砲発、互ニ砲戦烈敷、味方曰砲無透間打込、砲丸破裂賊兵数多殺傷、賊是ニ狼狽四散、小村之中へ逃入候ニ付、無透間追詰候処、賊兵落失セ一人モ不見候間、是ニテ暫時息ヲ次キ、斥候ヲ出シ探索之処、金杉村大畑中ニ賊兵七八百人許諸所撒兵、台場ヲ設候由致注進候ニ付、疾速繰出シ味方麦畑之中ニ撒兵ヲ敷キ、大砲・小砲打出シ砲戦烈敷候処、味方寡兵敵ハ多、敵ヨリ来ル弾丸無

透間、味方頗ル難儀ニ及ヒ、各必死ヲ極メ、麦畑ノ中ニ出没シ、透ヲ計リ砲発致シ凌キ居候処、賊兵百計後へニ廻リ、引包ントノ計策ト相見へ候間、急ニ隊ヲ分チ烈敷打立候処賊引退、此間大砲・臼砲烈敷打出シ、惣軍閩ノ声ヲ発シ押掛候処、賊足並乱レ、狼狽之体相見へ候故、味方氣ヲ得、麦畑ノ中ヨリ踏込々々砲発、遂ニ逐崩シ賊兵散乱、村中ヲ指逃入候、跡ヲ慕ヒ逐詰、村中ニテ三人ヲ打斃シ、賊氣奪ハレ村中ニ不保得、散々ニ敗走ス、味方此戦殊ニ苦戦ニテ、大ニ疲レ候間、暫時氣ヲ養ヒ、賊ノ捨置タル兵糧酒菓ヲ奪ヒ、銘々飲食居候処ニ斥候馳来、賊兵舟橋へ屯ス手配リ最中ナリト注進ス、此時味方敵ノ十分一二不足ノ寡兵、殊更今朝ヨリ兩度ノ戦ニ氣力勞レ、外ニ応援モナク、勞危地ニ陥入候トハ存候へトモ、眼前ノ賊兵可見遁ニ非ス、各必死ヲ誓ヒ、敵ノ備未定ヲ討ベント、揉ニ揉ンテ馳セ、舟橋へ押掛リ、兵ヲ三ツニ分チ、正面ノ大道ヨリ大砲ヲ進メ、銃隊一手ハ山手ニ廻シ、一手ハ海手ヨリ寄せ、先大砲ヲ発シ、小銃ヲ交へ無透間打立候処、賊ヨリモ烈敷打出シ、互ニ大道ニテセリ合候中、左右ノ奇兵一時ニ砲発、無二無三ニ攻立候処、賊軍大ニ乱レ、器械

要具ヲ捨テ大ニ敗北ス、雖然殘兵町家ニ潜伏、宿中所々ニ出沒砲發致シ、戦止ムヘキニ非ス、味方寡兵殊ニ勞武者ニテ、盛り返サレテハ勇々シキ大事ト心得、忽チ舟橋ヘ火ヲ放チ焼立候処、此日風烈宿中一時ニ燃ヘ上リ、賊忍得ス所々ヨリ逃候ヘトモ、矢頃之分討留メ、長驅ヲ禁シ兵ヲ引揚ケ、浜手ニ屯シ休息致居候処、薩兵二小隊為援兵馳來ル、其以前筑藩ヨリ舟橋手前ニテ殘兵ト接戦、難儀ニ及ヒ候由ニテ、援兵ヲ乞來候故、一分隊遣候得共、不及戦引揚申候、此日ノ戦以寡當衆候故、敵ハ打捨ニ致シ、首級ヲ揚分散致間敷旨堅誓約仕候故、敵ノ死亡点檢ニ不違候得共、凡百人余モ可有之ト察申候、弊藩討死・手負左条ニ相記候、此夜舟橋ヘ宿陣、猶殘賊可追討ト薩之援軍申合セ、同四日檢見川ヘ進軍、同五日佐倉ヘ進軍、此処ニテ探索ノ処、木更津ヨリ真里谷ノ方ヘ賊軍本陣ヲ構ヘ候由、就テハ殘徒此所ニ潜居候哉ト相量リ、同六日千葉宿ヘ進軍、然処三日ノ戦争大総督府ヘ相聞ヘ、速ニ御追討可有之トノ事ニテ、副総督御出軍之趣注進有之、薩・長先鋒トシテ出軍、大村藩野州ヨリ会軍、薩遊撃隊為応援會軍、賊之消息探索之処、八幡辺迄押出、五井川之要害ヲ取り、

防戦手配致シ候由相聞ヘ、諸手分配相定リ、同七日晚八幡ノ方ヘ兵ヲ進メ、各攻口ヨリ押掛リ候処、賊斥候薩遊撃隊ヘ砲發、互ニ砲發相始リ、諸手惣掛リニテ砲戦、遂ニ五井川ヲ奪ヒ、姉ヶ崎迄追撃、陣屋ヲ乘取、賊大ニ敗走、弊藩ニハ五井川ノ川上ヨリ横合ニ押掛リ砲戦、姉ヶ崎近辺村中ニ賊兵ノ内六人追詰、二人生捕一人自殺、外三人森陰ヘ逃去リ候、行衛見失ヒ候、自殺之一人ハ撤兵隊長之者之由、生捕之者申出候、此戦弊藩手負後条ニ相記候、同八日木更津ヘ薩・長・伊賀・大村・弊藩、真里谷ヘ備前・伊賀之分隊差向候得共、賊一人モ不見、皆陸地亦ハ海路ヨリ、落失セ候由相聞ヘ、近辺潜伏之模様無之、一先鎮静之様子ニ付、同日ヨリ諸藩兵隊、追々引揚候旨申談、副総督御陣ヘ御届申上、同十一日弊藩兵隊一応江戸迄引揚申候、兩日之戦争分捕等数多御座候得共、混雜中調兼候間、追テ委細可申越旨、関東出張之者ヨリ申越候ニ付、此段御届申上候、以上、

後四月

後四月三日舟橋戦争之節

即死 銃手 荒毛次右衛門

右同

夫卒 巳之助

右同

右同常 吉

浅手

銃手 白坂政兵衛

同月七日姉ヶ崎戦争之節

深手

銃手 長友徳次郎

右之通御座候、以上、

島津淡路守家来

後四月

富田三蔵

(慶明雜録にて補正)

#### 四四一 土州藩届書写

閏四月

一安塚戦争ノ後、賊徒退テ日光山へ楯籠候ニ付、先鋒繰出、即宇都宮ヨリ砲隊北村長兵衛、並日比虎作・平尾左金吾・宮崎合助等三小隊、祖父江<sup>ソフエカキ</sup>可成指揮役ヲ以押出シ、壬生城ヨリハ山田喜久馬・二川元助・吉松速之助・谷神兵衛・谷口傳八・小笠原謙吉・山地忠七等七小隊、総督板垣退助、大監察谷守部、小監察別府彦九郎進軍、去月廿九日今市駅へ着陳之処、賊徒瀬川ト云処ニ関門並砲台ヲ築キ待構候趣ニ付、直サマ押寄及戦

争候処、賊小林ニ散布シ処々ヨリ砲発、手負・死人有

之候得共、日暮ニ至リ賊巢衝突之儀ハ明日ニ期シ、右

駅迄引取、守部儀四五人相率ヒ致斥候候処、僧二人日

光ヨリ参リ、暫時進軍留異度段申出候得共、私ノ退軍

決テ不相調、乍併神廟放火之儀ハ不忍処ニ付、賊徒督

責致シ、進テ我軍ニ当ル欵、又ハ軍門ニ降伏スルカ決

策致シ、神廟灰燼ヲ免レ候様、説諭可致旨申聞候処、

二僧承服致シ、立帰リ互及談判候処、賊徒言語ニ窮シ

即夜退散、翌朔日吾軍進撃之処、漸手負ノ者五人残り

居、討取申候、此夜死傷並分取等、別紙ノ通御座候、

尤於戦地如何御届仕候哉、巨細不相分候得共、申越候

俟一応御届申上候、以上、

山内土佐守内

閏四月

小林左司馬

毛利恭助

#### 四四二 奥羽鎮撫総督府参謀ヨリ太政官軍防局へ

ノ書状

閏四月

聖上益御機嫌克被為成御座恐悦ノ至奉存候、去月十八

日付ノ書面到来、藝州・小倉・久留米、奥州・加州・越後  
へ出張被仰付候段致承知、且仙臺出張之兵余リ夥敷長  
陳ニテ、費弊ニ堪兼可申候付、可然指揮可致御氣付ノ  
程、是又致承知、然処仙臺着ノ上、彼ノ藩形勢相察候、元  
来仙臺一藩ニテ會討先鋒ノ由、重役三好監物ト申者へ、  
一兩人ノ見切ヲ以願立事ニテ、仙臺鬪藩家老杯ニ於テ  
ハ、決シテ同心ノ者無之訳ニテ、仙臺着陳ノ砌、會討  
支度モ不致、国論沸騰、監物ヲ敵罪亦ハ暗殺ニモ可及  
勢ニテ、本陳養賢堂近辺ハ、度々付火等イタシ候次第  
ニテ、理解申聞候得トモ、国法ヲ以解語イタシ、今ニ  
出役不致候、右ノ形ニ付中将総督府ヨリ被召出、当家  
老共へモ篤ト申聞、漸々會討出兵ノ期限相定候内、関  
東ノ御所置到来有之、弥以相定候得共、国境迄出兵ノ  
ミニテ、會境へ繰込不申候付、十四日ヨリ出先へ出張、  
追々進撃申付、十八日ニハ仙臺瀬上主膳一手五六百人  
ヲ以、會境土場ト申所へ討入候得共、嶮岨成山路十町  
計ヲ隔砲撃、遂ニ二三町計ノ所迄繰詰候へ共、不練兵  
故激戦ニ至、夕方引揚申候、手負ハ一人、此所へハ押  
兵差置、亦中山・岩筵ト申所ニ出張、当月三日討入、  
石筵口ハ右松澤掃部之輔一手半夜ヨリ出兵、賊ノ出張

固屋ニケ所陳屋攻落シ焼払候得共、賊ハ要地ニ抛リ候  
故、遂ニ相引ニ相成申候、討死一人、手負少々、中山  
口ハ伊達安藝一手四五百人、櫻田敬助一手四十人討入、  
櫻田一手ハ進入番所一ケ所攻取、引繞安藝一手之内小  
隊相遣候得トモ、其余ハ兵不遣、賊山ノ上ヨリ砲撃候  
故引上ケ申候、手負少々、同四月五日靈櫃ト申所へ、  
伊達筑前一手五六百人討入、山上ニテ令砲撃候得共、  
地利悪敷候テ空敷引取申候、同六日會正面入口白川口  
へ出張、進撃ノ手配イタシ候得共、不練兵故少人数ニ  
テハ進ミ不申、只多勢ヲ頼ム人氣故、自然出兵夥敷相  
成申候、米澤藩ハ始ヨリ會ト使節ナド往来、頻リニ謝  
罪ノミニ尽力ノ様子ニテ、度々進撃申付候得共、彼是  
事ニ托シ今ニ會境へ出兵不致、夫ニ付仙臺兵へ米澤口  
出張人数、自国ノ境ニ滞陳罷在候、米澤口ヨリ白川迄ハ  
南部美濃守一手、外ニ用立兵少ク相見得、幾千万人ト  
申候テモ、薩・長杯ノ兵トハ違、精兵三分ノ一モ無之、  
右ノ次第二付、仙臺藩ハ只大藩多人数名ノミニテ、畢  
竟會討先鋒モ名ヲ以被仰候訳ニ相成、其上総督府ニモ  
薩・長少々計ニテ、兵力乏敷故、日夜苦慮罷在、且又  
澤殿へ附屬庄内へ罷越候薩・長兵、先月廿三日百五六十

人ニテ庄内へ討入、城下ヨリ五里程前へ、清川ト申所へ関門相建、砲式拾四門・兵士千人計ニテ相守候処ヲ攻取、手負・即死等有之休兵候処、賊兵官軍後脇六十里越ト申所ヨリ、国外へ人数差出、長岡・柴橋・宇治口ト申代官陳屋ヲ攻取、追々人数相待、当月四日天童藩へ押寄放火、武器等奪取候報知有之候付、仙臺藩へ応援兵申付候得共、會討ニサへ人数不足ト云テ、出兵六ヶ敷候付、皆薩・長・越後川口へ最早出張可致候付、彼ノ口ヨリモ庄内へ討入候様申遣候、関東へモ少々人数被差越候様申遣候得トモ、宇都宮ノ殘賊所々へ屯集、時々小戦有之候付、先達テモ申越候通、関東八州・奥羽ノ儀ハ遊遠広野・譬へ人一旦討破候テモ又灰蜂起、急々消滅ハ六ヶ敷様ニ相考申候、

右ハ事情報知旁如此御座候、以上、

閏四月

尚々今日ニ至ル迄、仙臺藩大夫杯ニ於テハ、會討先鋒一藩被仰付候間、都テ恨居候姿ニテ、兵氣モ不振、藝・倉着陳ヲ相待申候、此等ノ所篤ト御推察願入申候、且亦安藤理三郎儀先年徳川ヨリ削地ト申付、土地引渡方今日迄遅延ニ相成候付、早々引渡候様申

付置候間、譬へ歎願申出候テモ、一旦不被召上候テハ、朝廷ノ御威光不相立候間、此段兼テ申入置候、

奥羽鎮撫總督府

參謀

太政官

軍防局御中

四四三 仙・米両藩添歎願書

閏四月

討會先鋒被仰付、兩國共出兵罷在、既ニ仙臺先手勢及接戦処、今般降伏謝罪之儀、容保家来共申出候ニ付、仙臺国境於陳門罪督責為致候処、伏兵暴動之一挙ハ、畢竟指揮不行届ヨリ全ク卒然ニ発、奉驚

天聽候段、至極恐縮之余リ容保儀ハ帰邑退隱之上、當時於城外恭順謹慎相尽シ、頗ル先非後悔罷在、寛大之御所置被成下候様、別紙歎願書之趣、家来共申出候間、益 天朝之御仁徳奉感戴候様御処置奉仰望候、會津国情等之儀ハ、委細演説ヲ以テ申上候通ニ御座候間、深ク御汲量寛典之御沙汰被成下候様、一同奉懇願候、以



上、

閏四月十一日

(伊達慶邦)  
仙臺中將  
(上杉齊憲)  
米澤中將

四四四 近藤勇梟首布告

明治元年閏四月七日

元新選組近藤勇事

大和

此モノ兇惡之罪迹アマタ有之上、甲州勝沼・武州流山  
両所ニ於テ、官軍ニ敵対セシ段、大逆タルニヨツテ、  
如此令梟首モノ也、

閏四月七日

明治元年(1868)

〔表紙〕

# 忠義公史料

明治元年 五月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

## 四四五 白川城附近戦況

明治元年五月朔日

今日白川地必取ノ策ヲ決シテ、六時ヨリ五番隊並大砲  
 二門・長州二中隊・大垣二中隊大砲二門付黒川府(会津若松市)ヲ經  
 テ、原街道ヨリ押寄ル、二番隊・四番隊ハ棚倉街道口  
 ヨリ押寄ル、二字後レテ本街道江戸口ヨリ御兵具方一  
 方隊・大垣一小隊・忍小隊大砲四挺(薩州忍ヲ合テ)二十搦一  
 挺進発、江戸口ニ差掛候得ハ、態ト陸路ヲ進事ナリ、

大垣一小隊ト足輕隊ハ、左右ノ小山ニ散開シテ利地取  
 布キ、忍ノ人数等守砲手ノ如ク、中々散布シ中央ヨリ  
 大砲ヲ連発ス、是軍ノ始也、然ニ敵ハ飽迄多人数ナキ  
 ハ、新手ヲ入替々々、茲ヲ守度ト防戦スル故、味方暫  
 時ハ難戦也シカ、早原街道ニ押廻シ、味方ノ砲声兩三  
 度聞ト均シク、諸州放火ノ手相見待(所カ)、右ニハ棚倉街道  
 ヨリモ、攻入シト見ヘテ、是モ火ノ手ヲ上タリケリ、  
 江戸口ノ官軍弥勇ヲナシ、大砲・小銃ハ勿論、二十搦  
 ノ臼砲ノ賊地ノ中央ニ打込ミ、大垣ノ小銃隊並大垣・  
 長州ノ人数ハ、原街道ニテ九ヶ所ノ砲台場ヲ乗取リ、  
 此ニ来テ四方ヨリ賊徒ヲ取巻キ、四番隊・二番隊ハ大  
 ニ棚倉街道ヲ廻テ、棚倉其外ノ堅場ヲ破ル挾攻レハ、  
 賊徒暫モ堪兼或ハ打、或ハ逃去リ、初三千八百余人屯  
 集ノ由ナレ共、十字比ニ至リ、悉ク落失ヒ、城ハ元来  
 十九日焼失候故、一サ、ヘモナク落去レリ、独り四番  
 隊ノミ一里余追討シテ凱陣ス、此日打取七百十二級、  
 山ニ死シ谷ニ埋シ者其数ヲ不知、分捕又其数ヲ不知、  
 尤珍シキハ棚倉ノ手ヨリ四斤半ノ施条砲ヲ得タリ、是  
 本朝ニ舶来ニ挺四斤半砲筒之手始也ト云、

我手戦死手負左ノ通

戦死

二番隊

古後(秋實)七之丞

五番隊

伊地知(季實)清八

河野(通清)助五郎

坂本(致美)仲蔵

大砲隊

廣瀬(景則)喜兵衛

小野(吉風)藤吉

御軍賦役

田中清(綱紀)右衛門

二番隊

飯牟禮齊蔵

前川伊八郎

市來喜十郎

山本吉蔵

時任金左衛門

川畑金左衛門

四番隊

北郷萬兵衛

久留休左衛門

西ノ原吉彦

仁禮平兵衛

五番隊

桑波田角左衛門

川上源七郎

有川彦右衛門

郷田正之丞

篠崎覺之丞

愛甲嘉右衛門

土師庄之進

大河平源介

上村彦之丞

武元庄五郎

八代次助

伊瀬地正左衛門

大砲隊

淵邊八郎次

手負

奈良原長左衛門

勝部謙介

龜澤源右衛門

桂宗右衛門

渡邊嘉右衛門

四元十左衛門

川上万助

佐々原八郎

有馬彦七

伊藤権兵衛

有川二平太

土師孫市

町夫

熊四郎

足輕

中島直次郎

本營

伊地知正治

大迫喜左衛門

池ノ上四郎左衛門

外二

石本縣那須郡東部  
黒羽領ヨリ雇夫

即死

仲藏

手負

宗一

右即死候夫ニハ金百両、手負ノ者へ十両被下候事、  
右廿五日・朔日兩度死骸ハ白川城下長壽院ニ葬ル、此  
日六番隊等着陣、宇都宮警衛ハ土佐・彦根へ頼テ来ル  
処也、

四四六 薩・長兩藩越後戰爭概略

四四六ノ一

一閏四月十九日、薩・長之兵高田着陣、探索之敵情ニよ  
り直様戰略を定め、先達て以来荒井駅滞陣之尾州以下  
信州諸藩之兵ニ、薩・長・高田之兵相添、松山越千手  
辺へ出張、加州・高田之兵ニ薩・長之兵相添、柏崎口  
青海川辺へ出張す、

一同月廿四日薩州一小隊、長州二小队、松代一小隊、飯  
山一小隊、尾州一小隊、千手より千曲川を渡、十日町

ニ押出す、廿五日曉、路を分て六日町に進入るに、賊一人も不見、昨日小出の方へ逃去候由也、夫より尾州兵を陸地より進め、薩・長之兵、川船にて浦佐ニ至り、直様大斥候とし尾兵を椽原峠ニ進しむ、廿六日薩州半小隊、飯山一小隊、尾兵ニ合して堀内ニ進む、廿七日曉八ツ時過、大雨を侵し、薩半小隊、長二小隊を以、浦佐より魚沼川を渡り、賊之斥候を追散し、小出島を攻撃す、賊駅口及川堤ニ仮砲台を設け、烈敷防戦、薩長之兵兩道より奇正互ニ進、佐梨川を渡り、市中ニ突入、激戦して遂ニ小出島を破る、堀内之兵ハ、川向より四日市之賊ニ当り、薩・長ニ応援す、賊悉く會津道六十里越に逃走す、乃ち四日市ニ飯山之兵、小出島ニ松代之兵を備、余ハ堀内ニ引揚固守す、此戦曉六ツ半時より一小時間余、薩・長討死九人、手負二十人、尾州手負一人、姓名別具、賊之死傷ハ、余程多分有之様相見得候、

一同月廿六日曉、尾州・松代・松本・高田等之兵、千手より千曲川に沿て進む、賊雪峠之險ニ抛り、山腹ニ砲台を設けて防禦す、官軍四ツ時前より七ツ半時頃迄攻撃、松代兵峰を踰候故、賊敗走、山上より大砲を發候

得共、官軍遂ニ山上ニ押登、賊小千谷之方ニ走る、此時五ツ時也、廿七日曉小千谷ニ至る、賊既ニ長岡之方ニ走る由にて一人も無之、官軍代て陣屋ニ入、官軍死傷十人許、賊路傍ニ仆居候者一人、生捕四人、其外死傷多く相見候、

一同月廿七日薩州一小隊、長州二小隊、加州二小隊二砲門、富山二小隊、高田一手、前夜より申合、未明鯨波前七八町迄押出候処、加州・高田等之兵未來候故、援兵と定置候薩・長之兵を以、直ニ鯨波を攻撃す、賊駅口ニ邀戦ひ、終ニ不能支、人家を自焼して走る、薩・長追撃して駅外ニ至る、加州・高田等之兵追々来り加はる、賊柏崎之前右手之山ニ依り、松林を楯とし烈敷防戦す、山下は水田にて、是日大雨如傾、溪水暴漲、薩長半隊を以勇進其山を奪ひ、繞て萬神堂を攻んとす、加州勢不統、且兵疲たるを以て、鯨波ニ引揚、今日長州討死二人、手負七人、高田討死三人、手負八人、加州討死六人、手負廿人、富山手負四人、

一同月廿八日桑名・水戸之賊及歩兵等、昨夜より柏崎を捨逃走候様子相聞候ニ付、官軍進て柏崎ニ入り、要地を占拠す、賊一二里之外ニ盤踞し、斥候三四十人を出

明治元年(1868)

す、官軍撃て之を退く、

右三所戦争之概略ニ御座候、

戊辰五月朔日

官軍死傷姓名

閏四月廿六日、雪峠戦、

死傷十許人、姓名未詳、

同廿七日小出島戦、

薩州討死六人

薩長先鋒

手負八人

松崎勘助

佐藤林蔵

臼井道哉

兒玉清兵衛

長 静 吾

野崎半左衛門

有馬誠之丞

松崎祐齊

高崎泰助

兒玉源之助

長州討死六人

手負九人

東次郎太

上村緑樹

和田軍太

夫卒直左衛門

杉山篤太郎

伊藤俊三

山田藤五郎

大本 昇

吉武五郎

清水甚蔵

元森熊次郎

松村新蔵

飯田伊之助

貞永卯之助

橋本九兵衛

田村治之助

田中與兵衛

梶山鼎助

前田和吉

尾州手負一人、姓名不詳、

同日鯨波戰

長州人討死二人

增野矢之助

早川文藏

手負七人

林市太郎

劍山三郎治

福良忠三郎

生雲平六郎

藤川寅之進

桂富三郎

吉城要三

高田討死三人

今井新左衛門

今井與作

京田啓二郎

手負八人

水野瀧之助

田中金之助

山本源藏

小出豊吉

秋山新吉

幸山七十郎

幸三郎

夫一人

加州討死六人

水上徳二郎

武井彌三右衛門

供田小三郎

瀧猪之助

竹村傳二郎

松本市之丞

手負二十四人

高島猪大夫

西村與三郎

辻金左衛門

山崎啓之助

千秋覺左衛門

以上

清水権太郎  
 中山市之丞  
 安宅常三郎文分  
 高桑十左衛門  
 浦田直二郎  
 村尾六之丞  
 西村要助  
 松山喜十郎  
 橋本一之進  
 高橋熊二郎  
 高橋新二郎  
 大町彌八郎  
 鍋澤和吉  
 上林善六  
 大西清作  
 石黒勘大夫  
 黒田金之丞  
 牧砲二郎  
 坂井彌右衛門

戊辰五月朔日

〔卷〕

「薩長先鋒

別紙両通、北越出先より遂注進候ニ付、不取敢其俣差  
 出、御届申上候、以上、

薩摩少将内

五月七日

新納嘉藤二

内田仲之助

長州宰相内

寺内暢三

四四六ノ二

右之内、高田ハ余程兵氣相奮立候由、加州杯ハ始抹イ  
 ケス、右戦ハ同士討ナト有之由、一寸モ尻ニ藪シ不離本ノ  
 様ニ皆ガ曳廻シ、漸シテ狼狽ナカラ至極ノ由、右通皆  
 ヲ被相働候付、賊巢四ヶ所ハ敗リ、最早會津領ノ内攻  
 込ミニ相成候モ有之、柏崎ハ桑名領分皆攻取、此辺ノ  
 攻撃海陸ヨリ優タル機会不少由候得共、乾行丸等廻着  
 不相成殘多事無限、双方ヨリ責立候ハ、是程死傷連  
 モ無之トノ事、軍艦通行ハ石炭一艘分引連ノ手当、筑  
 前手船へ被仰付、些間違ニ成行、是故外船モヲクレ候  
 半ト申事ニ候、モフハ廻船可有之ト申事候、越後口迄



援ニハ徵兵御差出置候、八番隊野元助八組へ被仰付候、

關東七番隊新納軍八・拾貳番隊志岐正十郎・外城二小

隊村田勇右衛門高岡・土持雄四郎加世田伊作大砲半座、

右来ル十二日、出兵之賦御手当最中ニテ候、双方共援

兵申来候得共、全救応ヲ頼之意ニハ無之、江戸御手当

進入相成居候人数白川口ニ可掛、援兵ハ江戸在番等之

含ト相聞候、越後モ同様ニ内情、何分彼方ニハ長州合

隊シテ、進撃ニ付テハ長兵寄兵隊ト号、余程練兵強烈

ノ由、御勢ハ府下二小隊西千加、山口鉄之介、是丈ハ申分無之候

得共、外ハ外城与ニ付、何ソ不足ト申程ノ儀ニハ無之

由候得共、十分ニ無之候テハ、長ニ対シ堪ラレス情モ

可有之、其外援ヲ待ニハナケレ共、何篇連戦二人戦相

傷不少、且氣候ニナレス、病人多ク賊ハ諸所打散、配

兵ニ込入トノ事、

五月九日

右越後戦争ノ事情誰某カ報知スル所ヲシラス、此ニ写

シテ善本ヲ得ルヲマツノミ、

明治元年五月

一五月六日、越後荒濱宿柏崎市ニテ戦争、

深手

折田平内

浅手刀

十番隊兵士

川村仲悦

即死

右同

松元新右衛門武柄

一同十九日、越後長岡戦争

即死

外城四番

濱田藤助秀之

同

外城三番

伊集院衆中

阿多新吾実行

四四七 越後軍報知

一同十四日、越後石地宿新潟県刈羽郡ニテ同断

深手

明治元年(1868)

二番砲隊

久永龍助

同

外城四番

監軍

園田半之丞

一同十八日、信濃川同断

薄手

外城四番

佐藤治吉

一同廿四日、越後村松領見附宿ニテ同断

薄手

大野五左衛門

同

有馬仲之丞

戦死

伊集院衆中

石神伊兵衛(良密)

一六月朔日、村松領堀溝ニテ

戦死

矢田林之丞

十番隊町夫

死 半助

深手 庄助

同 樋口八太郎

右同 松山善之進

二番砲隊

深手 飯牟禮猪之助

浅手 田文助

外城三番

永井龍左衛門

一六月二日、越後新發田町宿・中之島両所ニテ戦争

外城四番

深手 齊原作治

一同四日、長岡領津ノ場村

外城三番

死中村源右衛門(高則)

十二番隊

深手 白坂吉左衛門

外城三番

一同五日、同所ニテ長岡領津ノ場ナリ

即死別府郷之丞〔深手丸〕

外城三番

即死有馬十九郎〔高懸〕

右同三番町夫

深手 直右衛門

一同七日、同所

外城三番

深手大内田玄中

即死宮之原彌兵衛〔茂次〕

小隊長

深手町 田 武 輔

十番隊

深手養田吉左衛門

外城三番

深手高崎 十 藏

右同山口傳左衛門

右同石上安左衛門

右同四本七之丞

〔采〕  
一同十日、同所ニテ

右同永井武彦

右同死川越正太郎

即死町夫 熊 吉

夫卒 八 太〔和惠〕

即死永井宗七郎

浅手宮野八太郎

七月十三日飛脚到着、手負・戦死合五拾九人

内拾三人死

本ノマ、  
四十二人手負〔廿六人深手  
拾五人薄手〕

右之通手負・戦死有之、外ニ数十人諸所ノ戦争ニテ即

死・手負有之候へ共、未姓名不相知、薩・長・加州・

高田諸藩死人・手負五百位モ有之候半欵、未戦争最中

ニテ諸藩姓名等不相知事、

右五月六日ヨリ六月七日マテ、都合拾三度ノ合戦也、

四四八 田中周藏ヨリ猪俣為右衛門・東郷藤十郎

へ書翰

明治元年五月

一筆啓上仕候、愚兄ニモ今日奥州白川之戦ニテ討死仕

候、武士之本意トハ存候得共、私ニオヒテハ唯々込入

十方ニ暮レ、尤家内女更ニテ、子供衆ハ勿論悲歎混雜

ト奉察、旁心痛之至御座候、何卒可然様御申諭被下候

様、伏テ御頼申上候、就テハ遺髪差送申候間、何篇ヨ

ロシク様御都合被成下度、是又奉懇願候、別紙拔書ニ

申上候通、去月廿五日戦ヒニハ死体等モ不相揚、今日之

戦死死体等モ揚リ、尤葬式方等モ相調、夫丈ハ乍残念

先ツ安堵仕候、是等モ可然御申為聞可被下候、戦争次

第等巨細ニ申上度候得共、右様之次第何モ手ニ付カネ、

尤今日之戦方ニ相草臥、決テ書損之処モ可有之、御推

覽可被下候、先々用事迄御頼可申上候、如此御座候、

御銘々様へ御頼申上筈御座候得共、急便故御赦免可被

下候、恐惶謹言、

辰五月朔日

田中周蔵

猪俣為右衛門様

東郷藤十郎様

四四九 上野戦争本藩戦死傷者届書

上野戦争本藩戦死傷者届書(十六日)

明治元年五月

薩州御届書

戦死

野村正八(高賀)

竹下猪之丞(盛徳)

門松喜蔵(経輔)

岩下半之助(道英)

伊地知惣吉(季材)

隈元太一左衛門(宗善)

足輕

唐鎌助(高善)

同奥新五左衛門(良題)

手負

竹迫十次郎

有吉次左衛門

面高真之丞

榑五郎兵衛

大山清右衛門

河野直之助

内山伊八郎

黒江勇右衛門

町田助之進

益満休之助

中村勇吉

池上勇次郎

鎌田幸之丞

相良笑之丞

床次吉之助

川北五郎左衛門

久永喜兵衛

吉田勇蔵

松元覺之丞

貴島勇右衛門

木藤宗八

松方長齊

新納清一郎

家村慶介

山口喜右衛門

岩城彦四郎

藤田新左衛門

松元尚之丞

津留八之丞

美代幸之丞

肝付彌次郎

西田藤助

肝付十郎

橋口良助

夫卒三人

右者、昨十五日上野東叡山戦争之節戦死・手負、右之通御座候、此段御届申上候、已上、

五月十六日

薩州藩

(長巻)  
相良治部

右辰六月朔日、蒸艦出船便ヨリ申来、同十四日相達候事、

### 四五〇 薩藩へ御沙汰書

薩州

徳川慶喜及降伏候処、残賊尚禍心ヲ逞シ所々屯集、官軍ニ相抗シ候折柄、野州小山・宇都宮其外數ヶ所ニ於

年二十歳  
十五日死  
海江田諸右衛門綱詮

テ、捐軀激励屢遂苦戰及進擊候段、

歎感不斜大儀ニ被

思食候、猶此上一際抽精忠鞠躬尽力、速ニ平定之功ヲ

奏シ、可奉安

宸襟被

仰出候、此段戰士江可相達旨

御沙汰候事、

五月

四五二 生捕者白状並ニ帰順之者譚

明治元年五月六日

五月六日於(栃木県)今市、生捕相成候右嚮道加藤休太郎白

状、並ニ帰順之者譚

一今市ヲ攻ルノ策ハ、今市ニ抛リ候テ、諸道ト合併之官  
道ヲ鎖セントノ策也、

一六日、東之方ヘ向ヒシ兵ハ、會兵ト江戸兵・獵人隊也、

獵人ハ會ノ郷士ナリ、

一會之兵ニ三等アリ、第一若松組・城下土北組同人蒲生家・

家等之遺法ニ・南組獵人山沢組・足輕・百姓モ皆此組下ニ入りテ、  
テ村々土着也

方限ヲ以右組之下ニ小組アリ、村々在方ニヲヒテ、大

小指之兵士居住セサセ候カマ所ナシ、皆土着自然之野伏ナリ、

一會津七日之堅ニ兵數凡一万五千人ト分配スト云、

四五二 佐土原藩屈書之写

明治元年五月

上野ニテ戦争之節、

半隊令官

戦死

能勢惣之進

右之通御座候、以上、

五月

佐土原藩

四五三 某報知書

明治元年

蓋長人所報知乎

一閏四月十八日、海・陸、薩・長兵隊越後今町ニ着、

一同十九日、高田ニ着、

一翌廿日新潟道鉢崎・松ノ山越兩所ヘ官軍出張、

薩州

長州

加州

富山

高田

松代

一同廿四日、上州官軍・尾州飯山等之兵、三國峠ヨリ進

撃勝、直ニ小出ニ進撃、同所屯集賊兵旧幕ノ歩兵會藩

ト戦、官軍モ余程苦戦、賊兵之隊長式人小出奉行之弟

老入、其外歩兵多ク人数打取、官軍ニモ殊ノ外死傷多

ク、終ニ小出ヲ乗取官軍勝利、

奇隊

元森熊次郎外ニ即死五人・手負六人、

報國隊

手負<sup>浅</sup>  
手<sup>浅</sup>

梶山鼎介

三番小隊

即<sup>マ、</sup>

清水甚蔵

手負

前田利吉

薩州死傷共ニ拾四人

一同日、鉢崎出張薩・長其外之官軍七ツ崎ニテ相戦、賊

兵桑名・水府浪士・會藩歩兵官軍打勝、賊鯨浪之屯集

其外市中火ヲ放チ去、官軍追打鯨浪ヲ乗取、報國隊式

番桂富三郎・吉城要三手負火消ス、

一同夜、桑名ノ主其外之賊兵柏崎陣營ヲ捨逃去、

一翌廿八日、柏崎賊兵老入モ無之由斥候申帰リ、直ニ柏

崎ヘ押入、大砲其外分捕有之、三拾九搦石臼砲壹挺・

六斤重砲式挺・ホート忽砲壹挺其外旧製砲、

一薩州・長州・加州ノ兵桑名之陣家ヘ移ル、

一五月三日、片貝ニテ加州其外之官軍賊ト戦ヒ、官軍打

負引退、賊兵勝ニ乗シテ追来ル、薩・長応援トシテ打

進、激戦ニ及、賊兵散々相負ケ逃去、首多ク打取、薩・

長其ノ官軍死傷少々有之候、勝利報國隊一番小隊、

手負創疵五ヶ所

山口庄蔵

浅手

水津孫兵衛

一同八日、椎谷家老ヨリ官軍ヘ内通イタシ候ニ付、曉天

官軍椎谷へ押入賊ヲ打、薩・長ノ兵ナリ、報國隊貳番四番小隊、加之熊野直助軍艦ニテ賊兵廿人余り打取、其外傷者數不知、薩・長ノ兵死傷老人無之、官軍大勝利、  
一同九日、小手谷（千カ）・妙法寺兩所ニテ戰終ニ乘取、官軍勝利、尾州兵信濃川ヲ越シテ陣ヲ取、

一同十一日、大雨信濃川洪水、賊兵尾州ノ兵ヲ襲苦戰、薩・長之兵、川ヲ応援ス、報國隊一番・三番小隊下田輪介軍監トシテ是へ加得、外官軍統テ川ヲ渡ス、大戰爭始ル、妙見擾畔至テ難所ニテ官軍苦戰、夫ヨリ昼夜ノ分チナク戰爭、

一同十三日、朝閑道ヨリ長州勢進、奇兵隊時山直八戰死、其死傷多シ、余程之苦戰、

一同十四日、石地ニテ戰爭官軍大勝利、賊兵出雲崎へ曳退、官軍追々進撃又出雲崎ヲ捨逃去、報國隊二番即死片光藏、手負富田幾太郎、同四番即死平尾礪之助、同長岡勘助、手負小郡伊三郎、手負中川清吾、

右兩へ戰爭ノ次第、大略ノ儀共余死傷之者モ有之候得共、委數相分り兼申候、尤復官ノ者ハ無之、  
一同十五日夕刻迄ハ、妙見山ニテ戰爭、勝負不相分、尤官軍台場ニケ所乘取、

四五四 薩藩へ下賜候感狀之写

會津其外之賊徒共、北越所々ノ要地ニ盤踞シ、兇暴猖獗以テ官軍ニ抵抗スルノ折柄、屢々遂勇戰、殊ニ去ル十日ヨリ十九日ニ至リ、連日之苦戰頻リニ賊徒ヲ掃撃シ、遂ニ長岡城ヲ乘取り候段、深感賞候、成功之次第ハ速ニ可達

奏聞、尚此上一際抽忠勇勉勵尽力可有之、仍テ感狀如件、

五月

四五五 薩藩へ下ス感狀

五月朔日

奥羽之賊徒猖獗、白川城之要地に盤踞し、益兇暴を恣にし、官軍に相抗し候折柄、去ル朔日奮戰を遂、寡兵を以て忽チ賊徒を掃撃し、遂ニ城地を乘取り、大ニ賊胆を破り候条、深感賞候、尚成功之次第は、速ニ可達奏聞候、此上愈抽忠誠、鞠躬尽力可有之候、仍感狀如



件、

慶應四戊辰年五月

大総督

薩州藩



隊長中

(忠義公史料影写にて校訂)

四五六 薩艦乾行丸・長艦丁卯丸届書

天朝御軍艦

寺泊浦中

(新開三島郡)

昨廿四日朝六ツ半時分、兩艦一同出雲崎着岸仕候処、

同上

寺泊湊賊旗章赤白式本柱、車艦碇泊罷在ヲ見届、直様進

撃シキリニ発砲ニヲヨヒ候、然処賊船蒸氣ヲ立テ、地

方ニ乗付答砲式発計相放シ、遂ニ暗礁ニ乗揚候ト相見

得候得共、何分遠濁ニテ暗礁多ク有之、賊巢ノ様子委

ク不相分、乾行丸ハ本ノ処ヘ守居、丁卯丸即刻出雲崎

ニ乗付、高田其外ノ陸軍ト進撃ノ都合申談置、夜半出

雲崎出港、寺泊相越候処、暁天賊舟出火、過半破烈仕

候処、陸軍ハ山田村ヨリ出雲崎ニ引取、海軍野積其外

廻発砲撃イタシ候得共、何タル勢モ相見ヘ不申、且石

炭其外差支ノ儀モ不少候付、一先兩艦共ニ能州七尾港迄引取申候、此段御届申上候、以上、

薩州

戊辰五月廿五日

乾行丸

長州

丁卯丸

四五七 上野屯集ノ賊掃討ニツキ達書

明治元年五月

昨十五日、上野ニテ打洩し候賊掃除被 仰付候条、各

藩兼て之持場吟味いたし、精々可致尽力旨被 仰出候

事、

但講武所ヘ可相揃事、

廣小路・三枚橋辺

薩州 因州 肥後

本郷・駒込・根岸辺

備前 長州 佐土原 大村 肥前

道灌山・谷中・王子辺

藝州 伊州 筑後

明治元年(1868)

淺草・蔵前辺

筑前 尾州

入申候、同日打死・手負、左之通御座候、

河田左久馬家来

元小田原藩

四五八 因州藩届書写

討死  
深入仕候ニ付  
不知生死

杉山繁之助  
森本清太

明治元年五月十六日

因州ヨリ御届之写

深手

士官

白井貞之丞

昨十五日、薩藩ニ引統湯島天神前迄進軍、同藩分隊いたし候節、弊藩も同様分隊天神社内へ相向候処、賊兵無之候付、薩藩上野へ進撃、続て弊藩池之端迄進軍仕候処、攻口之模様難定、仲町迄押寄、廣小路より及激

討死

山國隊

田井五右衛門

戰居候薩藩ニ、応援之心得を以横矢を入、暫時発砲仕候得共、間遠にて抄々しく無御座候間、其場を引揚、

手負

細木元太郎

下谷・御徒町辺を廻り候処、折能賊兵彰義隊ニ出会、

那波九郎左衛門

直ニ進撃いたし候処、臼砲一門捨置逃去申候、其後賊

森脇一郎

兵三方より少々ツ、出沒、狙撃いたし候間、我兵同断

前田庄司

是ニ応し、小促合いたし、夫より下谷へ向進撃、暫く

使役士官

秋田嘉兵衛

大手之様子窺合罷在、遂ニ薩藩申合、機ニ乘し弊藩ハ

佐分利鐵次郎隊

横手より、黒門右脇塙上ニ押登り、暫時砲戦いたし、

討死

瀧金市

薩藩と大手より進撃、一時ニ黒門を攻破り、山内へ打

佐々木仲之丞

深手

田川廣之丞  
伊藤猪吉

里見辰之丞  
有澤平之丞

勘定方付屬

討死

漆原甚左衛門

田村宇三郎

高田藤次郎

池田相摸守人数

深手

石川左現次

中川熊藏

浅手

八尾重助

玉箱持 清吉

池田攝津守家来

岡山力之助

以上討死九人  
傷者十三人

右之通御座候間、此段御届申上候、

河田佐久馬

前書之通相達候間、此段御届申上候、以上、

因州

四五九 西郷吉之助ヨリ大久保一藏・吉井幸輔へ

書翰

上原藤次郎差遣候後、頻応援之為白川口江出張いたし度、京都より可参人数を、当地江ハ召置候て可宜旨、再度申立候得共、大村士聞入無之、宇都宮辺ハ官軍都て繰上、皆白川之方江張出し、今市と申所を土州勢押居、日光江ハ彦根勢相堅、外々ハ遠ク白川之方江相離候付、若後を絶れ候てハ、白川出張之官軍ハ難波可致事候間、肥前侯宇都宮辺之鎮庄を被命、野州は少も動揺不致様、御押相成、東山道之手ハ、賊兵を討伐而已ニ相決、当地も何致不穩勢も有之候付、人数繰出し候義、見合居候様との事にて、直様出張出来兼候処、去ル朔日長州・大垣・忍藩ハ少々にて四藩致会合、三手三道ニ相分れ、白川城攻撃いたし候処、朝六字より戦相始、昼二字ニ乗落し十分之勝利相成、大慶此事ニ御座候、賊兵ニハ仙臺・棚倉・二本松・三春・會津五藩之勢にて、式千余之大兵ニ御座候得共、三方より引包

打立候故、台場等も嚴重相備候ものも無難打破、敵兵六百位ハ打取候趣ニ御座候得共、いまた委敷取しらへ候紙面不參、見事之勝戦ニて御座候、余程是ニハ落胆いたし候半、此度は歩兵類之ものハ一切不相見得、只新撰組之ニ番手と申もの而已ニ御座候、東海道之手よりハニ番隊出張いたし居、是而已応援之都合ニ相成申候、本街道より相懸り候大砲隊杯、台場江正面ニ打掛候故、余程難戦いたし、手負多ク御座候、ニ番隊江相付差出候一砲車之人数は、纔三人無疵之者有之、小銃隊ニハ五番隊難場江押懸苦戦ニ及、手負多御座候へ共、此度ハ戦死之者相少ク、大幸之仕合ニ御座候、追々手負之人ハ横濱江病院御取建被下候付、皆々相廻候事ニて、是丈ケハ煩念相省候得共、医師之御手人無多事、雇入方之都合いたし候位ニて、込入候時機ニ御座候、当分横濱江參居候もの四拾六人有之、白川口之手負相廻候へハ、一小隊計之人数ニ及候間、纔両三人之医師ニて、手も廻兼候故、大ニ難渋之次第ニ御座候、此邸内ニも七八人ハ残居、実ニ込入候義ニ御座候間、両三人ハ、随分療治方も出来候医者御遣可被下候、越後口も三國峠之戦大勝利を得候趣、愉快之事ニ御座候、就

てハ白川口并越後口を堅メ付置候て、奥羽之叛賊を打、會津を孤立させ候策ニ相決し、官軍式千人早々御差下相成候様御申越之段、承知仕候、右ニ付ては撰兵千位ハ早々蒸氣船を以、御廻被下、跡千人之処ハ陸地より御遣相成候欵、又ハ船都合を以御遣相成候欵、何れ共直敷御座候付、千五百計之人数を以、富士艦并鋼鉄船荷方之蒸船式艘を付、奥羽ニ相廻、海岸より手之下シ安キ処を打碎、次第々々ニ叩上ケ候手配ニ御座候間、何卒千人位之処ハ急速御遣可被下候、何分軍用金乏敷、日々官軍ハ是ニ氣を挫かれ候模様ニ被相窺申候、何と欵御策ハ有御座間敷哉、人数計參候ても、金ニ乏敷候てハ、奥羽江出軍甚難渋可仕と、是計ハ苦心之至ニ御座候、此旨大略奉得御意候、大村より委細可申越候間、私よりも申遣呉候様承候間、如此御座候、頓首、

西郷吉之助

五月十日

大久保一蔵様

吉井幸輔様

追啓上、長州之世良修蔵ニて、仙臺藩より福嶋と申所ニて被打果、首ハ仙臺江送り、髪を會津(江丸)を送と申

義を、白川にて分捕いたし候仙藩之帳面江相記有之  
候由、言語同断之次第御座候、手負・戦死之姓名  
書并鬢髮差遣候間、御国元之御送被下候義共、宜敷  
御計可被下候、

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

#### 四六〇 三條實美本藩二諭ス書

明治元年五月七日

罪魁既及降伏ノ処、會等ノ余賊猶野心ヲ逞シテ、兵ヲ  
境外ニ出シ、王師ニ抵抗シ、未東方平定ニ不至、日夜  
憂苦ニ不堪処ナリ、其方共春來數度ノ苦戦、忠勇ヲ励、  
屢賊徒ヲ掃撃、三軍ノ戎名ヲ輝シ、大ニ宸襟ヲ慰ス、  
然ニ隔地ニシテ報告疎濶、自然地理ノ形勢情実其細詳  
ヲ不能知、孤軍寡兵、更ニ応援ノ兵ナク、遂ニ死地ニ  
陥ラシム、是全予力輩ノ罪ナリ、然ルニ兵士義勇ノ氣  
聊屈撓セス、益奮勵シテ遂ニ苦攻ニ及ヒ、白川城ヲ乘  
取、大ニ朝威ヲ賊地ニ振ヒ、敵鋒ヲ摧キ策遺算ナク、頗  
愉快ノ勇戦ヲ遂ク報知ヲ得、実ニ欣然踊躍ノ至ニ不堪、  
天威ノ所及トイヘトモ、偏ニ將士捐軀力戦ノ功ニアラ  
スンハ、如何ノ數倍ノ賊兵ヲシテ、一時ニ賊滅セシメ

ンヤ、深ク戦士ノ劳苦ヲ思フ、且不幸ニシテ死傷ノ者  
不少趣、誠ニ憫然ノ至ニ不堪、然ルニ方今ノ形勢、罪  
魁降伏スト雖、旗下猶陽ニ恭順ヲ唱ヘテ、陰ニ禍心ヲ  
包蔵シ、王師ニ抗スル所状ヲ顯セリ、余不肖ノ身ヲ以  
テ監察使ノ所ヲ奉シ、東府ニ下ルルヤ速ニ賊徒ヲ討滅シ、  
生民塗炭ノ苦ヲ救ヒ、  
聖慮ヲ安セン事ヲ欲ス、冀ハ汝等鞠躬激励、益敢氣ノ  
氣ヲヲコシ、速ニ賊ヲ屠滅シ、奥羽平定ノ功ヲ奏シ、  
宸襟ヲ安シ奉ラン事ヲ希望ス、

五月七日

實美

#### 四六一 輪王寺宮病氣登城云々記事

明治元年五月四日

輪王寺宮病氣ニ付、登城被成兼候旨、御断ニ相成候ニ  
付、參謀西四辻卿  
朝命を奉し、為御使上野へ御越ニ相成り、下參謀寺島  
秀之助・軍監新田三郎(長州藩士)附屬す、然るに宮病氣之趣にて、  
御対面無之ニ付、再三強て対面之儀を申入れられ候得共、  
遮て御断り故、不得止御帰城ニ相成候事、

四六二 上野輪王寺宮へ御沙汰之写

一戦死 濱田藤助

明治元年五月三日

従

朝廷 御沙汰之儀有之候間、明四日巳之刻御登城被為  
在候様、大総督宮御沙汰之事、

明治元年五月晦日

四六四 種子田左門六番隊長ヲ命ス

六番小隊長之場

種子田左門

五月三日

野津七二(道貫)快氣迄ノ間、右ノ通被仰付候、

本宮所

四六三 薩摩藩届書

先達テ、北越長・薩先鋒ヨリ戦争之形行、兩藩ヨリ御  
届申上置候通ニテ、其後当月朔日、山賊モ四方へ致散

四六五 各藩之兵隊江御沙汰之写

乱候、尤戦死別紙之通御座候旨、出兵ノ者ヨリ大頭申  
越候間、此段御届申上、(候脱之)

明治元年五月

但長・薩軍艦之儀モ、去ル廿一日越後今町へ着艦之  
段モ申越候、

旗下末々脱走之輩、上野山内其外所々屯集、屢官軍之  
兵士を暗殺し、無辜之民財を掠奪し、益暴虐を逞し、

五月晦日

薩摩少将内

新納嘉藤二

右同

朝廷寛仁之道も絶果、断然誅伐被仰出候、付ては勇闘  
激戦、奮て国賊を鏖殺し、億兆蒼生之塗炭を救ひ、速  
ニ平定之功を奏し、可奉安

阿多新吾

宸襟

御沙汰候事、

五月

土州  
大垣

四六六 肥前へ御沙汰

(鍋島直大)  
肥前侍従

下総・野州近辺賊徒出没、官軍ニ抗シ王土ヲ掠メ、平民ヲ苦メ、イマタ平定ニ不至候間、下之総野鎮撫之為メ出張イタシ、賊徒鎮庄、猶二州藩之向背篤ト相察シ、民政筋取締、人心安堵候様指揮可有之旨、大総督官御沙汰之事、

五月

徳川慶喜及降伏候処、残賊猶禍心を逞し所々屯集、官軍ニ抗し候折柄、野州小山・宇都宮其外数ヶ所ニ於て、捐軀激励屢遂苦戦及進撃候段、  
叡感不斜候、猶此上一際抽精忠鞠躬尽力、速ニ平定之功を奏し、可奉安  
宸襟被  
仰出候、此段戦士江可相違旨、  
御沙汰候事、

五月

四六七 戦士御慰勞之御書付

東山道先鋒

薩州藩  
長州藩  
因州藩  
彦根

明治元年五月

四六八 本藩外三藩へ市街巡邏取締御沙汰書

薩州藩  
長州藩  
因州藩  
佐土原藩

右当府内残賊潜伏之聞へモ有之ニ付、市街巡邏取締可

明治元年(1868)

致、尤猥ニ捕縛打捨等被禁候条、残徒見当次第急度取

糺申出候ハ、御指揮可有之旨 御沙汰候事、

但五十員ヨリ二十員迄、以下小人数被禁候事、

大垣

四六九 薩州・長州へ御感状之写

今般上野山内屯集之賊徒追討之節、終日奮戦忽チ及掃

撃候条、深感賞候、尚成功之次第速ニ可遂

奏聞候、弥抽誠忠勉勵可有之、仍感状如件、

慶應四戊辰年五月

大総督

薩州藩

隊長中

長州藩

隊長中



四七〇 本藩外二藩へ達セラレシ感状

一東海道先鋒

薩州

長州

徳川慶喜及降伏候処、残賊猶禍心ヲ逞シ、要地ニ抛リ、  
官軍ヲ相抗シ候折柄、総州八幡・五井・姉ヶ崎辺ニヲ  
ヒテ、遂勇戦忽掠撃段、達

叡聞、御満足ニ被 思食候、猶此上一際抽精忠鞠躬尽  
力、速ニ賊徒平定之功ヲ奏シ、可奉安

宸襟被 仰出候、此段戦士へ可相達候旨、

御沙汰候事、

五月

四七一 徳川旗下帰順者朝臣ニ被仰付達書

明治元年五月三日

一徳川亀之助重臣呼出之口達之写、旗下帰順之輩、自今

朝臣ニ被 仰付候間、此段相達候事、

五月

四七二 諸藩閱兵ノ仰出

明治元年五月

兼テ御達シ有之候諸藩兵隊整列、今日御覽被為在候段、



被 仰出候事、

但十二字天下馬揃之事、

四七六 田安中納言上京達書

田安中納言

四七三 徳川龜之助へ上京達書

今般、藩屏之列ニ被加候ニ付、為御礼上京可致候事、

五月

徳川龜之助

今般家名相統被 仰出候ニ付、為御礼上京可致候事、

五月

四七七 上野輪王寺宮へ御送相成候御書

今度、徳川慶喜恭順之実効相立、家名相統之儀、被

四七四 松平確堂ニ徳川龜之助ノ後見ヲ許ス達書

仰出候付、旗下之輩愈以謹慎可罷在之處、心得違之徒

明治元年五月

恣ニ脱走、所々へ屯集シ、主人之意ニ相戾リト候カノミナ

一松平確堂、当分之内徳川龜之助後見之儀、願之通り被

仰出候事、

ラス、屢官兵ヲ暗殺シ、民財ヲ掠奪シ、王化ヲ妨ケ候所業、実ニ不相濟次第ニ付、速ニ討伐ニ可及ハ勿論之儀ニ候得共、今日迄遷延ニ相成ハ、畢竟官御方ニハ、

御謚親之儀故、於

四七五 一橋大納言ニ上京達書

明治元年五月

一橋大納言

今般、藩屏之列ニ被加候ニ付、為御礼上京可致候事、

朝廷厚キ思食モ被為在、於総督宮モ深御配慮被遊、御使ヲ以御登城之儀被仰入、其後參謀ヲモ被差遣候所御対面モ無之、猶又再応覚王・龍王両院ヲモ被為召候得共、更ニ出頭不致、此上ハ御赦被成近日道モ絶果、一方ナラス御焦慮被遊候、乍去何分国家之乱賊其俣被差

置候テハ、万民塗炭之苦ニ陥リ、

朝意モ更ニ不相立次第ニ付、誠ニ不被得止討伐被 仰  
出候間、宮御方急速御立退ニ相成候様可申上旨、大総  
督宮御沙汰候間、此段申上候、宜執達可有之候也、

五月十四日

四七八 徳川家達重臣ニ達書

即日、之ヲ徳川家達ノ重臣ヲ喚テ達セラル、所アリ、

旗下帰順之輩、自今

朝臣ニ被

仰付候間、此段相達事、

五月三日

田安慶頼受書を呈して、之を士民に令したり、

旗下帰順之輩、自今

朝臣ニ被

仰付候趣、被 仰渡承知仕候、以上、

田安中納言

慶頼判

四七九 匏奄雜談

重ニ田幕代官江川ノ平手附親見、久保田ノ件、又大島  
圭介ト板垣退助ニ関スル其他ノ談話、当時裏況ノ談話

明治元年間

栗本鋤雲君述

武陽生速記

和解

私ハ無能ナ男デゴザリマスガ、人ガ絶交シテ居テ困マ  
ルカラ、御前ガ中ヘ這入ツテ纏メテ呉レト云ツテ、頼  
マレテ纏メタコトガ二三度ゴザリマス、ソレヲ御話シ  
致シマシヨウ、

笑也

旧幕時分ニ、江川太郎左衛門ノ手附ニ、親見確蔵ト云  
フ人ガアリマシタ、是レハ石州辺リノ人デ、ソレニ同  
ジ江川ノ手附デ、久保田治部右衛門ト云フ人ガアリマ  
シタ、（本）熊本ノ産ニシテ後幕府  
（トナリ）親見ハ私ノ学問ノ相弟子デ、私ヨリ先輩デゴザ  
リマシタ、治部右衛門ハ武人デゴザリマシテ、熊本浪  
人デ、強ヒ評判ノ男デゴザリマシタ、其確執ノ原因ハ  
深クハ知りマセンガ、互ニ死ニ合フ位ニナリマシテ、  
両方共ニ江川ノ方ハ暇ヲ取りテ仕舞ヒマシタ、ソレデ  
何分中ガ悪クテ打解ケマセン、其中ニ親見ハ種々ノ細

カヒ役ヲ経テ、終ニ二代官トナリマシテ、奥州ノ方ノ代官ニナリマシタ、久保田モ武人デゴザリマスケレドモ、伶俐ナ男デゴザリマスカラ、是レモ九州ノ方ノ郡代ニナリマシタ、ソレカラ一日、親見ガ私ノ所ヘ參ツテ、御承知ノ通り、年来久保田トハ中ガ悪クテ、向フモ死ニ合フ積リデ居ルシ、私ノ方モ負ケナイ積リデヤツテ居リマシタガ、不思議ニマハリ回ハツテ、今日ニナツテ見レバ、アチラハ郡代ニナリ、私ハ代官ニナツタガ、郡代ハ代官<sup>新</sup>ノ大キイノテ、同ジ役ヲスルヤウニナツテ、同ジ役所ヘ出ツルカラ、役所デハ面会ヲスルガ、家ニ歸ツテ来レハ、互ニ讎敵デ居テハ甚ダ困マルカラ、私ハ年来ノ怨ヲ解ヒテ、和睦ヲシタヒト思フガ、ソレニハコチラカラ頼メハ降參スルヨウニナルカラ、ソレハ出来ナヒ、ソコデ幸ヒ、アナタハ双方トモ懇意デアルカラ、一ツアナタガ中ノ直ルヤウニ、取計ツテ呉レト云フ、ソレハ何シロ喜バシヒ訳ダ、私モ双方懇意ニシテ居ツテ、甚ダ面白クナカツタ、御前ガソウ言フ積リナラ、私モ喜ブカラ、ソナラサウシマシヨウト言ツテ、早速久保田ヲ喚ンデ其意ヲ告ケテ、何ト是レカラ互ニ往復シテ呉レヌカト言ツタ所ガ、久保田モ、サウ

云フ訳ナラ私ノ方ニモ、ナニモナヒカラ、往復シヤウト云フカラ、私ノ宅ヘ寄ツテ三人デ一杯飲ムコトニシヤウト云ツテ、日ヲトシテ寄合ヒマシタ所カ、兩人トモ打解ケテ久保田ノ娘ハ薙刀ガ上手デアルカラ、親見ノ娘ヲ弟子ニシヤウ、サウシテ娘同士師弟トナツテ、親同士確執ノナヒシルシニシヤウト言ツテ、互ニ打解ケテ往来スルヤウニ致シタコトガゴザリマス、是ハ余程古ヒ事デゴザリマス、  
今一ハ大鳥圭介ト板垣退助トノ和睦ヲ取計ラツタコト、ソレハ箱館戦争ノ時分ニ、板垣ハ官軍方デ土州ノ兵ヲ率ヒテ、日光ヘ參リマシタ、大鳥ハ幕府方デ、佛蘭西ノ教師ヲ雇ツテ練習シタ兵ヲ連レテ參リマシテ、余程長ク対陣シテ居リマシタ一ト月ノ余対陣シテ居リマシタガ、トウ〜仕舞ニ大鳥ハ敵ヒマセンデ、奥州ヘ逃ケ上ツテ仕舞ヒマシタ、ソレカラ御維新ニナツテ、大鳥ハ榎本ニ付ヒテ、五稜廓ヘ行ツテ仕舞ヒマシタ、板垣ハ江戸ヘ引上ゲテシマヒマシタ、其中榎本ハ官軍ニ降服シテ、大鳥モ許サレテ、工部カ何カニ出テ居リマシタ、ソレテ一日大鳥カ私ニ申スニハ、アナタニ折入ツテ御相談スルンダガ、外デモナヒガ、私モ以

前榎本釜次郎ナドト脱走シタ時分ニハ、幕府ノ兵ヲ率ヒテ日光ヘ行ツテ、暫ク板垣ト对阵シテ居ツテ、板垣トハ敵味方デアツタ、其時随分戦モ致シタガ、遂ニ板垣ノ兵ハ猪苗代(福島県)ノ方ヘ回ハラレ、此方ハ塩原温泉道カラ會津ヘ落チマシタ、ソコデ今日ハ兩人共同ジ朝廷ヘ仕ヘテ居ルカ、「誠ニドウモアノ時分ハ」ト云フコトモ出来ズ、始メテ御目ニ掛ツタト云フ挨拶ニモ困ルカラ、逢ハナヒヤウニ外シテばかり居ルガ、一ツ朝廷ニ仕ヘテ居ナガラ外ツシテ逢ハナヒヤウニスルノハ、甚タ難儀デアアル、御前ハ幸ヒ板垣トモ往来シテ御出デナサレカラ、何卒取計ツテ呉レナヒカト云フハレハ、誠ニ善ヒ事デアルカラ取計ツテ見マシヨウト云ツテ、板垣ニ其話ヲシマシタ所ガ、ソレハ至極宜シウゴザリマス、私共ノ方ニハ異論ハナヒガ、唯タソコデ大鳥ノ方ハ、アナタガ付テ来ルカラ宜シヒガ、私ノ方ハ一人デハ可笑シヒカラ、後藤象次郎ヲ連レテ行キマシヨウ、サウシテ何処カデ出会致シマシヨウト云フ、其事ヲ大鳥ヘ通シマシタ所ガ、ソレデハサウシマシヨト云ツテ、双方上野ノ精養軒ヘ会シマシタ、板垣ノ方ハ後藤象次郎、大鳥ノ方ハ私ガ付添ツテ参リマシタ、四人デ酒ヲ飲ン

デ和シタコトカアリマシタ、其時彼ノ日光ノ对阵ノ話ガ出テマシタガ、板垣ガ言フニハ、ドウモアノ時ハ、誠ニ幕府ノ練習ノ兵ニハ感心シタ、私ノ方ノ兵ハ、度々戦争ヲシタカラ馴レテ居ルケレトモ、ドウシテモ兵ガ揃ハナヒ、アスコニ至ルト練習シタ兵ハ違ツタモダ、ドウシテモ兵ハ練習シナクテハイケナイ、長ヒ間松原デ大鳥ト对阵シテ居ツテ、私ノ方ノ兵ハ勝ツコトハ勝ツケレドモ、コチラカラ打ツタ弾丸ハキマリガナイ、人間ノ頭ヨリモ一間モ高ヒ所ヘ当ツタリ、或ハ土ノ中ヘ潜ツタリシテ居テ、一向弾丸ノ高低ガ定マラヌ、官軍ノ方ハ人ガ大勢ダカラ勝ツタノデ、弾丸ノ打方ハ甚ダ不規則デアツタ、ソレガ大鳥方ノ兵ノ打ツ弾丸ハ、チャント揃ツテ身体ノ所アタリヘ来ル、負軍デ狼狽シテ逃ケナガラ打ツテモ、チャント揃ツテ当ル、官軍ノ方ノ弾丸ハ勝軍デモ揃ハヌガ、幕府ノ練習兵ノ打ツ弾丸ハ、勝ツテモ負ケテモ、チャント同シ所ヘ当ツテ居ル、ドウモ感心シタ、軍ハ練習兵デナケレハナラヌト思ツタ、ソコテ沼間守一ハ、大鳥ナドト一緒ニ練習兵ヲ率ヒタ男ダカラ、彼ヲ雇ツテ教導サセテ練習シタカラ、今日モ土州ノ兵ハ近衛兵ニナツテ居ルト居フモ、

大島モ誠ニ官軍ノ兵ハ強クテ、ドウスルコトモ出来ナカッタト云フ様ナ話ヲシテ、大ニ打寛ヒテ別レタコトガゴザリマス、

佐竹公ノ蝦夷地返納

ソレカラ、是ハ和解ノ話トハ異ヒマスガ、秋田ノ佐竹ノ国家老ニ、大繩織衛ト云フ人ト、江戸ノ家老デ田代部ト云フ人ガゴザリマシタ、此兩人ガ或人ノ紹介ヲ以テ、私共ニ逢ニ参リマシタ、其頃私ノ本役ハ外国奉行デ、御勘定奉行格ト箱館奉行ヲ兼帯シテ居リマシタガ、其兩人ノ願ヒト云フノハ、井伊掃部守ノ頃、蝦夷地ヲ大名大家へ割渡サレテ、秋田へハ蝦夷地ノ内デモ良ヒ所ノ増毛・宗谷ノ二箇所ヲ貰ヒマシタガ、土地モ宜シ、上リモアルケレドモ、誠ニ入費ガ多ク掛ツテ、連テモ引合ハナイ、夫故ニ増毛・宗谷ノ二箇所ヲ返上シタヒ、其代リ是迄開墾其他ニ費用ガ掛ツテ居ルカラ、其入費トシテ三万両下ゲテ戴キタヒ、今一箇条ノ願ハ、秋田ニハ銀山ガゴザリマス、其銀山ヨリ掘出シタモノヲ、大坂ノ銀座ニ納メルコトニナツテ居リマスガ、ソレハ年々納メル数ガ定マツテ居リマスカラ、其納メタル残りノ分ハ、何卒外国人ニ自由ニ売ルコトヲ御許ニナル

ヨウニシタヒ、此二箇条ヲ何卒取計ツテ呉レト云フ願意デゴザリマシタ、私モ御勘定奉行格トハ言へ、勘定ノコトハ少シモ知ラナヒ、又箱館奉行兼帯トハ言フモノ、是レトテモ能クハ状況ヲ知ラナヒ、殊ニ銀山ノコトナドハ少シモ知ラナヒケレドモ、去リトテ捨テ置クコトハ出来ナヒガ、小栗<sup>上野</sup>上野介ハ御勘定奉行デ、此人ハ年来懇意デアルカラ聞ヒテ見ヤウ、併シ自分モ多忙デアルカラ、淺野伊賀守(此人ハ淺野治郎八ト云ツテ、只今モ存生デゴザリマス)ニ頼ムテ、上野介ニ話シテ貰ハウト言ツタ所ガ、ドウカ何分ニモ願ヒマスト云ツテ婦リマシタガ、ソレカラ小栗ニ話シマシタ所ガ、固ヨリ蝦夷地ヲ裂クト云フノハ、宜シクナヒノデアルカラ、ソナ迷惑ノモノナラ、上へ返納スルカ宜シヒ、又銀山ノコトハ、秋田ノ銀山ト云ツテモ、高ノ知レタモノデ、毎年定マツタル員數丈ヲ大坂ニ出セハ、残りハ何程モナヒニ依ツテ、ソレハ勝手ニスルカ宜シヒ、願ヲ出セバ聴濟ムト云フ、ソレハ嘸ゾ喜ブコトデゴザリマシヨウカラ、早速其由ヲ話シマシヨウト言ツテ、又大繩・田代兩人ヲ喚ンデ、ソレハ随分出来ルコトデアルカラ、願書ヲ御出シナサイト云フコトデアツタト言ツ

夕所ガ、ソレハ誠ニ有難ウゴザリマスガ、願ヲ出スニ  
 モ表向順ヲ逐フテ行ケバ、アスコデ三十日、ココデ一  
 ト月ト手間ヲ取ツテ、急ニ埒ガ明キマセンカラ、御直  
 キニ御受取り下サル訳ニハ行キマスマヒカト云フ、ソ  
 レハ向フデ聴済ムト云フ以上ハ、直キニ受取ラヌコト  
 ハアルマヒカラ、話シテ見ヨウト言ツテ、ソレカラ小  
 栗ニ話シマシタ所カ、既ニ聴済ムコトニナツテ居レハ、  
 何レカラ受取ツテモ宜シヒト言フコトデアリマスカ  
 ラ、其事ヲ大繩・田代ニ話スト、ドウゾ願ヒマスと言  
 ツテ、私ノ所へ書面ヲ持ツテ参リマシタ、ソレヲ受取  
 ツテ御城へ行ク時、小栗ニ回シマシタ所ガ、十日立ツ  
 カ立タヌ中ニ、ソレガパツタリ済ムデ仕舞ヒマシタ、  
 則チ增毛・宗谷ノ地面ヲ返上シテ、其御手當トシテ三  
 万両ノ御下渡ヲ願ヒマシタガ、ソレハ一万両ホカ下ラ  
 ナカツタ、ソレカラ銀山ノ方ハ、定額ヲ上納シタル外  
 ハ、外国人へデモ何人へデモ、勝手ニ売ルト云フコト  
 ハ、願通許可ニナリマシタ、イヤモウ大繩・田代ノ両  
 人ハ大喜デ、是ハ正当ノ順ヲ逐ツテ出願スレハ、何程  
 ノ日数ガ掛ルカ知レヌ、斯ク速ニ済ムダノハ誠ニ有難  
 ヒ、是ダカラ直キニ願ツタノデゴザリマスと言ツテ、

喜ンデ帰リマシタ、ソレカラ更メテ大繩・田代ノ兩人  
 ガ、君公ノ直筆ノ礼状ヲ持ツテ参リマシタ、ソレニハ  
 私ト小栗ト淺野ノ三人へ礼トシテ、永代二百石ツツ上  
 ルト云フ直書デゴザリマシタ、其時私ハソレハ千万有  
 難ウゴザリマスガ、私共ハ出来ルコトナラハ、御都合  
 ノ好ヒヤウニ取計ラウノガ、私共ノ素志デゴザリマス  
 カラ、此様ナ厚キ御礼ニハ及ビマセン、是ハ頂戴致シ  
 タト同様ナ訳デゴザリマスカラ、堅ク御断リ申シマス、  
 失礼ナガラ返納致シマス、就テハ小栗・淺野ノ兩人ノ  
 心得ハ存シマセンガ、僅ニ三十石ホカ取ラヌ私ノ如キ  
 小祿者カ返納致ス以上ハ、三千石モ取ツテ居ル小栗・  
 淺野ノ兩人ニハ見セルマデモナク、御返上致スコトニ  
 存シマスカラ、兩人ノ分ヲ私ヨリ返納ニ及ヒマス、勿  
 論思召ノ趣ハ兩人へ申聞ケマスと言ツテ、ソレヲ返  
 納致シマシタ、ソレデ其俣ニテ済ンデ仕舞ヒ、私ハ御  
 用デ佛蘭西へ行キマシタガ、帰朝シテ後ニ聞ケハ、留  
 守中ニ例ノ幕府ノ瓦解デ、大麥ナ騒デ、奥羽ノ方デハ  
 佐竹・津輕ナドハ勤王方ニナリ、南部全体ハ佐幕ノ方  
 デニ派ニ岐レマシタガ、其時秋田藩ノ大繩・田代ノ兩  
 家老ハドウシテモ、徳川家ニハ背カレヌ、ト云フノハ

当家ニ於テ増毛・宗谷ノヤウナ蝦夷地ヲ以テ居テハ、費用ガ掛ツテ困難デアルカラ、幕府ヘ返納ヲ願ツタケレドモ、幕府ノ役人ガ慾ガ深クテ賄賂バカリ取ツテ、聴濟ニナラナカツタ、ソレヨリ度々出願シタケレドモ、ドウシテモ許サナヒノヲ此度速ニ許サレテ、殊ニ君公ヨリノ御礼ヲ受ケスシテ返納シタル所ヲ以テ見レバ、當時ノ幕府ハ世間デ謂フヤウナモノデハナヒ、純潔ノモノデアルト言ツテ、兩人ハ佐幕論ニナリマシタ、夫レガ為ニ兩人ハ藩中ノ反対党ヨリ嫌疑ヲ受ケテ、大繩ノ如キハ暗殺サレ掛ツテ大傷ヲ負ツタ、併シ兩人ガ佐幕論ヲ唱ヘタルニモ拘ラス、秋田藩ハ勤王ニナリマシタケレドモ、兩人丈ハ佐幕デ居タト云フコトデゴザリマス(完)

#### 四八〇 岡崎脱藩士戊辰戦争記略

本篇ハ、予カ嚮ニ毎日新聞社ニ在リシトキ、友人寺井克巳君ヨリ同紙叢談ノ材料ニトテ、予ノ許ニ寄セラレタルモノナリ、当時未タ之ヲ紙上ニ載スルニ及ハスシテ、予カ同社ヲ辞シタルヲ以テ、遂ニ載スルヲ果ササ

リシ、君ハ旧岡崎藩士ニシテ、同藩ノ侍読ヨリ少參事タリシ寺井喜角翁ノ男ナリ、明治ノ初年藩ノ貢進生タリ、後チ横濱税関・大蔵省等ニ奉仕シ、曾テ予ト同僚タリシコトアリ、近頃官ヲ辞シ旧藩主ノ家扶トナラレシト聞ク、サレハ本篇ノ脱藩士中、翁カ門下ノ子弟モ多カリシ由ナレハ、此記ノ確實ナルハ云フモサラナリ、實ニ當時ノ史料トシテハ、得易カラサルノ珍書ナリ、此頃筐底ヨリ探リ得タルヲ以テ、貴誌ニ寄ス、之ヲ予カ前年毎日新聞紙上ニ載セタル旧幕遊撃隊士澤某等カ、函館獄中ニテモノシタル同隊日誌ト參觀セハ、蓋シ其全貌ヲ得ルニ庶幾カラント云尔、

丸毛利恒記

#### 關口敬恭及行藏瘞髮碑

今茲庚寅九月十六日、郵船会社汽船武蔵丸、航南海、遇颶覆没於紀洋、船員五十余名皆溺、而機関士關口行藏与焉、於是從弟高橋有方、經記後事、併行藏及其兄敬恭遺髮、瘞諸東京北部染井村、以為墳墓、有方謂予曰、往年敬恭客死于莊内、墓碑未建、今行藏亦死、非命、意知二子者莫如君、願述其平生、勸諸墓石、予為惻然久之、乃叙其梗概曰、敬恭通稱有之助、世

仕<sub>二</sub> 岡崎城主本多侯、性沈毅有<sub>三</sub> 氣節、好<sub>二</sub> 讀書、通<sub>一</sub> 大義、  
 明治戊辰春、有<sub>二</sub> 伏水之變、敬恭慨然曰、吾儕受<sub>三</sub> 徳川  
 氏、于今三百年、致命報<sub>一</sub> 國、此時為<sub>二</sub> 然、遂与<sub>三</sub> 同志  
 属<sub>一</sub> 幕軍、戰<sub>二</sub> 京畿、拒<sub>一</sub> 函嶺、転鬪陸奥、後赴<sub>二</sub> 莊内、匿<sub>一</sub>  
 于田川郡八興村、翌年為<sub>二</sub> 官兵所捕、不<sub>レ</sub> 屈而死、行蔵  
 氣宇航躡、見<sub>レ</sub> 義敢為、不<sub>レ</sub> 避<sub>二</sub> 艱難、善<sub>一</sub> 武技、最精<sub>二</sub> 器  
 械学、因從<sub>三</sub> 事航海、欲<sub>レ</sub> 有所為焉、社中所備洋客、倨  
 傲侮<sub>レ</sub> 人、而独眼<sub>（服力）</sub> 行蔵技倆、特加<sub>二</sub> 畏敬、行蔵為<sub>レ</sub> 人如  
 此、若使<sub>二</sub> 其全<sub>一</sub> 天年、不<sub>レ</sub> 止<sub>二</sub> 於一機関士<sub>一</sub> 矣、哀夫、嗚  
 呼予之於<sub>二</sub> 敬恭兄弟、交誼尤親、而前後聞<sub>三</sub> 其不幸、人世  
 死生離合之際、寧可<sub>レ</sub> 堪<sub>一</sub> 慨哉、敬恭行蔵皆生<sub>二</sub> 東京、敬  
 恭死時<sub>（十才）</sub> 二才又一、行蔵三十有七、

明治廿三年十月

天野鎮三郎撰文

關口有之助、莊内在八興奥屋村ニ皆ヲ治療シ居レリ、  
 同村ノ寺僧農夫ニ至ル迄、同人日常ノ動作ニ感歎シ、  
 欣慕シタリト、同村ノ農夫半三郎ナル者ノ実話ニカカ  
 ル筆記中ニ、

一 巳二月廿二日朝、差上候モ恐入候ヘトモ、半三郎

紋付ノ綿入袴ツ、關口様ヘ差上申候、

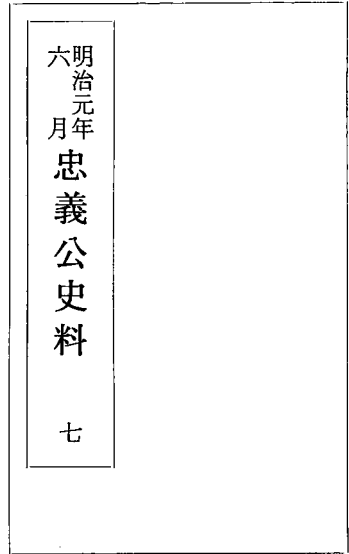
一 右同日、林高院始メ村方ノ者二十人位、道十町程

見送り仕候、

莊内藩官軍ニ降伏ノ際、關口ニモ亦降伏セヨト勸メラ  
 ル、同人敢テ動カス、遂ニ明治二年四月廿一日ヲ以酒  
 田ニ斬ラレタリ、刑死ノ後八ツ興村半三郎ハ遠ク酒田  
 ニ至リ、深夜官軍警衛兵ノ熟眠セルヲ窺ヒ、窃カニ其  
 遺骸ノ埋葬シタル所ヲ発キ、首級ヲ盗ミテ帰村シ、賢  
 明院殿精勇英了居士ト彫刻セル石碑ヲ建テ、年々四月  
 廿一日ヲ以テ祭祠ヲ行フト云フ、以テ国人感化ノ及ホ  
 ス所ヲ知ルベシ、但シ關口ノミナラス、天野某外一人  
 (樵村)ニ云、天野ハ豊次郎ト称シ、遊撃隊ノ士ナリ、  
 伊庭軍兵衛ノ門下ニシテ、擊劍ヲ善クス、外一人ハ曰  
 ク、遊撃隊ノ士ニシテ佐藤喜惣次ヲ云ヘルナリ、喜惣  
 次父ヲ桃太郎ト云ヒ、幕府旗下ノ士ナリ、其斬ラル、  
 トキ、年方ニ(廿七)同時ニ斬ラレ、一所ニ埋メラレタ  
 ルナリ、遺骸発掘ノ際、關口ノ腹恐シキ響ヲ発シ、大  
 ニ驚キタリ云々、又天野ノ首級ヲ盗ミ来リ、水ニテ洗  
 ヒキヨメシトキ、鼻血沢山ニ出タリ云々、当時旧藩医小  
 幡貞叔同所ニ到リ、探聞セン模様ヲ亡父(克巳氏ノ先人  
 喜角氏)ニ語リシ節、傍聴セシコトヲ思ヒ出シタリ、農  
 夫トハ言ヘ半三郎ノ如キハ、実ニ賞スヘキ人物ニコソ、



〔稿本表紙〕



〔稿本にて補正〕

四八一 新納刑部ヨリ兵隊上京ノ事ヲ小松帶刀等

ニ報ス

明治元年六月忠義公史料綱文

六月一日、在庁新納刑部ヨリ、兵隊上京ノ事ヲ在京ノ小松清廉等ニ報ス、其ノ書左ノ如シ、

一 拾三番隊

一 拾四番隊

一 大砲隊

右御城下

一 外城四小隊

内

式小隊番兵

砲小隊

但清水三分隊

日當山砲分隊

砲小隊

但末吉半隊

財部半隊

一 御兵具方附士砲小隊

合小銃八小隊

大砲砲座

右ハ此節兵隊上京之儀被申越候付、

中將様達

御聽則右之通上京被仰付候旨申渡、蒸氣船帰着次第  
早々被差立手筈ニ候、自然蒸氣船帰着及遅延候ハ、  
時機見計、成丈早目陸地差立候様可取計候、幸今日  
市來六左衛門出立、上坂掛致出崎候付、若哉諸侯等  
ニ蒸氣船御借入之都合相調候ハ、右ヨリモ早々被

差越度申談、其段六左衛門へ申含越候事ニ候、大頭御  
手当之形行此段申越候、委細之儀ハ上村休介江申含越  
候間、御承達可給候、以上、

辰六月朔日

新納刑部(久徳)

小松(清藤)帶刀殿

島津(広兼)伊勢殿

岩下(万立)佐次右衛門殿

島津(久徳)主殿殿

四八二 越後長岡在淵邊高照ヨリ京都軍賦役ニ

銃砲・彈薬ヲ請求ス

コノ日、越後長岡在淵邊高照直右衛門ヨリ、京都軍賦役ニ銃  
砲彈薬ノ請求ヲナセリ、其ノ書左ノ如シ、

淵邊直右衛門自越後報知

尚々、右松持越候彈薬少々雨萌不用立候、製作所ハ  
如何心得ヲ以繰出候欵、別テ箱入付等不始末ノ至ニ  
候、

追々銃砲彈薬御差統相成度、度々申越候得共、爰許ハ  
御繰出欵モ候得共、今ニ不相届、只今戰モ於四所相初、

昼夜戰通ニテ玉葉別テ相費候間、早々御差統被度候、  
尤右松ニモ一昨日着陣相成、実大幸此事ニ候、先ツフ  
ランケツト杯ハ、暖氣入用無之候間、一日片時モ早々  
彈薬御差統被成度、余ハ戰爭中難申進候、以上、

長岡

六月朔日

淵邊直右衛門

京都詰

御軍賦役頭取衆

御軍賦役衆

追テ、小隊於諸所戰爭、手負・死人等ニテ相少ク候  
間、先ニ小隊ハ是非応援被差出度御座候、

四八三 江戸城内ニ於テ戰死者ノ招魂祭ヲ執行ス

二日、大總督江戸城内大広間ニ於テ、両野・総・房・武・

奥州等ニテ戰死シタル者ノ招魂祭ヲ執行シ、諸藩隊長・

司令士等ヲシテ拜礼セシム、其ノ達書及狀況左ノ如シ、

今般両野・総・房・武・奥州之箇所ニテ致戰死候輩、

来月二日巳刻御城内大広間ニオヒテ、招魂祭被仰付候

条、諸藩隊長・司令士登城拜礼被仰付候事、

五月廿八日

一 祭式御用掛

河 鱒 大夫

祭式掛

渡邊清左衛門

大田 銈 次郎

池田庄三郎

祭主

大久保初太郎

介添

桑 原 真 清

祭式記録方

錦 部 内 記

一 追々両野・総・房・武・奥州ノケ所ニテ合戦死、或ハ

深手ニテ療養中死去致シ候輩、諸藩々不洩様、明廿九

日限り書付ヲ以可申出候旨被仰付候事、

但僕隸之者迄モ可申出事、

大総督府

五月廿八日

諸藩

下参謀

各中

前儀之通被仰出候条、為心得此段相達候、以上、

但刻付ヲ以早々御廻達可有之事、

五月廿八日

御使番

薩州藩

右之通御達相成候間、可被得其意候、此段及御達候、以上、

五月廿八日

相良治部

隊長中

監軍中

四八三ノ二

六月朔日御布告書之写

今般両野・総・房・武・奥州数箇所ニテ致戦死候輩、

明二日巳刻御城内於大広間、招魂祭被 仰出候条、諸

藩隊長・司令士登城拜礼被 仰付候事、

六月

同日諸道戦死之者招魂合祭、於大広間修行、

其式如左、

其日の平旦祭主祝部の諸司等先出殿、後取等をして諸席を定め、賛薦を敷しむ、辰の刻先枝を修す、畢て介

添靈床に神靈を居、櫛の小枝をさし、仮の神籬を造る、造り訖れハ祭主座を立て、靈床の前に向ひ、微音に招魂の祝詞をのる、招魂のわさ畢れハ、後取節を打こと而段、大総督宮次に公卿、諸侯方、進で殿の北方の上段に列座したまふ、神事総裁ハ一の間の北の端に着し、祭式掛の人々並書記ハ二の間の北方に座す、祭主介添ハ向ひて南方に座し、各藩の隊長・司令士等三の間に群集す、楽人ハ一の間入側に座し、其余下參謀・軍監等之人々、南北かた／＼に別れて列座せり、座定まりて後、祝部一人玉串をとりて介添に渡す、介添転し、取て直に靈床にむかひ奉幣す、捧畢て楽人樂を起す、祝部等入側に順立して供物を転進す、奉幣の儀のことし、捧畢て祝部等二の間の入側に列座す、楽人樂を止む、総裁令旨を捧けて祭主に渡し給、祭主進て令旨を拝戴し、直に進て靈床の前に立、高声に令旨を宣ふ、のべ畢て令旨は傍の台上に居、本座に着す、畢て大総督宮御座を立たまひ、靈床の前に向ひ再拜拍手したまふ、次に三條左大将以下公卿方順次に席を立て再拝したまふ、畢て各藩の隊長・司令士等二の間に進て靈床を拝し、又大総督宮を拝す、衆拜し畢て本座につく、

大総督宮・公卿方みな退入したまふ、総裁ひとり本座にあり、祝部等座を立て、前のごとく順立す、楽人また樂を起す、供物を撤すること獻する儀のことし、徹し畢れは楽人樂を止む、後取節を打こと而段、祭主・介添立て退入す、楽人亦立て退入す、儀式畢て後改めて各藩隊長並司令士を列座せしめ、神酒・乾魚の供物を賜ふ、祝部・後取之輩此儀を掌る、畢て各藩人退出す、祭主また靈床の前にむかひ、微音に送靈の祝詞を述る、此儀畢て総裁退出し、祭式掛の人自余の諸司と／＼退散す、然して後祝部等また退出す、

四八四 島津忠義・忠寛及ヒ秋月藩ニ、来ル五日  
関東発向ヲ命ス

コノ日、忠義・忠寛及ヒ秋月ニ、来ル五日関東発向ヲ命シ、当日ノ軍容ヲ観覽アルベキヲ達セラル、尚忠義ニハ東海道附近残賊ノ処置ヲモ委任セラレタリ、ソノ達書左ノ如シ、  
四八四ノ一

島津修理大夫

来ル五日、從

禁闕直ニ関東へ発向可致候、就ては同日辰刻、御暇参  
朝被 仰出候事、

但去月廿五日被 仰出候通、於南門行軍

叡覽被為 在候間、為心得申達候、尤同姓島津並

秋月兵隊同様、行軍

叡覽被 仰出候事、

六月二日

四八四ノ二

島津修理大夫

東国下向被 仰付候、然ル処於東海道筋モ残賊処々ニ  
顕海シ、既ニ於小田原暴挙致候哉ニ相聞へ、右ハ民心  
ヲ動揺シ、

王化ヲ妨候段言語同断之所為、別テ被惱

宸襟候付、精々遂探索相当之処置可致、当節右様之儀

何方ニ差起候モ難凶、臨時裁断凡テ御委任被遊候条、

至重之

聖旨奉体認、緩急宜ヲ得、

御威徳相輝候様奮励尽力可致旨

御沙汰候事、

六月二日

但議定職同様被 仰付候上ハ、於途中緩急有事節ハ、  
府県及諸藩等江致差配候儀可為勿論事、

四八五 諸藩ニ京師駐在ノ兵ヲ解キ、藩内ノ兵備

ヲ修ムヘキヲ令セラル

四日、諸藩ニ京師駐在ノ兵ヲ解キ、藩内ノ兵備ヲ修ムヘ  
キヲ令セラル、ソノ書左ノ如シ、

諸藩江

万石ニ付、国元江五十人之兵士備置、京師江二十五人  
残置候様、前後御布告有之候処、京師江残置候人数之  
儀は、一切御取消ニ相成候間、国元之分厚ク備置可申、  
何時出兵可被 仰付も難計、尤是迄残置候人数ハ、伺  
濟之上進退可為致候事、

六月

【参照】

附録一条

御当地へ人数残置候様御沙汰御座候処、御取消之段被  
仰出候付、為引取可申哉、此段奉候候、以上、

松平但馬守内

六月九日

三浦多一郎

軍務

御役所

十二日批紙

高宅万石ニ付、国元ニ可備置五十人之内ニテ、三分之  
一京師ニ残置、其余ハ引払可申事、  
按スルニ京師駐在ノ兵、一旦罷帰ノ令アレトモ、四方  
猶虞アルヲ以テ此命アリシナラン、

四八六 島津忠義自筆ヲ以テ、関東発向ニ付、上下

戮力奮励スヘキノ告諭書ヲ発ス

コノ日、忠義自筆ヲ以テ、明日関東発向ニ付、上下戮力  
奮励シテ、成功ヲ期スベキノ告諭書ヲ発セリ、ソノ書左  
ノ如シ、

六月中小

五日 朝雨少々晴

一昨日

御筆仰出有之、今朝御出馬前、於御式台前出軍人数一  
統江拜聞被仰付候、広メ人益山、

一今般為東国鎮定出馬之重命ヲ辱ふし候義、

皇国御大事ハ無申迄も、国家之武威立不立ニ関係いた  
し候得は、自ら存亡此中にあるへしと令心痛候、当時  
百難四出之形態は、各熟知之通候得は、君臣戮力

王事ニ鞠躬すへきハ、此時ニあらずや、抑軍務ノ枢機  
ハ廟謨精密にして、間ニ髪ヲ容さる之活用に出されハ、  
豈百戰百勝之理ヲ詭味する事ヲ得ンヤ、我等不肖なか  
ら三軍に將たり、各同一体ヲ以羽翼せん事ヲ請ハさる  
事不能、各亦相互ニ助合セ、力ヲ致さずんハあるへか  
らず、今に至り尊卑ヲ分ち、局ヲ異にいたし候は愚之  
至ニ候間、我等固より衆庶之苦ニ先たん事ヲ主にし、  
出陣中軍機は一切直裁ニ不及候間、本営ヲ一局にして、  
家老・側役・軍賦役頭取・軍賦役一同出席、衆議公論  
之体ヲ居、一点之私意なく親密ニ己ヲ尽シ、奮励努力、  
蒙命之成功ハ不及言、

皇国維持之大業屹と相立候様心頭ニ銘シ、呉々も不肖  
ヲ賛補いたし呉度、不堪渴望候也、

此度御出馬ニ付、御別紙ノ通御筆ヲ以テ被仰出候条、  
一同奉承知、御趣意致貫徹、聊心得違ノ儀共有之間敷  
候、

六月

〔島津広兼〕  
伊勢  
〔島津久兼〕  
主殿  
〔忠義公史料影写にて校訂〕

四八七 越後口淵邊高照官軍難戦ニ付、援兵派遣

ヲ請求ス

コノ日、越後口淵邊高照ヨリ、官軍難戦ニ付、援兵ノ差遣ヲ請求セリ、ソノ文左ノ如シ、

一別紙之通、総督様ヨリ被成下差送候間、跡家内江御配当被成度御座候、

一別紙之品ハ、其内先一ツ火急用ノ品故、差急キ御差統被成度御座候、

一長岡落城ハ去ル廿二三日時分申上候通ニ候、其後松澤小栗山ノ戦ニ大勝利ヲ得、実ニ愉快御座候処、参謀衆ヨリ一ツ之謀計有之候間、小栗山辺相守候様致承知、

左之通致分配候、

一小栗山峠并間道

高田一小隊、薩外城四番一小隊・同三番半隊、

一片桐村

薩州二番遊撃半隊・田ノ口一小隊、

一指出村

長州二小隊、

一杉澤村

薩州十番一小隊、

一大面本道

薩州一砲門・高田等之兵砲護、

一芝新田

上田二小隊・同一砲門、

一今町

尾州一小隊・高田二小隊、

右之通致手配相守候、賊徒諸所江突出、小戦ハ昼夜ヤリ通シニ候、然処去ル二日今日江賊襲来候故、長州三好軍太郎・熊野直介・桂権吾并拙者致出張致指揮候処、

賊徒少シ致進撃候得ハ、直ニ尾・高之両藩逃去候ヲ漸喰止メ為防戦候処、熊野・三好モ銃傷ヲ蒙リ、諸下知拙者并桂権吾ニ相成候処、諸方之弱兵両人之眼ヲ抜キ、

直ニ逃去候故、長州三番隊為応援参候得共、何分崩立タル央故、終ニ俱崩ニ相引ニ相成、漸新田辺ニテ喰止、

賊ハ先ツ相引之様ニ被察候、十分ノ味方敗走ニテ、実ニ残念之至御座候、尤遊撃半一番隊等ハ與板ノ方江進

撃、尤此方江右松ニモ出張相成候、右ニ付テハ信州其外之各藩出兵相成候得共、実ニ両藩兵外ハ(マツ)当不相成候間、左之通ノ人数早々御繰出相成度、尤細事ハ折田権藏差戻申候間、細事御聞取可被下候、

一小銃一大隊

一大砲一隊

一御軍賦役屯人(成龍)

右之通御繰出相度、尤黒田ハ病氣、右松ハ與板並出雲

崎江相進ミ、長相談役之三好・熊野ハ手負、実ニ拙者

ハ屯人、外ハ拙者ヨリ目次ニ有之、実ニ込入候、余ハ

御推量可被下候、以上、

六月四日

淵邊直右衛門

京都詰

御軍賦役衆

追テ、賊追々必死ニ相成、殊ニ数度負ヲ取、戦ハ実

ニ功者ニ御座候、

四八八 島津忠義出征ヲ停メラレ、代リニ島津伊

勢ヲ関東ニ赴カシム

五日、忠義先ツ稻荷社ニ参詣シ、御条書ヲ令達シテ参内、更ニ親征先鋒ノ心得ヲ以テ、発向スヘキノ勅諭ヲ拜シ、金三万両並ニ御衣・御劍等ノ下賜ヲ受ケテ退朝ス、時ニ大総督府参謀西郷隆盛帰京言上スル所アリ、朝議俄ニ変シテ忠義ノ出征ヲ停メラレ、島津伊勢ヲシテ代リテ関東ニ赴カシム、ソノ関係書類左ノ如シ、  
四八八ノ一  
一今日辰刻御参内被為在候様、從 朝廷兼テ太守様御承

知ニ付、刻限前以御屋敷稻荷社江御参詣、音楽等有之、

詰ノ御役々・島津主殿殿・御留守居ニ御目見被仰付、

諸隊御目見相濟、御条書軍賦役頭取成田正知相広候、

御条書

関東ノ兇徒未至平定、万民塗炭ノ苦ヲ受ケ、兵烟不絶ノ趣被聞食上、深被悩宸襟、速東行令鎮定一受成功ノ旨蒙朝命、敢テ雖不当其任、更ニ不顧不肖謹テ御請仕候、素ヨリ万民塗炭ノ苦ヲ不被忍至仁之聖旨ヨリ、不被為得止追討被仰付候得ハ、厚御趣意ヲ体認シ奉ラスンハアルヘカラス、強ニ誇リ弱ヲ凌キ、万民ヲ苦シメ法律ヲ乱シ候ハ、則賊ノ所業ニ候、堂々タル官軍ハ恩威並行ヒ秋毫モ侵ス事ナク、到ル所王化ノ辱キヲ感伏奉リ候様無之候テハ不相濟候付、克々其邪正相反スル



所謂ヲ相弁シ候儀、着眼ノ肝要ト存候、依テ定約左之  
通申聞候、

一 道中行軍ハ勿論、在陣中各礼讓ヲ專一ニ心掛、押前ノ  
前後令ヲ守リ、不条理ノ事申掛候テモ、私ニ争論ニ不  
及、其筋江申出是非曲直ヲ正シ、公平ノ所置ヲ可仰事、  
一 變動ノ節ハ、各隊列備嚴正シテ指揮可相待候、供列ノ  
面々ハ早々本亭江駈付請持ノ職ヲ守リ、猥ニ奔走シ混  
雜ヲ引キ候次第有之候テハ、可為不覺候、

一 陣中上下寢食劳逸ヲ同シ、各定置候屯所ヲ離レ、無用  
ノ集会且人家ニ立入乱妨ケ間敷儀、堅令停止候、

一 浮説流言堅ク禁止シ、自然難差置事件聞及候節ハ、速  
ニ其筋ヘ可申出候、

一 宿駅人馬繼立且旅宿ニテ、猥ニ忿怒ヲ発シ、下輩ヲ恐  
縮イタサセ候儀有之間敷候、

右五ヶ条堅可相守者也、

六月

右ノ通広メ方相濟、兵隊江御酒御肴等被下、直ニ御参  
内御劍御拝領有之、追付御出陣ノ筈ニテ、拙者ニモ殿  
上ヘ罷出候様、御留守居新納嘉藤(立本)ニヲ以致承知候付、  
罷出候処、様ヨリ今日御出陣御供拙者イタシ

候段、被聞召通、白晒地一疋・御扇子二本右様

ヨリ御渡下候テ、御酒肴被下候段致承知、佐土原家老  
酒匂求馬・秋月隊長ニモ同席江罷出、御酒肴被下致退  
出居候処、西郷吉之助江戸ヨリ馳帰り、直ニ御所ヘ罷  
出、江戸表先無事、此方一番隊・二番隊・三番隊・一  
番遊撃隊モ白川表ヘ繰出シ、先日京師出陣ノ御城下拾  
式番隊・私領二小隊モ、三邦丸・富士艦二艘江戸着陣  
ノ由ニテ、別テノ都合、乍併何分君公御出陣ニ候得ハ、  
守具趣意計ニシテ攻ノ術無之、尤モ奥羽ノ儀ハ九月ニ  
相成候得ハ、寒氣ニモ相向、イツレ八月中ニハ是非ト  
モ賊徒全平治不致候テハ不相濟事候間、君公ニハ則御  
帰国、大兵ヲ挙テ再御上京、時宜次第御東下モ可被遊、  
依テ此節ハ兵隊マテ拙者召連、東下致シ候様トノ御沙  
汰ニテ、御城下七番隊・九番隊・十一番隊・番兵一番  
隊・二番隊、外城一番隊・二番隊、御城下大砲一座拙  
者召連、惣裁ニテ十字比御所打立致出陣候、尤於南門  
前行軍備觀覽候、島津淡路守殿モ御供ノ筈ニテ、参内  
有之候処、右モ同断被召止、兵隊一小隊丈東下可致ト  
ノ事ニテ、此御方様行軍跡ニ召列候、秋月兵隊ハ此方  
附属ノ筈候処、御免相成候、左候テ佐土原兵隊ハ主人

明治元年(1868)

用向有之、暫時大雲院江罷帰、追付大津駅ノ様可參ト  
ノ事ニテ、三條通ヨリ罷帰候、道中見物人行散ノ事ナ  
リ、兵隊差引本營方ヨリ島津小平太・末川主税・島津  
藤十郎・御軍賦役頭取成田正右衛門・御軍賦役坂本廉  
四郎ニテ候、

四八八ノ一  
勅旨

島津少將

関東之儀大ニ懸念ニ付、既ニ先日万民を救はん為、速  
に親征之外無之決心之处、一同評議申出候趣も有之、  
先暫猶予致し候内、其藩初奮闘勦戦の力に依て、白川・  
長岡の賊壘陥落、且江戸上野兇徒も追伐ニ相成、追々  
鎮定の運びにハ相趣き候得共、尚此末の勢何とも不安  
心、且ハ奥羽の地上古来未浴王化、此後の所も何れ関  
東江出征致さずしてハ、逆も永久帰順ニ至らざる歟、  
就ては必出馬可致存候間、先先鋒の心得にて汝速ニ発  
向、朕親征迄之处専ら平定尽力可致候、

六月五日

四八八ノ三  
今度東下之儀、不容易重任速ニ奉命之段、

御満足被

思食候、依之以出格之儀、内々

御直衣一領

御擣杓一領

賜之候事、

六月五日

四八八ノ四

島津少將

累年為國家尽力之上、追々所々出兵、国力如何可有之  
哉ト被

思食候処、猶又無余儀次第ニて、今度出馬被

仰出候ニ付、内々

金三万兩

賜之候事、

六月五日

右外同日錦旗一流・御劍一振白鞘

御拝領之事、

四八八ノ五

忠義公・淡路守・秋月長門守へ御沙汰書

嶋津修理大夫

此度東海道発向

朝命を奉し、已ニ今日上程軍列

叡覽をも被

仰出候処、大総督府より急報、白川城之官軍奥羽江進

撃ニ付、其藩人数海路を取り、仙臺近海江可差遣言上

之趣有之候間、早急海路発軍被

仰付候、就ては其方儀先見合、国元兵隊上着之上、追

て

御沙汰可有之条被

仰出候事、

但軍列之儀ハ、被為遊

叡覽候段被

仰出候事、

六月五日

鳴津淡路守

別紙之通、島津修理大夫へ被仰付候ニ付テハ、其方并

兵隊共先在京有之、追テノ御沙汰可奉待旨被仰出候事、

別紙薩州へ御達書写添、

秋月長門守

右同文其藩兵隊在京云々、

四八八六

別紙同断

忠義公へ御沙汰書

鳴津修理大夫

過日東海道発向被 仰付、已ニ上程ニ臨ミ、大総督宮

より急報之趣有之、先見合本国兵隊上着之上、追て

御沙汰可有之被 仰出候処、何分奥羽討伐之儀ハ、至

急之事ニ有之候間、一応帰国、大兵を率ひ速ニ海路東

行、大総督宮・三條右大臣等申合、早々奥羽鎮定可有

之被

仰出候事、

六月

私事一応帰国、人数ヲ率ヒ速ニ海路東行仕候様被仰出、

明九日発途仕候、此段宜御執奏奉頼候、以上、

六月八日

御官名

【参照】

嘉藤二主殿ニ通牒書

一天杯

一錦御旗 一流

一御劍 一振

一御扇子 一本

一御反物 一匹

一勅筆御写 一通

一御直衣 一領

御書附相添

一御金 三万兩

御書附相添

一御達書

右ハ今辰刻御参内、夫ヨリ直ニ東征御出馬可被遊、軍列於南門被為觀覽旨御承知被遊、細袖細袴之御軍装ニテ御車寄ヨリ御上リ、議定職御席へ御通被遊候処、於小御所被為拝竜顔、天杯御頂戴、錦御旗・御劍・御扇子・御反物、中山前大納言様御取伝ニテ御頂戴被為濟、又御学問所へ被為召勅筆之御書御拜見、御召下リ之御服并御金、右御同人様御取伝ニテ御頂戴被遊、勅筆之御書ハ御拜見迄ニテ御返上、御写正親町三條様ヨリ御渡相成、且又於麝香之間御替席、御酒肴御頂戴被遊候、

然処御書附之通、江戸大総督府ヨリ急報之御訳被為在、太守様ニハ御進発追テ御沙汰可被成、兵隊丈ケ直ニ御繰出相成候様被仰出、右軍列於南門觀覽被為濟、七ツ時被遊御帰殿候、

但御拜領御品之儀ハ、御留主居付役才領ニテ、南御

門開扉御座間へ差通シ、御礼之儀ハ、即座ニ岩倉

右兵衛督様御取次ニテ、御奏聞相濟申候、

中将様御儀ハ、御承知之上重臣ヲ以御礼被仰上候

様、岩倉様雜掌ヨリ承リ申候、

右之通私御供相動申候間、此段申上候、以上、

辰六月五日

新納嘉藤二

主殿様

(朱書)

一勅筆写等御右筆頭へ渡置、御文台ニ載、議政所江為

備、水仙之間之格ヲ以御家老・若年寄拜見、御側役

御右筆席詰之事候得共、議政故不及其儀候、

一御一門方鶴之間へ御出席之上、御家老中出席、勅筆

写等御右筆御文台へ備之、月番御家老ヨリ勅筆写等

御拜見有之候様演達、御拜見畢テ被退座、

但御用人・御側役・御右筆頭老入ツ、席詰、外ニ

御用人致引進其俛着座、

一島津信濃一列松之間へ着座、御家老中御原ノマ、付江出席、

勅筆写等御右筆御文台へ載相備之、月番御家老ヨリ  
拜見有之候様演達、拜見畢テ退座、

但御用人・御側役・御右筆頭耆人ツ、席詰、

一神社奉行ヨリ当番頭迄、無役大身分、寄合・寄合並・

部屋栖ニテ、月次御礼罷出候面々、松之間縁類之格、

御用人以下諸役人竹之間之格ヲ以、御対面所三之間

并居、御対面所御中段へ御家老中出席、演祝畢テ勅

筆写等御上段塗御敷居上江御文台ニ受、御右筆相備

人数見計、段々拜見ニテ退座、

但御用人兩人・御側役耆人・御右筆頭耆人席詰、

一小番・新番・御小姓与之儀、一同御対面所三之間ニ

並居、御中段御敷居上江御右筆相備、一同拾人計ツ

、相進、拜見退座、

但御用人等席詰如例、

四八九 大久保利通東下ヲ命セラル

コノ日、大久保利通亦東下ヲ命セラル、ソノ達書左ノ如

シ、

大久保一蔵

従前勉勵ノ処、御一新ノ秋ニ当リ殊ニ尽力、朝廷ヲシ

テ今日ノ隆運ニ至ラシムルハ、旧主ノ忠誠ニ原クハ勿

論ニ候得共、亦汝等ノ力ニ頼ルナリ、然シテ今般当官

ヲ以テ東下被仰付候御旨趣、最重任ノ儀ニ候得ハ、一

層奮発イタシ、関八州及ヒ奥羽ノ残賊ニ至ル迄、速ニ

可奏鎮定之功様、大総督宮・三條等ヲ輔翼可有之旨御

沙汰候事、

六月

【参照】

大久保利通日記

五日

一辰刻 君公（茂久公）御暇御参内ニテ、小子同刻参

朝、

一君公於小御所被拜 天顔、御劍・錦旗御頂戴、御金

三万両被下、御紙面二通 御渡相成候、

一於御学問所 天盃御頂戴、御真翰御拜見、御写ニテ

御拝領被為在候、御装束御拝領被為在候、

一佐土原侯統テ於小御所御中段、御拝領物有之候、

一 佐土原侯終テ小子於小御所御中段 天顏拜被 仰付、  
中山一位殿御取次ヲ以、晒一疋・鎧一掛・御書付一通  
御渡相成候、実ニ不堪恐懼次第也、

一 今朝西郷吉之助上京、於関東評議之趣有之、何分人数  
差出候儀至急ニテ、君公先御延引兵隊而已早々繰出  
候様ト之言上ニテ、其通 朝議御決定、君公御見合人  
數其俣差出候様御達ニテ、御止リ相成候次第也、小子  
事海路東下候様御達ニテ候、

四九〇 藩庁関東出軍並京都守衛ノ為軍隊ヲ差遣  
スヘキヲ達ス

七日、藩庁ニテハ関東出軍並ニ京都守衛ノ為ニ、軍隊ヲ  
差遣スヘキヲ達セリ、ソノ達書左ノ如シ、  
四九〇ノ御城下

- 一 十三番隊
- 右同
- 一 十四番隊
- 右同
- 一 四番大砲隊

右ハ此節於長崎洋船借入之筈候付、廻艦次第江戸表へ  
出軍被仰付候条可申渡候、

但出立日限之儀ハ、別段可申渡候、  
六月 〔新納久傳〕  
刑部

(朱書)  
辰六月七日

御本文之通大隊長江申通、向々江取次証文ヲ以申渡  
候、

取次

猪飼 〔尚書〕  
央

四九〇ノ二

吉利群吉

右ハ、此節御城下ニ小隊并大砲隊江戸へ出軍付、被差  
出候条可申渡候、

但出立日限之儀ハ、別段可申渡候、  
六月 刑部

(朱書)

辰六月七日

御本文之通群吉名代へ申渡、向々へ取次証文ヲ以申  
渡候、

取次

猪飼 央

四九〇ノ三

中原猶介(簡勇)

右ハ、関東戦争付、江戸へ被差出候条可申渡候、

但出立日限之儀ハ、別段可申渡候、

六月

刑部

(朱書)

六月七日

御本文之通猶介名代へ申渡、向々へ取次証文ヲ以申

渡候、

取次

猪飼 央

四九〇ノ四

一清水・日當山

合一小隊

一財部・末吉

合一小隊

一御兵具方附士一小隊

一岩川一小隊

一櫻島・谷山

合大砲一座

右ハ為守衛上京被仰付候条、地頭・領主並御兵具奉行  
へ申渡、可承向へモ可申渡候、

但出立日限之儀ハ、別段可申渡候、

六月

刑部

(朱書)

辰六月七日

御本文之通、諸地頭・領主并御兵具奉行へ申渡、向  
々へ取次証文ヲ以申渡候、

取次

猪飼 央

四九一 東條慶次・大山彦八任官ノ旨ヲ在京島津

主殿ヨリ藩庁ニ報ス

コノ日、東條慶次・大山彦八先月任官ノ旨ヲ、在京島津  
主殿ヨリ藩庁ニ報ゼリ、ソノ通知左ノ如シ、

任官通知書

東條慶次事兵庫判事、大山彦八儀徴士京都府權判事

明治元年(1868)

被仰付候旨、別紙之通銘々届申出候付、相添此段申越候条、中将様可被達御聴候、以上、

辰六月七日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

東條慶次

兵庫判事被仰付候事、

五月

大山彦八

徴士京都府権判事被仰付候事、

五月

四九二 島津忠義帰国ノ上大兵ヲ率イテ東行シ、

大総督宮等ト謀ツテ奥羽ヲ鎮定セシム

八日、忠義ニ一旦帰国シテ大兵ヲ調へ、海路江戸ニ赴キ、大総督宮并ニ三條右大臣等ト謀リ、速ニ奥羽ヲ鎮定スヘキ旨ヲ達セラレ、忠義直ニ之ヲ請ケテ、明日発途スヘキヲ奏上セリ、ソノ書左ノ如シ、

島津修理大夫

過日東海道発向被 仰付、已ニ

上程ニ臨ミ、大総督宮より急報之趣有之、先見合本國兵隊上着之上、追て

御沙汰可有之被 仰出候処、何分奥羽討伐之儀ハ、至

急之事ニ有之候間、一応帰国大兵を率ひ、速ニ海路東行、大総督宮・三條右大臣等申合、早々奥羽鎮定可有

之旨、被

仰出候事、

六月

御書付一通

但太守様御国許へ御暇被仰出候儀候付、

右ハ非蔵人口へ唯今御呼出ニ付、罷出候処、御書付大

原左馬頭様ヨリ被成御渡候間、可申上旨申述置候、

右之通、御留守居付役勤小野半左衛門相勅申出候間、

此段申上候、以上、

辰六月八日

新納嘉藤二

主殿様

私事一応帰国人数ヲ率ヒ、速ニ海路東行仕候様被仰出、明九日発途仕候、此段宜御執奏奉頼候、以上、

六月八日

御官名



(朱書)

「一御一門方始メ諸士へ拜見被仰付候趣、伺申渡シ候留ニ有之」

四九三 暗殺者ヲ嚴重ニ緝捕セシム

九日、令シテ嚴重ニ暗殺者ヲ緝捕セシム、ソノ違書左ノ如シ、

近來頻ニ路人ヲ暗殺シ、其所持之品奪取候趣、甚以不埒之事ニ付、屢嚴重之 御沙汰ニ被為及候得共、兎角其惡習難去、

御政道モ不立次第ニ付、猶又此度嚴重ニ被 仰出、家來ハ其主人、兵隊ハ其隊長、其余末々ニ至テハ其父兄ヨリ取締致シ、自然右等之所業有之候節ハ、其最寄ヨリ早々取押エ刑法官へ可申出候、万一藩士・兵隊等之内ニテ不心得之者有之、被召捕ニ於テハ、本人ハ被処嚴重刑、其主人・其隊長等ハ不及申、品ニヨリ父兄一家之落度タルヲ以テ、屹度御咎ヲモ被 仰付候条、不取締無之様厚可相心得旨被 仰出候事、

但夜中往來致候節、無提燈不相成旨、追々被仰渡有之処、中ニハ不相用者モ有之哉ニ相聞エ、以之外

之事ニ候、以來無提燈往來之者有之候ハ、見付次第可召捕候、並市中ニ於テ乱妨致候者ハ、帶刀之者トイヘトモ、無用捨召捕、万一手ニ余リ候ハ、打果シ不苦候事、

六月

四九四 島津忠義京都ヲ発シテ帰藩ノ途ニ就ク

コノ日、忠義京都ヲ発シテ帰藩ノ途ニ就ク、

【参照】  
四九四ノ

大久保利通日記

八日

一訪後藤氏、君公御下坂之筈候処、御延引之旨申來候由、九日

一四字比君公御下坂、西本願寺へ罷出候、於途中奉拜候、税所へ差越、西郷・得能難波橋へ船納涼イタシ候、

十日

一西本願寺へ為伺御機嫌罷出候、税所本書欠文宿跡へ転宿イタシ候、

十一日

一 君公御乗船、卯刻本願寺迄罷出候、卯半刻御立被為在候(本編及ヒ石室秘稿參看)

一 彦熊(二男乎)千年川帰国為致候、

一 四字比ヨリ船ヲ浮へ納涼、長谷川・伊丹等之催ニテ壯

觀ナリ、

四九四ノ一

道島家記

太守公御下国之儀、或人ノ嘶ニ、五月廿八日江戸御出馬之筈候処、東海道筋洪水ニテ御延引、六月五日御出馬之筈ニテ御所へ御上リ被成候処、錦ノ御旗並直垂等御拝領被為在、既ニ御出馬ニ相成候処ニ、西郷吉之助江戸表ヨリ着イタシ、何様之訳ニテ候歎、関東御下向ヲ差留、俄ニ御下向相成候ヨシ、

但兵隊惣テ関東へ被差向、御側廻リ殊之外相少候間、

兵隊御引列御上京可被遊候間、三十日御暇段相濟、

御下リニ相成候事、西郷吉之助モ相付罷下候由、

軍ノ根元ノ人相付被罷下候由、如何候ヤ、人皆疑

惑ヲ生シ候ヨシ、又ノ説ニ、関東征討將軍仁和寺

宮ノ御使ニテ、太守公江戸表へ御出馬相成候テハ、

先手ノ隊兵太守公ニ氣ヲ付、夫丈ケ勇氣相ス、マコ

意ニ付、御出馬相止候由、尤人数相少候間、大兵御引列御出馬有之候様候トノ事ハ、是迄一時ノ權變モシルベカラス、後事ヲ見ルヘシ、

四九五 藩庁耶蘇宗徒分預者ノ警衛法ヲ調査報告

ス

コノ日藩庁ニテハ、耶蘇宗徒分預者ノ警衛法ヲ宗門方ヨリ調査報告セリ、ソノ報告書左ノ如シ、

但シ調査書ヲ逸ス、

御預キリシタン宗格護吟味報告書

此節御預之キリシタン宗執行之者共、御当地着之上ハ差当召置、先致吟味可申出旨承知仕、篤ト評議候処、頭取之者モ罷居候ハ、右ハ上・下・西田町格護所又ハ扣所江被願置、其余ハ寺院江三十人計ツ、モ引分被召置、外出等不致様、御兵具方足輕ヨリ警衛被仰付可然儀ト吟味仕候、此段申上候、以上、

但申出被仰付テハ、寺院之儀ハ神社方江吟味被仰渡

度御座候、

辰六月九日

宗門掛

辞令

四九六 藩庁私領主ノ在府遙領ヲ改メテ無用ノ冗

費ヲ省キ軍器ヲ備フヘキヲ達ス

吉井幸輔

六月

越後表賊焰再熾ニ付、当官ヲ以早々出張被仰付候事、

十日藩庁ニテハ、私領主ノ在府遙領ヲ改メテ無用ノ冗費ヲ省キ、軍器ヲ備フベキヲ達ス、ソノ書左ノ如シ、

四九八 淵邊高照越後口ノ戦況ヲ在京軍賦役ニ

報ス

一所持之儀、中古以前ニハ各其領地江土着治乱嚴備之邑政被仰付置、イ在置不慮之急變致到来候テモ、自在不失軍機速ニ出兵之御軍制ニ候処、治平之風習押移候テヨリ、終ニ在府遙領之御規定相成候付、領地居宅之儀、是迄

コノ日淵邊高照直右衛門越後口ノ戦況ヲ在京軍賦役ニ報ス、ソノ書左ノ如シ、

仮屋ト可被相唱候、畢竟家作等ハ勿論、追々無用之冗費相省、軍器相備候様有之度トノ御趣意ニ候条、此旨

尚々、是ヨリ進撃之節ハ、是迄丈ケハ弾薬モ費申間敷存申候、

申渡、御一門方之儀ハ内用頼御用人江申渡、可承向ヘモ可申渡候、

六月

刑部

四九七 吉井友實北越ニ出張ヲ命セララル

十三日、吉井友實輔幸北越ニ出張ヲ命セララル、ソノ達書左ノ如シ、

川南東右衛門問合相達、此方為応援出兵之由ニテ、実ニ力ヲ得申候、当所ヨリ新潟迄ハ、格別要路ハ無之候ヘ共、何分平地広野ニテ、口々ノ進撃余藩ヘ両藩兵隊少々宛、締トシテ相付致進撃候ヘ共、賊徒少シ進撃イ

タシ候へハ、直ニ玉葉等相切レ候退キ候故、外隊々後ヲ賊ニ取ラレ、味方大キニ致難儀、実ニ込入仕合御座候、尤各藩司令士呼出、如何様勵シ候テモ、何ノ役ニモ不相立、廉恥ナキ士衆致方無御座候、此末御軍律ヲ以、從朝廷屹ト御沙汰無之候テハ、相濟間敷ト存申候、

一 罌ヲ相守昼夜戰爭ヤリ通ニテ、一昼夜ノ戰凡彈藥三小隊分之打捨、五千位ニモ相及候間、是非別紙丈ハ、早目御繰出相成度候、勿論遠國へ致出張候へハ、彈藥而已ニ心配致事ニ候間、御推計可被下候、尤去ル廿八日出立之大迫慶藏于今着不致、実ニ案居申候、

一 兵隊之儀、長州ヨリモ近日一大隊半位着陣之筈ニ付、外ニ兵隊御繰出候儀ハ、其許先生方御吟味次第ト存候、勿論至近頃賊徒余程戰功者ニ相成、淀・鳥羽之振合ニハ參不申、併強兵三小隊着陣之上、直ニ賊城ヲ攻抜キ可申ト存候、

一 奥羽鎮撫之四番遊擊如何ト案居候処、一昨十一日和田五左衛門ヨリ書翰相達候処、三公並兩藩之兵佐竹へ在陣之由、大山格之介モ元氣之由、長州世良君ハ戰死之由ニ申來、彈藥一万位差送り置申候、

一 終日終夜台場へ立通シニテ、凡日數九日位ハ戰通ニテ、其内ニハ苦戰モ有之、実ニ疲労モ不可言之至ニ御座候、此節ハ薩・長ノ兵無之テハ、成功ハ遂候儀六ヶ敷存候、戰死・手負等取シラへ申進度存候へ共、黒田了介ハ于今病氣、右松ハ出雲崎へ出張、本陣へハ拙者老人ニテ、乍残念存通り參不申候間、後便ヨリ取調可申越候、以上、

六月十三日

淵邊直右衛門

京都詰

御軍賦役頭取衆

御軍賦役衆

四九九 嘉彰親王ヲ會津征討越後口總督トナシ、本藩船立田丸ニ兵糧ヲ輸送セシム

十四日、軍務官知事嘉彰親王ヲ以テ、會津征討越後口總督トナシ知事故、ノ如シ、三等陸軍將西園寺公望・壬生基修ヲ參謀トナシ、本藩帆船立田丸ヲシテ、北越ノ官軍ニ兵糧ヲ輸送セシム、ソノ辞令及達書左ノ如シ、  
四九九ノ一

仁和寺兵部卿

当官ヲ以テ會津征討被仰付、可為越後口總督事、

但至急出馬可致旨御沙汰候事、

六月十四日

四九九ノ二

西園寺中納言

北陸道鎮撫使被免、此度仁和寺宮為會津征討越後口へ  
出馬ニ付、其參謀被仰付候事、

六月

按スルニ、官中日記閏四月二十三日ニ、公望ヲ以  
テ北国鎮撫使ト為スノ条アリ、職務進退録・太政  
官日誌等之ヲ載セス、而シテ進退録翌日ノ条ニ、  
三等陸軍將ニ拜スルノ命アリ、之ヲ公望ニ質スニ、  
亦鎮撫使ノ命ナシト曰フ、然ラハ則本条北陸道鎮  
撫使被免ノ八字蓋シ誤レリ、

四九九ノ三

壬生左衛門權佐

此度仁和寺宮為會津征討越後口へ出馬ニ付、当官ヲ以  
テ其參謀被仰付候事、

六月十四日

四九九ノ四

薩州

其藩帆前船立田丸、越後表之官軍塩噌払底及困窮、且  
石炭差支候旨申來候ニ付、急々御差統ケ不相成候テハ、  
大兵別テ難儀ニ可及ニ付、早々越後高田迄積届候様可  
致事、

但品物請取方之儀ハ、兵庫出張軍務官へ引合候様可  
致候、

六月十四日

軍務官

御書附一通軍務官ヨリ御渡相成候付、差上候事、

六月十四日

新納嘉藤二

錄附 忠義家記老臣書翰ニ云、御船立田丸越後行之儀、  
別紙之通被仰渡候付、乗組之者へ可相達旨、則大  
坂御留守居へ申越置候間、疾ニ出帆相成候半ト存  
候、御心得旁此段申越候、

【参照】

主殿報知

越後表ヨリ先月廿八日出立、郷原昌十郎帰京、去ル十  
三日出立足輕一人同断戦争之形行承候処、賊兵モ初発  
之人数ヨリ近頃ニ至リ漸々相増、地利ニハ委敷、諸所  
台場等築立致防戦、又ハ彼レヨリ押寄、官軍越前並高

田勢等及敗走候儀モ有之、尤官軍ニモ薩・長両藩丈ニテ、他藩ハ格別頼ニ不相成、當時之勢ニテハ、却テ敵ヨリ輕蔑イタシ候程之儀ニテ、愈以暴威相募、或夜中ナト陣所近辺等差越、悪言ヲ吐相罵候儀共有之候由、然レ共官軍應援モ不相統候処ヨリ、數口之連戦ニ勞レ、其上彈藥等残少シニ相成候時宜モ有之、爰元ヨリモ時々差統候ヘ共、陸路相応之路程ニテ、急々埒明兼候儀モ有之、乍然当分之内全払底ト相成候程之儀ハ無之、先彼是都合宜敷、当分ニテハ双方台場ヲ築、近クハ志町、遠クハ三町程之敵合ニテ、終日終夜鉄砲セリ合ニテ、時ヲ移シ官軍ニハ折角應援ヲ相待、着次第ニハ大軍ヲ以攻掛、一時ニ巢窟ヲ屠候計略ニテ、先攻撃モ見合居候由、乍然兵之不統内虚ヲ襲候様之儀、至極懸念ニ存候処、先彼ヨリ致暴擊候向ニモ無之由、昨十九日曉致着候足輕申出候、然処長州其外別紙之兵隊、追々出兵イタシ、十四五日頃ニハ長兵等ハ着陣之賦之由、左候テ去ル五日出兵之薩兵三小隊モ、来ル廿四五日頃ニハ着之賦、且志州鳥羽ヘ上陸之兵隊モ去ル十五日、同所出立北越ヘ向候由、是以不日同断、外ニ伊勢殿同行之内二小隊、是以差分彼方ヘ差向候賦ニ候、官軍ハ

大ニ力ヲ得、賊軍ハ氣ヲ拔レ、不日大勝利之報知相違有之間敷、左候テ

仁和寺宮様モ、北越征討為御総督御出馬之御内定之由候ヘ共、イマタ表通御発ニモ不相成、何分此節ハ官軍

暫時之苦戰仕、糧食之隙サヘ無之程之事之由ニ候、

一海江田武次儀、去ル九日病氣御暇ニテ関東出立、海路

ヨリ帰路、於江戸表ハ一統平定程之事ニテ、其後賊兵

一人モ不相見得由ニ候、尤同人儀爰元本宮方ヘ相動候

様申渡候、

右之通越後表之形行大意申越候、委細ハ彼表ヨリ之間

合書等相添、本宮方ヨリ申越候様相達置候間、披見之

上

太守様

中将様可被達

貴聞候、以上、

辰六月廿日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

五〇〇 島津忠義着慶ヲ藩内ニ達ス

コノ日、忠義鹿兒島ニ着シ、即日家老ヨリ藩内ニ達セリ、  
ソノ書左ノ如シ、

達書

太守様益御機嫌能、去ル九日京都

御発駕、同十一日大坂 御出帆、今日七ツ過前之濱江  
御着船、御行形 御着城、猶御安康被遊 御座奉恐悅  
候、依之御一門方島津信濃(久慈)一列並諸大身分、其外月次  
御礼罷出候面々、諸士・諸座付士明十五日四ツ時登  
城、於席々謁御家老御祝儀可被申上候、

但大奥江兼て御祝儀被申上來候面々は、有来通被申

上、京都江は追て飛脚使より同断被申上、(島津忠徹)随真院

様(久光親安)於盛様江も同断可被申上候、

一 地頭之儀、以書状御祝儀可被申上候、御当地江参合候  
分ハ右同日登城、謁御家老同断可被申上候、且諸郷噉・  
組頭之儀ハ、於地頭仮屋御祝儀可申上候、

一 詰合之琉球人右同日九時登城、謁御家老御祝儀可申上  
候、

右之通、

御両殿様江御祝儀被申上候様、早々向々江可致通達候、

但改服、左候て 御着城御式向等都て被為済候筋被

仰付候、

六月十四日

(島津珍彦)

備後

(島津久治)

圖書

(川上久齡)

龍衛

(新納久隆)

刑部

(町田久憲)

内膳

(島津久芳)

隼人

五〇一 乾行丸指揮役冲直次郎着京ノ上五月廿九

日以来乾行丸ノ行動ヲ報告ス

コノ日、乾行丸指揮役冲一平噉次直京ノ上、五月廿九日

以来乾行丸ノ行動ヲ報告セリ、ソノ文左ノ如シ、

六月八日越後出立、同十四日京着乾行丸乗組冲直

次郎ヨリ届

一 五月廿九日晝、能登国七尾出港、当夜六ツ過佐渡国小

木港入津致探索候処、賊徒ハ長岡落城都テ退散、一人

モ不罷在由承及候、

一同日於当港、桑名江戸屋敷ヨリ之武具類其外雑具、日

本船へ積込、越後辺領分へ差廻筈ニテ、三月江戸出帆

之処、桑領都テ被攻取候付、何方へ船ヲ寄候儀不相調、  
当港へ繫船之処、長艦丁卯丸ヨリ見当リ相押へ、武器  
類ハ乾行丸・丁卯丸・柳川千別丸等之三艘へ相分チ、  
残りハ柏崎督府へ差出置候、

一右之品具足幾千

一フランスミニーケベル数百挺

一槍

一右外旗具

一合葉少々

一六月朔日新潟港廻船、渚ヨリ拾六町余之処へ繫船、陸

ニハ騎馬斥候ヲ敷人品モ折々相見へ、汀渚涯ニハ兵卒

モ少々相見へ居候、詳明ニ不相分候、

一当港ハ、上杉並溝口少々人数差出守衛仕居候、是ハ全

ク反賊ニ疑ナク御座候、昨日晩ニ及ヒ、長之軍艦ハラ

イフル少々放懸之由、乾行丸ハ右船ヨリ少々足入多ク

候故、少々沖ニ繫候故、其儀全ク不存知候、

一翌二日七ツ時分ニモ候哉、新潟出港柏崎へ赴帰船、蒸

気管相損候付、修覆イタシ候、

一同八日未明ヨリ出雲崎へ滞航、長艦ハ連日風ニテ佐渡

へ相避申候、御船ハ柏崎ニテ錨二房ニテ下漸繋留置、

今日出帆之事、

右二十七日已来大概ニテ御座候、以上、

五〇二 正月以来朝命ヲ奉シ戦死セシ者ノ氏名ヲ

録上ス

十五日、当月以来朝命ヲ奉シ、戦死セシ者ノ氏名ヲ録  
上セリ、是ヨリ先本月三日、五月廿九日令達ノ廻状ヲ以  
テ、十日迄ニ録上スヘキ命ニ接シタレトモ、忠義帰藩閣  
東出軍等多忙ノ為メ、本日ニ延引セシナリ、ソノ関係書

類左ノ如シ、  
五〇二ノ一

戦死者姓名月日ヲ届出ヘキ達書

戊午以来、国事ニ殉難致シ候靈魂祭祀可被為在旨、

兼テ被

仰出置候処、今般差掛リ当正月以来奉

朝命奮戦死亡之輩、祭典被

仰出候間、藩々ニ於テ一々取調へ、来ル六月十日迄ニ

兵士死亡之月日・姓名等相認、神祇官へ差出候様被

仰出候事、

五月



五〇二二

届書

非蔵人口へ御呼出、大原左馬頭様ヨリ御渡相成候旨、  
森岡様衆ヨリ廻状相達候ニ付、差上候事、

辰六月三日

内田仲之助

五〇二三

断書

当正月以来奉

朝命奮戦死亡之輩、祭典被

仰出候間、藩々ニ於テ一々取調、来ル六月十日迄ニ兵

士死亡之月日・姓名等相認、当御局へ差上候様、先達

テ被 仰渡置候処、御名発途旁ニテ、未取調相成不申

候ニ付、出来次第早々差上候様可仕候、此段被聞召置

可被下候、以上、

六月十日

御名内

新納嘉藤二

五〇二四

戦死者録上書

市來勘兵衛惟宗政武

伊集院與一藤原兼豊

毛利強兵衛大江元景

椎原小彌太源 国寧

伊東強右衛門藤原祐啓

中原彌次郎平 広庭

伊集院金次郎源 正雄

八田 幸 輔藤原知義

山田孫一郎平 有義

西 藤次郎藤原長孝

塩田 雄 蔵

伊地知惣吉

平岡彦九郎藤原之綱

加治木清之丞大蔵兼文

古後七之丞

堀 彌之助藤原金徳

白尾孫兵衛藤原幸次

宅間惣左衛門藤原道治

入 佐 助 八藤原兼友

福田喜左衛門藤原政清

宅万榮之丞藤原道近

平川 文 助藤原常尚

原田 敬 助

明治元年(1868)

門松喜藏  
柳田藤左衛門平安則  
山内雄助藤原弘道  
橋口與助  
坂本亮之介  
田中藤五郎  
河野彦介  
染川彦兵衛  
赤塚源之進  
中原休左衛門  
二階堂右八郎  
池之上新八  
武川直枝  
岩山佐平太源直義  
上田友輔  
坂元仲藏  
肥後嘉二平盛徳  
伊地知清八  
河野助五郎  
野村清兵衛源盛英

前谷宗智平惟則  
平田喜右衛門藤原正次  
川北六左衛門  
永山覺太郎  
加納次右衛門  
築地宗次郎  
松井十郎兵衛  
鷓木吉次郎  
岩城平右衛門  
西田要之進  
草野直太郎  
伊地知助五郎  
岩切彦次郎  
佐藤彦五郎  
鎌田尚圓藤原政厚  
赤井清心源直政  
阿多孫次郎藤原実輝  
平川助左衛門藤原常行  
溝口雄四郎藤原俊純  
關十郎左衛門藤原長信

堀添清左衛門源篤行

田中直次郎藤原守時

橋口彦四郎藤原兼高

大河原壯之助藤原隆近

豎山卯一郎藤原利意

大山源左衛門藤原行安

黒田平左衛門

廣瀬喜兵衛

隈元太一左衛門

益滿休之助

川西與十左衛門吳幸実

大場軍助平景廉

四本佐平次藤原英風

小野藤吉

家村彦五郎平住容

入田新左衛門藤原親賀

野村正八

竹下猪之丞

中原八郎藤原景貞  
鮫島十郎兵衛藤原宗弼

坂元仲右衛門平安容

松崎勘助

佐藤林蔵

長静吾

臼井道哉

兒玉源兵衛

上村玆樹

野崎半左衛門

阿多新吾

平原平八郎平定正

松木嘉右衛門平重秀

濱田藤介

肥田雄太郎藤原景直

濱田七之丞藤原義秀

江口孝右衛門平盛義

村尾十次郎平将直

有川嘉吉郎中原貞直

篠崎勘七藤原友明

藤崎甚四郎藤原敬直  
竹下平左衛門藤原種秀

上村戸右衛門

井上伊右衛門

内藤金治

唐釜勘助

奥新五左衛門

京都東漸寺住職種子島産竹庵

中村源吾家来

月野徳次郎

夫卒休八

助市

太郎

右ハ当正月以来奉

朝命奮戦死亡之輩、祭典被

仰出候間、取調姓名等相認差上候様被

仰渡取調申候処、右之通ニ御座候、此段申進候、以

上、

六月十五日

御名内

新納嘉藤二

(朱書)  
一張紙

河野宗八

犬迫村

藤助

右辰四月廿日、下総国於岩井駅戦死、

兒玉清兵衛

右辰閏四月廿七日、越後小出口ニオイテ戦死、

田中清右衛門

右辰五月朔日、奥州白川進撃之節同断、

床次吉之助

竹迫十次郎

海江田新右衛門

岩下半之助

右辰五月十五日、上野攻撃之節同断、

右之通り申来居候事」

五〇二五

主殿報知

当正月以来、奉

朝命奮戦死亡之輩祭典被

仰出候間、取調当月十日迄、兵士死亡之日・姓名等

相認、神祇官へ差出候様、従太政官代被仰渡候処、

御発途旁ニテ致延引、去ル十五日別紙之通御届申上候、

御留守居首尾書等三通相添此段申越候条、

太守様

中将様被達

御聴、其元申渡之儀ハ御吟味次第可被取計候、以上、

辰六月廿日

嶋津主殿

島津圖書殿

御家老中

五〇二ノ六

右返書

(朱書)

「本文致承知達

貴聞候、左候テ親族へ申渡之儀、自カラ御祭典濟之

上ハ、尚又形行被申越ニテ可有之、其上申渡候方一

同致吟味、先申渡扣置候、尤取調候処、一列之内ニ

名前洩居候モ、右ハ尚又御取シラベ之上、御届被相

成候テ可有之候へ共、為御見合別紙へ致張紙差出シ

候、以上、

但御達書ハ扣置候、

辰八月廿二日

町田内膳

島津主殿殿」

五〇三 島津忠義東征奉命以來ノ經過ヲ藩内ニ布

達ス

コノ日、藩庁ニテハ、五日忠義東征奉命以來ノ經過ヲ藩内ニ布達セリ、ソノ達書左ノ如シ、

達書

太守様御事、去ル五日辰刻

御参

内、夫より直ニ東征 御出馬可被遊、軍列於南門被為

在

叡覽旨御承知被遊、細袖細袴之御軍装ニテ、御車寄よ

り

御上り、議定職御席江御通被遊候処、於

小御所被為拜

竜顔

天杯御頂戴、錦御旗一流・御劍一振・御扇子一本・御

反物一疋、中山前大納言様御取伝ニテ御頂戴被遊、

勅書之御筆は御拜見迄ニテ御返上、御写正親町三條様

より御渡相成、且又於麝香之間御替席御酒肴御頂戴被

遊候、然処御書附之通、江戸大総督府より急報之御訳

被為在、

太守様ニは御進発追て 御沙汰可被成、兵隊丈ヶ直ニ

御繰出相成候様被 仰出、右軍列於南門

觀覽被為濟、七ツ時被遊 御帰殿候、尤兵隊之儀、嶋

津伊勢惣裁ニて直ニ出軍、御礼之儀は、則座ニ岩倉右

兵衛督様御取次ニて、 御奏聞相濟、左候て去ル八日、

非藏人口より御留守居御呼出ニ付、罷出候処、

太守様御儀一応御帰国、海路より御東行被遊候様と之

儀、御別紙之通大原左馬頭様より被成御渡候段申出、

左候て二印之通御届被仰上候、依之御一門方嶋津信濃

一列并諸大身分、月次御礼罷出候面々、諸士・諸座付

士於席々謁御家老、御祝儀可被申上候、

但大奥江兼テ御祝儀被申上来候面々ハ、有来通被申

上、京都江も追て飛脚便同断被申上、随真院様・

於盛様江も同断可被申上候、

一地頭之儀、以書状御祝儀可被申上候云々、

外ヶ条略ス、

右之通

御兩殿様江御祝儀被申上候様、向々江可致通達候、

六月十五日

備後

圖書

龍衛

刑部

内膳

隼人

五〇四 官軍平潟港ニ上陸ス

十六日、官軍鹿兒島・熊本・佐土原・備前・柳川等ノ藩兵平潟港ニ上陸ス、

一六月十六日第七字比、岩城平潟へ蒸気艦三艘・和船着

仕候ニ付、戊卒等出テ来意ヲ承候処、船中ヨリモ小船

ヲ卸シ、泉藩星野嚴浦・越井保太郎上陸、奥羽為討伐

ノ官軍御東下ノ旨伝達仕候上、両士ハ泉へ立去申候、

此人数左ニ

薩 州 十二小隊 日向佐土原 一小隊

備前岡山 二小隊 筑前柳川 二小隊

肥前大村 人数不詳 肥後熊本 一小隊

右大凡千人余ノ由

此所ヲ戌ル仙藩隊長大江文左衛門、不意ノ事ニテ、

防戦ノ用意未調ニ、官軍八方ヨリ上陸進撃相成候ニ付、一支ヒニモ不及上田迄引退キ申候、

### 五〇五 乾行丸指揮役沖直次郎馬關出帆後行動ノ

#### 概要ヲ報告ス

十七日、乾行丸指揮役沖一平直次郎馬關出帆後行動ノ概要ヲ報告セリ、ソノ書左ノ如シ、

#### 沖直次郎報知

馬關出艦前之事情ハ先書ニ報ス、以後之情態概略左

#### ニ粗述テ報告ス、

一五月十三日未明、筑・長・薩三艦共ニ馬關出航、

一同十四日黃暮、隱岐州後之水門ニ三艦共卸錨ス、先從

是本島土民、管轄之國雲州松江之苛政ニ苦ム事多年、

方今御一新之期ニ臨ミ、当春西園寺公、雲・但辺御巡

行之際、歎訴

朝廷之御支配奉願候処、先ツ其通ニ被聞届候由、其後

先マコン通り雲藩支配被仰渡候テヨリ、一揆蜂起、具令江

過去ノ罪条ヲ書記ヲ以詬シメ、報復ノ条理無之候ハ、

速ニ嶋地退去可致、左候ハ、御一新之仁政可相仰段、

強訴申立候処、具令無申訳届伏ト申ス一通ヲ差出、疾

ニ鼠走、右ニ付土民愈王民ト申儀ニ相募リ、雲藩之命

令ニ不応、右陣舎趾ヲ文武学校ニ相營ミ、人氣奮起致

シ折柄、雲藩ヨリ五百人計差渡シ、去ル十日会集所ヲ

調練之集勤ニ召働致シ暴襲シ、十三人統殲、十人余ヲ

搏シ、暴動不大方ノ段相聞得折柄、因州江モ其趣相達、

景山龍藏ト申者被差渡、撫恤ノ最中ニテ候得共、中々

承知不致様子ノ処、薩・長軍艦加焉、筑艦迄モ一時ニ

入津故、雲人ハ驚屈因人ハ開眉ニテ、則右景山御船江

被參旁ノ示談有之、素ヨリ私共ニモ撫恤ノ評決ニテ、

本島江航海ノ事故及探索候、尋問候得ハ、雲藩ノ苛政

無疑候故、是迄ノ通滞船候テハ、終ニ不穩ノ所置有之、

且人心ノ安堵自業ニ委儀モ一向ニ不相成候付、段々条

理申立及論談候処、雲人モ前罪ヲ謝シ、良夜自藩蒸氣

艦ヨリ都テ帰國致シ無事故、土民ヲ安堵為致、同十五

夜九ツ時兩船共出帆、

一同十七日未明越前敦賀港着、

一同十八日未明能登岬輪島着、

一同十九日同銷島碇泊、

一同廿日同断、

一同廿一日越後今町港着、  
 一同廿二日未明出港、出雲崎江航之処、彦山五里計沿  
 海江、二橋外車装置ノ蒸氣船此時五、一隻碇泊致シ居候ヲ、遂ニ  
 見懸候付、出雲崎江此時五卸錨不致直ニ出航、二三里計  
 モ通ル時、彼ノ艦モ火ヲ点シ候様子候得共、石炭粗懸  
 候哉、急ニ蒸氣不相釀サ、乍漸運動ヲ起シ候、然処乾  
 行丸ヲ先ニ五町計相進メ、長艦ハ後ニテ愈廻ルニ、両  
 艦之間ヲ通航スヘキノ形ニテ艇來ル、寺泊港ニ至リ、  
 放発相始度候得共旗章不分明、五丁位ニ相逼候ニ、前  
 櫓ニ小旗ヲ建、上白下赤之印、全ク船ハ徳川氏ノ順動  
 丸ニ無相違、乍併賊ノ巢穴ニ突然ト繋船ノ事故、賊艦  
 ニハ無疑候得共、誠ニ砲発候ハ、何カ応報ノ事情可  
 有之故、目的ヲ他ニ準シ、十二斤砲放致候処不相応、  
 且旗章其外哨船ヲ卸シ談判ノ事情モ無之、又十八斤砲  
 一発致シ候得共、是又同什トナリニテ、其内長艦ヨリモ放発  
 ニ及候故、決心致シ、目的ヲ相照シ放撃致候処、彼方  
 ヨリモ放発致シ候得共、小口徑ト相見得半途ニ没海、  
 弥相逼リ連発致候ニ、的中モ不少候故、於敵艦切迫相  
 成候哉、寺泊港陸方暗礁ヲ無理ニ乘越、其俣船共礁上  
 ニ駕セ置、哨船ヲ卸シ上陸空艦ト成シ候様子候得共、

何分拾丁余モ隔候故不分明、暫時砲撃候得共応報無之  
 候間相止メ、右艦分捕攝海江相廻シ献進、諸薄ノ醒覺ワキ  
 ニ備ント存候得共、何モ暗礁船行不相調、陸地敵ノ潜  
 伏モ不相分、夫故出雲崎滞在之高田・加州之一隊繰出、  
 海陸一同攻撃、右船可引出評議ニテ、長艦ヲ右ニ繰リ  
 向出雲崎江差返候此時七、其夜ハ徹宵無間断港前乘廻シ、  
 時々砲発、寺泊人家ニハ一点之燈光モ不見、曉ニ至リ  
 郭外篝ヲ焚候様子ニテ、是ヲ目的トシ四五發致シ候ニ、  
 其火ハ直ニ燼消シ、既ニ東明ニ相及長艦帰港、兵隊モ  
 出雲崎ヨリ繰出候段承候ニ付、皆共專闘戰ノ準備候処、  
 順動丸表櫓ヨリ前火一斉ニ相発シ、両段ト成焚立ヨリ  
 遠野只管額手撫空ノ外無之、是カ昨日ヨリ火繩様ノ物  
 ニ火ヲ付、火葉庫江挿シ置、至其時ニ燃立候半ト被思  
 申候、右ニ付、兵隊ハ少ク出雲崎ニ引揚、両艦モ同所  
 江帰港仕候、順動丸ハ黄暮過ニテ全ク燼燒致候、後日  
 於佐渡承候ニハ、右船ハ方今ハ壳人ノ手ニ倚托相成、  
 佐渡其外年貢米運漕ノ処、当三月於同所賊兵共奪取、  
 当港江繫キ諸所ヨリ運送ニ相用トノ説ニ御座候、  
 一同廿四日、両艦石炭闕乏ニ付、能登七尾港江退キ滯船、  
 一同廿五日、柳川艦千別丸石炭積入入津、



同廿六日翌七日・八日迄石炭積入、且損所等修覆ニテ、同港滯船、

一同廿九日、長・柳艦共ニ佐渡之國小水門江着、桑名藩江戸邸ノ諸雜具、当三月十四日反帆位ノ日本船江積入、越後桑領江廻船之処、戰鬪且都テ落去ニ付、何方江繫船不相調、当所江潛泊致居候様見当、要用之武器ハ無之候得共、武具丈ハ柳・長共ニ分捕、余ハ柏崎會計所江差廻置候、松山船雇来候由ニ付、本国ニ相返候、

一長岡荷城前迄ハ、同所エモ賊集居候由候得共、其後散去、当分一人モ潛伏無之、土民鎮靜ニテ候、

一六月朔日、佐渡出港新瀉滯航、当港之儀ハ遠沙遠方ニテ、江辺ヨリ拾五町許ニ卸錨ヲ、諸辺砂堆岡ヲ成シ、是カ為ニ陸上ヲ遠望モ不相成此岸ト云、自然ニ候長堤砲塚トモ可申欵、実ニ天嶮ノ要所ニ御座候、港ハ信濃川ノ末流ニテ、一日ニ浅深相変シ、別テ懸念之洲沙、十二帆位ノ日本船ハ、川口江繫候得共、洋舶ハ迫モ乗入候事不相成ノ由御座候、

一当港賊有無不分明、上杉・溝口ノ二藩人数屯集之由、九ツ時着港ニテ沿海処々転航巡視之処、初ハ漁船数多

相見得候得共、都テ渚江引揚、堤背江兵隊ト相見得、陰ニ守濶ノ様子、斥候ト見得、騎馬モ段々江辺経行、

実ニ戒心之形、乍併向背不相分、当地在留之旧幕吏有之候間、御用談ノ儀ニ付出艦申達候処、当時勢不得止事情モ、昨晦日五月上杉江当港引渡候間、夫之方江引合候様、返詞申来候得共、是迄ノ所置承度候間、近会有之様押返シ、漁人江相托シ差出候得共、有無ノ返詞無御座候、其内ニ夜更罷成長艦江小銃数発相向候、左候得ハ初之斥候船ヲ不出、菊之御旗ヲ揚候御船ニ如此之挙動、反状確然ニ御座候、併ナカラ当水門ノ儀ハ、夷人交際之事故、何様ノ儀有之候共、夷人江引合此地為避候上進撃可然候由、外国事務官字和島少将公ヨリ、私並本田宛之御手翰ヲ以、被仰渡置候付、兼テ申合置候付、空ク怒ヲ収メ、乍遺恨繫船仕候、翌日兩艦共柏崎江帰港、

一陸之戰爭ハ、自彼ノ表ヨリ細々情実申来候半、至方今人数モ不相続、死傷モ多分ノ所ヨリ固守イタシ、他日各藩出兵之上、一挙ニ殲巢之評議之海軍ニモ応援之事情間、新瀉并出雲崎辺滯港イタシ居候様、長之參謀山縣看助ヲ申者ト及談合、其通決議相成候得共、戒心ノ港、

北海ノ怒濤、石炭乏ニテハ別テ懸念ノ事ニテ、既ニ兩

日焚キ計有之、外ニ涯々差統候手都合無之、必死ト相

逼候儀、事情細々太政官軍務局江ハ勿論、君公江モ可

申上賦、私事去ル八日ハツ後出雲崎上陸、夜白兼行、

一昨十四日朝六ツ時、百五拾里程ヲ五日半ニ京着仕候

処、軍務局ニハ吉井幸輔江申出候処、当人モ今般朝廷

御買入之軍艦江乗入、越後辺江廻航ノ由御座候間、諸

事及示談、私ニモ右江乗船之筈ニテ、十四日昼後京発、

当分浪花滞在仕候、明晩又ハ今晚吉井氏下坂之事御座

候間、中一日計モ滞坂、夫ヨリ兵庫江罷越、發艦之事

カト被存申候、左候得ハ於私モ其通ニテ、又々越後江

可罷越御座候、

右是迄之大凡之事情御座候、以上、

六月十七日認

沖 直次郎

五〇六 諸藩ニ令シテ戎服ノ徽章ヲ録上セシム

十八日、諸藩ニ令シテ戎服ノ徽章ヲ録上セシム、本藩ハ

別ニ徽章ノ制定ナキ旨ヲ届出デタリ、ソノ令達左ノ如シ、

達書

諸藩へ

兵隊肩印・袖印等雛形ヲ以、来ル廿五日限り可届出候

事、

六月

軍務官

参考

以上二百五十四藩此外見ル所ナシ、但シ軍務官記ニ、

鹿兒島・佐土原二藩ハ平日定則ノ印無之段、届出候

トアリ、

五〇七 富士艦船将有川矢九郎平瀉戦争ノ概要ヲ

報ス

コノ日、富士艦船将有川矢九郎平瀉戦争ノ概要ヲ報ス、

ソノ書左ノ如シ、

富士艦船将有川矢九郎

富士艦当湊江致碇泊居候処、昨十七日十二時比陸地江

官軍及戦争候体ニ見受、直ニ運動イタシ致砲発度候得

共、敵味方十分ニ相分不申候処、關田辺江火之手揚、

少々敵味方相分、一字ヨリ賊相屯候様ニ相見得候処江、

拾発位致砲発候得共、答砲モ不致候付、打止メ敵地海

岸要所見分トシテ、諸所致運行候処、鶴木刃（圖ニコナリハマト有之）リ風ト賊ヨリ致発砲、直ニ此方ヨリモ數發打出、賊方海岸付三ヶ所ヨリ俄ニ台場ニテモ取拵候哉、二十發位モ致発砲、右之内ニ發文表並艦打越、其外惣テ砲玉不相達、此方ヨリ三度繰廻シ乗入、賊群集ラ敷場所江ハ數多打込、然処三度目ニハ賊方ヨリ全ク砲發不致、諸所逃去候哉ニモ見受候、五時十分ニ打止メ、此方ヨリ都台五十發位モ致砲發申候、此段御届申上候、以上、

平潟滯船

富士艦船將

辰六月十八日

有川矢九郎

五〇八 当春来留置ノ捕虜ヲ軍務官ニ引渡ス

コノ日、当春来捕虜トシテ留置シタル會・桑兵等五名ヲ軍務官ニ引渡シタリ、是ヨリ先出軍ノ為守兵不足ニヨリ引取ラ軍務局ニ請求シタレトモ、後日ノ指令ヲ待ツベシトテ今日ニ及ヒシナリ、ソノ關係書類左ノ如シ、  
五〇八ノ一

桑名藩

山崎幸一郎

會津藩

松本清次郎

右同藩

山元覺馬

徳川家来

波多野小太郎

右同

遠山專之丞

右生捕之者、是迄弊藩へ番人相付召置候得共、其御筋へ差出候様被仰付可被下哉、先日御差図奉伺趣御座候処、追テ御沙汰可有御座旨承知仕候、然処 御名一応帰国被仰付罷下、就テハ残人数別テ相少、番人数足合不申、自然不行届之變到来仕候テハ、申訳無御座候付、何分早々御差図被下度、猶又此段奉伺候、以上、

御名内

六月十七日

新納嘉藤二

五〇八ノ二

桑名藩

山崎幸一郎

會津藩

松本清次郎

右同藩

山本覺馬

徳川家来

波多野小太郎

右同

遠山専之丞

中将様可被達

御聽候、以上、

辰六月廿日

島津圖書殿

御家老中

五〇八ノ四

桑名藩

山崎幸一郎

右辰正月三日於鳥羽召捕、

會津藩

松本清次郎

右同断、

右同藩

山本覺馬

右辰正月九日於蹴上召捕、

徳川家来

波多野小太郎

右辰正月十七日自訴、千本出水西へ入旅宿堀左衛門尉方へ罷越、岩倉様御家来召捕、

右同

五〇八ノ三

当春戦争之砌、生捕相成候桑名藩山崎幸一郎其外之者共、今般御発途二付、別紙之通軍務官へ奉伺、追々差出相成候、御留守居首尾書等四通相添、此段申越候条、  
太守様

右ハ先日軍務官へ奉伺候趣御座候処、追テ御沙汰可被成被仰渡候処、此節一応就 御帰国再応奉伺候処、今十八日召列当官へ罷出候様、軍務官ヨリ御切紙到来付、右五人之者共軍務官へ列越、御用掛船越洋之丞へ引渡置罷帰候段、御留守居附役隈元敬一郎申出候付、此段申上候、以上、

六月十八日

新納嘉藤二

主殿様

遠山專之助丞カ

三之助

右辰正月十九日自訴、閏四月十八日歎願書差出、

右辰四月五日、大宮通於柏屋万助方召捕、

會津領分百姓

右生捕之者、是迄弊藩へ番人相付召置候へ共、此節

瑛齋

御名東下被仰付候付、殘人數別テ相少、番人數足合

右辰正月五日、於西洞院上長者町上ル長徳寺召捕、

不申此俣召置、自然不行届之變到来仕候テハ、無申

京都因幡堂

訳次第御座候間、其御筋へ差出候様被仰付可被下哉、

菓王院弟子

何分御差図奉伺候、以上、

英明

御官名内

右辰正月十二日於自坊召捕、

五月廿八日

新納嘉藤二

京都

大和屋半兵衛

五〇八ノ五

桑名藩

右辰正月十三日、押小路通柳馬場西へ入於自宅召捕、

山崎幸一郎

京都

伏見屋巳之助悴

會津藩

松本清次郎

由太郎

右同藩

右辰正月十一日、於大佛前七條下ル丁於自宅召捕、

山本覺馬

會津領分百姓

徳川家来

運次郎

波多野小太郎

右辰正月十五日於大津召捕、

右同

右同

遠山專之丞

會津領分百姓

瑛齋

京都因幡堂

藥王院弟子

英明

京都大和屋

半兵衛

京都

伏見屋巳之助悴

由太郎

會津領分

百姓

運次郎

右同

三之助

右ハ此節就

御東下、残人数相少番人足合不申、自然不行届之儀

致到来候テハ、無申訳次第御座候ニ付、其筋へ差出

候様被仰付度、私ヨリ軍務官へ奉伺候処、御用掛船

越洋之丞ヲ以、山崎幸一郎外四人之儀ハ、追テ御沙

汰可相成候付、是迄之通召置、瑛齋以下五人之儀ハ、

明二十九日当官へ差出候様致承知候付、今日御留守

居附役隈元敬一郎ヨリ、右瑛齋以下五人之者軍務官

へ列越、右船越洋之丞へ引渡置、罷帰候段、申出候

付、此段申上候、以上、

五月二十九日

新納嘉藤二

主殿様

五〇九 参与木戸孝允等ヲ江戸ニ遣シ、大総督熾

仁親王等ト車駕東幸等ノ事ヲ議セシム

十九日、参与木戸孝允・軍務官判事大木喬任ヲ江戸ニ遣

シ、大総督熾仁親王・輔相三條實美・大久保利通等ト江

戸ヲ東京ト改メテ、車駕東幸等ノ事ヲ議セシム、ソノ辞

令及形行ノ概要左ノ如シ、

辞令

各通 木戸準一郎

大木民平

以江戸東京ト被定之儀ヨリ、件々遠大之 御内慮被

仰合候通り、速東下大総督官・三條輔相等へ遂評議候

上、復奏可有之候、尤至重之儀ニ付、両士へ被 仰付候間、現在臨其地、治國平天下之基礎相立候様、宜廻神算旨 御沙汰候事、

六月十九日

孝允履歴書

政權ヲ 朝廷へ復シ、太政官ヲ立テ、徴士ヲ会シ、帝都ヲ浪華ニ移スノ議、維新前丁卯ノ歳大久保利通山口来会ノ節、窃ニ已ニ論定ス、戊辰正月ニ至リ利通前論ヲ建白ス、孝允亦共ニ協心尽力セリ、而シテ当時遷都ノ事、朝野物議紛起事甚難被行、依テ先京師ヲ 帝都ト定メ、浪華ヲ西京トシ、江戸ヲ東京トシ、時宜ニ随ヒ東西へ 臨幸被為在度旨屢及建言、其末本書ノ御沙汰アリ原註、當時ノ形勢實際相見ル時ハ、天下ヲ統御シ、各国ニ交通スルノ要地、東京ニ如クハナシ、因テ終ニ之ニ御決定アリ

孝允手記略

六月十一日朝、岩卿之応招参殿、東幸之密事ヲ熟議ス、同十二日例刻参仕、東幸之御一条ニ付、急速東行之御内命ヲ蒙ル、尤大任恐惶ニ不堪也、

同十九日例刻参仕、于時有 命、 玉座咫尺ニ出、親ク蒙 綸言勸語、炎熱苦勞之コトニ及フ、賜御懷中御扇子・御キセル・煙草入・銀煙管・白布等、奉戴

勅書シテ退出ス、

同廿日五字達于浪華、此夜訪後藤談論移時、尽当今之急務也、後藤亦諾余言、

同廿三日揚碇、

同廿五日七字、品川沖ニ着船ス、十一字頃品川ヲ出、

西城御本宮ニ至ル、逢大村与大木共東着之儀ヲ條公之御次へ相届、大木ハ去テ藩邸ニ至ル与大村四月来之内外之事ヲ談ス、于時大久保・大木亦来ル、互ニ相談論スルコト数刻、入夜テ去、

同廿六日与大木氏謁條公、御東幸之大事件ヨリシテ要件尽言上、

廿七日朝、大久保・大村・大木諸氏ト我居ニ相会シ、此度之要件ヲ密議ス、大略一ニ帰ス、因テ又一同謁條公細ニ評議ス、別ニ無異論、実ニ御東幸之一件ハ辱ク至尊御宸断ニテ、今日之機ニ当リ、平定之際ニ至リテハ、百之賞罰其他大処分親シク御裁決在ラセラル、之思食、神州大興起之御基、真ニ于爰相関セリ、依テ御一決之上ハ、迅速帰京復 命センコトヲ思フ、予メ帰期ヲ定ム、今夕約アリ、江藤新平ヲ訪フ、大久保・大村等モ亦到、江藤ハ肥前藩旧来勤王之士也、壬戌之歳

起志脱藩、窃ニ余ヲ尋ネテ京師ニ来ル、依テ余山口繁次郎之宅ニ潜居セシム、尔後丁卯之春一左右アリ、而シテ又今春再会ス、当時知己之一人物也、談笑尽醉七字辞帰、

同廿八日朝、大雨、此日大久保・大村・大木諸氏ト江戸府官舎之体裁ヨリシテ、関八州之鎮台位置等之事件ヲ論シ、條公ニ言上シ粗一定ニ至ランコトヲ請フ、此夕肥前公招余、故ニ直チニ到邸テ謁ス、公遇余甚厚、極醉七字過辞帰ス、此日大久保・大村亦到、大木モ来陪ス、

同廿九日朝、謁條公、京師へ之御答書並ニ要件之廉々相決スル所ノモノヲ御認ニテ御渡シアリ、則余之請ヒ置シモノナリ、江戸府官舎之体裁・関八州鎮台等之事ニ至リ、公之論異ナルモノアリ、依テ又与大久保・大木・大村諸氏論シ、再謁シテ相論シ、大略相決ス、帰京ニ関スル事之余事ハ、大久保・大村二氏ニ相話ス、二字江戸城ヲ出立ス、五字鮫津ニ至ル、大久保・大村・高橋等已ニ蒲屋ニ在リ、不図小松ニ逢フ、小松ハ外国人ト横濱ヨリ江戸ニ至ル途中、余之今日出立スルヲ始テ聞、依テ暫于爰相待ナリ、薄暮大木氏モ亦来ル、七

字頃相別テ去、有暫テ乗小舸、与大木氏肥前艦甲子丸ニ至ル、大原卿モ亦同艦ナリ、船將増田虎之助ニ逢フ、七月四日十二字頃、天保山沖ニ碇泊ス、雇小船与大木氏一同上陸ス、

同五日曉、中ノ島ニ着ス、与北翁又同居、六字頃大雨、七字過到裁判所、訪後藤象二郎、上国之近況ヲ聞、于時過日副島二郎西下、内密与輔相公相謀リ、相公得一左右將到羽州、余聞之且歎且憂、後藤モ大ニ副島ト論議スト云、三字頃帰寓、

同七日到枚方、東方白時々微雨降、十二字過達伏水、四字京着、直チニ御本陣ニ到リ、君上ニ謁シ東國・北國之大形勢ヲ言上シ、又此行大事件之相決スル処、尚東北軍配一定決之件々々陳弁シ、尚君上之御高慮ヲ窺、于時廣澤モ又拜謁座ニ在リ、一同相下リ、与廣澤共ニ寓居ニ至ル、

同八日九字大木ニ至リ、共ニ又輔相公へ参任拜謁シテ、奉命之件々大事相決スル処ヲ逐一言上ス、奉命之件終テ、相公北國行之御議論アリ、余今日根本之確乎タル事尤肝要ニテ、四方出張モ根本之堅ニヨツテ、成敗掌ヲサスカ如シ、然ルニ柱石此際ニ当リ、輕易ニ



御揺動、実ニ為国家不可然之理ナリト相答、別ニ一言ヲ不出、与大木氏共ニ退出シ帰寓ス、

五〇ノ一  
一機師 三人

一集成館人足 六人

内三人越後表ヨリ差出候様申来候、

五二〇 在京製作掛土橋藤五兵衛製作人ノ上京ト

彈藥発送ノ下命ヲ請求ス

一葉包類製作人四人  
但中割

一上製劍銃藥五千斤

但丸印

コノ日、在京製作掛土橋藤五兵衛在京家老ニ、本国ヨリ製作人ノ上京、並ニ彈藥発送ノ下命ヲ請求シ、更ニ集成館銃藥方掛ニ彈藥払底ノ事情ヲ報シ、周旋ヲ依頼セリ、

一廿拇木管 千本  
一携臼砲木管 千本

ソノ書類左ノ如シ、  
五二〇ノ一

一紙管 五千

集成館銃藥方掛之内

四分ノ三

式人

一十二拇木管 千本

右ハ爰元製作方掛閑東諸所江被差出候付、右人数御見

一急火管 五千本

合ヲ以、早々上京候様被仰渡度奉存、此段申上候、以

一急火繩 千本

上、

一驚逃管 五千

製藥方掛

一摩擦管 式千

辰六月十九日

土橋藤五兵衛

一小銃藥玉付ハトロン五百万発

右申出候通被仰付候、

一雷帽子 五百万発

六月

主殿

一四斤半榴彈 五千

但榴彈・散彈見込

一 携臼砲榴彈 千五百

一 右同三眼彈 五百

一 右同光彈 二百

一 二十擲光彈 百五十

右ハ御有合相少候付、御国許ヨリ御取寄相成候様被仰  
渡度奉存候、以上、

製作掛

辰六月十九日

土橋藤五兵衛

申出之通申付候、

六月

主殿

五一〇/三

一 誰様御詰共不奉存候得共、御安康可被成御勤務恐悦奉  
存候、爰元当分静謐ニ御座候得共、追々関東方出兵ニ

テ、当分越後長岡方大キ之戦ニテ、五月五日以来六月  
十三日迄モ昼夜之戦ヒ、其内三日止戦有之、昼夜式万

三千発並シ砲発之由、賊兵必死之由ニテ大キ苦戦ニ御  
座候、当月五日、京都出兵之外城一番・式番、御城七

番隊越後江被差向、追々着モ可有之哉、何分小銃負玉  
菓モ同断ニ御座候、中途着兼候向御座候、最段々之手

負等ニテ人数モ相減候哉、擲臼砲人足之源助ナト打手

ニテ、余程功モ有之、去ル十日ニハ両葉村ト申所ニテ、

拾四人戦死之由申越御座候、製作方掛リモ私老人ニ相

成リ、込リ入候処、此節江戸定府小野曹助ト申方掛リ

被仰付申候、何卒誰レカ御吟味被成下、早目ニ上京有

之趣被成下度奉頼候、外掛リモ段々有之候処、越後表  
ハ新納四郎左衛門、関東ハ伊勢仲左衛門・伊地知十郎、

当月五日ニ税所四郎左衛門関東、草道市郎右衛門越後

之様被差越、此老骨一人ニテ心配イタシ居申候、然共

至極元氣ニ御座候間、乍憚御察可被下候、別紙過分ノ

御問合御座候得共、可成出来丈ケハ為御登可被下候、

中割銃菓之儀爰元全ク無之、込リ入申候、皆様江暑氣

見舞モ不申上候、不埒之至御座候、先ハ任幸便荒々頓  
首、

辰六月十九日

土橋藤五兵衛

銃菓方

御詰役様

御取払中様

五一〇/四

本營方ヨリ承越有之、別紙之通り御座候間、早々御差  
続給度候、関東表出兵殊ニ越後表之儀ハ、五月五日ヨ

リ已来六月十三日迄モ晝夜之戰爭、玉葉払底ニテ、長崎・加州ヨリ借り入ニテ戰爭之由、就テハ追々送越候様大急キ度々到来、折角無油断統越申儀候得共、何分過分之発數相及、旁ニ付不引足品モ有之、何レ御国許ヨリ御取寄不相成候テ不叶而已有之、玉付ハトロン等、異館ヨリ百万発余モ買入相成リ、雷帽子ニモ同断ニテ、四斤半榴彈モ千六百モ御取入相成リ候得共、中々引足丈ケニテ無之、別紙之通申出候趣御座候間、御混雜之訳モ可有之候得共、何分早々御統相成候様御取計給度候、四斤半榴彈モ過分分捕モ有之候得共、最早尅彈モ無之、何分御急キ給リ度候、且又機師・製作人・人足等之儀、御吟味被成、是亦早目上京相成候様御取計給度、宜御頼申上候、

一掛リ衆兩人別紙之通被仰付候テ、人柄御吟味被成、上京相成候様御取計給リ度候、別紙式通相添御問合申進候間、何分宜ク頼申進候、以上、

京都

製作掛

土橋藤五兵衛

辰六月廿日

集成館

銃藥方掛

御役々衆

見聞役衆

五二一 林謙蔵ニ海軍御用ニ付兵庫軍務局ニ出頭スヘキヲ達セラル

コノ日、林謙蔵ニ海軍御用ニ付、兵庫軍務局ニ出頭スヘキヲ達セラル、ソノ書左ノ如シ、

林謙蔵海軍局出頭辞令

林 謙蔵

右海軍御用有之候故、早々兵庫軍務官へ出頭可有之候也、

六月

軍務官ヨリ御用ニ付、御留守居附役限元敬一郎罷出候処、御用掛伊吹喜三太ヨリ相渡候付差上候事、

六月十九日

新納嘉藤二

〔卷〕〔頭註〕三元笠備後御調郡向島村ノ人  
〔林謙蔵〕ハ、後ノ男爵安保清康ニテ、慶應元年開成所ニ

英語教授ノ補助トナリ、後英艦アゴス号ニ寄乘シテ海軍術ヲ学ビ、薩摩ニ聘用セラレ居シナリ、而シテ此ノ時ハ

〔頭註〕〔明〕治元年七月、代々御小姓与ノ藩籍ニ入ル、十二月出生

二年正月、曆ヲ命セラレタリ、明治四年十一月、後曆ヲ大坂府ニ転ス、  
延期セラレタルモノ、如シ」

五二二 私ニ金銀貨及ヒ紙幣価値ノ差等ヲ立ツル

ヲ禁ス

二十日、私ニ金銀貨及ヒ紙幣価値ノ差等ヲ立ツルヲ禁セラ  
ラル、ソノ令達左ノ如シ、

今般金札御製造ハ、天下公行産物融通之御趣向ニ有之、  
諸藩ニオイテモ、石高ニ応シ借用被 仰付候段、過日  
御沙汰之通ニ候、勿論下々ニオイテ、取引ハ正金同様  
日用普通之貨幣ニ有之候処、往々不心得之者有之、御  
製造之御旨趣ニ背キ、徒ニ金札ヲ以テ正金ト兩替セシ  
メ、姦商共其機ニ乘シ、打賃ヲ相ムサホリ候哉ニ相聞  
ヘ不謂事ニ候、向後御取札之上、無相違ニオイテハ、  
双方トモ屹度御咎被 仰付候条、為心得申達候事、

六月

右之通被 仰出候間、末々迄不洩様相触可申事、

五二三 万機親裁・公議博採ノ告諭及徳川慶喜征

討ノ二榜ヲ撤スルコトヲ達ス

コノ日、今般徳川氏ノ家名ヲ相統セシメラレタルニヨリ、  
去年十二月廿五日万機親裁云々及ヒ本年正月十日慶喜征討ノ令二榜ヲ撤  
スヘキヲ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

一 徳川内府宇内之形勢云々一札、

一 徳川慶喜天下之形勢不得已云々一札、

今般徳川家名相統被 仰付、秩祿被下置候ニ付、右制  
札二枚早々取除可申様被 仰出候事、

六月

五二四 越後表戦死者奠儀ヲ親類ヘ引渡スコトヲ

京都本宮役所ヨリ藩庁陸軍所ニ通知ス

コノ日、京都本宮役所ヨリ、先月越後表ニ於テ戦死シタ  
ル本藩兵九名ヘ、総督ヨリ奠儀トシテ、目録ノ金子寄贈  
ニ付、親類ヘ引渡スヘキ旨ヲ藩庁陸軍所ニ通知セリ、ソ  
ノ書類左ノ如シ、

金七拾貳両

但壱人ニ付八両ツ、

右越後表ニオイテ、戦死人数九人ヘ別紙目録之通被成  
下候旨、越後表ヨリ送来候付、差下候間、親類等ヘ御

引渡被成候儀共、可然御取計給度、此段及御問合候、  
以上、

辰六月廿日

京都

本管役所

御国元

陸軍所

別紙之銘々賊徒追伐遂戦死候段、神妙ニ存候、依之目

録ヲ以聊寄莫儀者也、

辰五月

(四条)

隆平

(高倉)

永祐

判

薩州

隊長へ

薩州藩討死

松崎 勘助

佐藤 林蔵

長 静吾

臼井 道齋

野崎半左衛門

兒玉清兵衛

吉田喜右衛門

木村藤二郎

堀添平左衛門

ノ九人

五二五 参与大久保利通江戸ニ抵ル

二十一日、参与大久保利通江戸ニ抵ル、

大久保利通日記

【参照】

十八日

一 早天相発、英国船飛脚船得便宜、茶船ニ乗シ於天保山  
数時酌酒、妓女相送、陣幕山分従、移上荷船、乘英船  
時十二字、一字発船、神速如矢、

十九日

一 従夜前風雨、船頗動揺、

廿日

一 四前横濱着船、直上陸、今夜於松本旅宿小大夫相会、  
井上・中井来、

明治元年(1868)

廿一日

一今朝井上入来、從横濱小蒸艦乘船、九字比発船、三字比江戸築地着、青柳店へ休息供酒食、登城謁大総督官・三條卿、寓彦根邸中海江田・平田・曾山・有馬同寓、

五二六 藩庁一門・家老二伏見・鳥羽戦争後拝領ノ

品拝見ヲ許ス

コノ日藩庁ニテハ、島津備後ヨリ一門・家老ノ人々ニ、当春伏見・鳥羽戦争後、拝領ノ品拝見ヲ許サル、ヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

当春伏見・鳥羽逆賊追討之為

御恩賞

御拝領之

御劍等、且今般就

御東行、御参

内之節

天賜之

御直衣・御擣柙・御刀等、来月朔日於

御書院御一門方並御家老迄、拝見被

仰付候事、

(朱書)

「当春伏見・鳥羽逆賊追討之為

御恩賞

御拝領之

御劍等、且今般就

御東行、御参

内之節

天賜之

御直衣・御擣柙・御刀等、来月朔日於

御書院御一門方並御家老迄、拝見被

仰付候旨被

仰出候間、改服ニテ御登

城有之候様、内用頼御用人江可申渡候、

六月 備後

辰六月廿一日

御本文之通内用頼御用人江可申渡候、

取次

猪飼 央

五二七 軍務官知事兼會津征討越後口總督嘉彰親

王陸辞ス

二十二日、軍務官知事兼會津征討越後口總督嘉彰親王陸辞ス、親兵・徵兵及ヒ小濱・明石以下八藩兵之ニ從ヒテ發途ス、天皇錦旗・節刀ヲ賜ヒ、其ノ軍容ヲ觀覽アリタ

五二七ノ一

別本官中日記ニ云、六月二十二日、北越大總督兵部

卿親王御親兵・徵兵、及ヒ足守・小松・明石・小野・

高鍋・福知山・三日月等諸藩ノ兵士凡六百二十四人ヲ

帥テ京師ヲ發ス、是日ヤ 聖上小御所ニ御シテ、日

月御旗及ヒ御劍ヲ親王ニ賜ヒ、其他參謀・軍監恩賜差

アリ、且遍ネク酒肴ヲ賜ハリ、將士ヲ勞ス、 聖上更

ニ紫宸殿ニ 出御、行軍 觀覽アリ、親王及ヒ參謀・

軍監・諸隊長等月華門ヨリ入り、階下ニ拝辞シ、宜秋

門ヲ出テ河東操練場ニ至リ、隊伍ヲ整頓シ、祝砲ヲ發

シテ啓行ス、○東伏見宮家記ニ云、六月廿二日卯刻御

出馬手許隊一小隊隨從、軍務官へ御出仕、夫ヨリ兵士御親兵

原註、下之ニ御ヲ、御對面、錦旗日・御劍等ヲ賜、壬生殿賜御劍、其

高鍋、福知山、三日月、小野、合六百余人余引率、御參朝九、官於小御

後參謀以下役々、出御于南殿、行軍 天覽、宮以下參謀・軍

監・軍曹・諸隊長等月華門ヲ入、階下ニ於テ拜 竜顔、

直ニ宜秋門ヨリ進發兵隊一同於南門外拜辭ス、先是宮・參謀・軍監迄

賜祝酒、兵隊一同賜酒肴、行軍川端操練場ニ至リ發祝

砲廿四、隊伍整列、五時行軍大津駅ニ達御泊、宮賜物

御劍沓腰・晒布沓匹、

五二七ノ一

御軍令

越後口之賊徒益暴逆ヲ恣ニシ、万民塗炭之苦ヲ被為救

聖慮不貫徹、大ニ被惱 宸襟候条、御軍列ニ被 召加

候大小諸藩、一同勉勵尽忠戰、速ニ可奉安 觀慮事、

一私論ヲ以テ公事ヲ誤リ、各藩区々不相成候様深心ヲ

用ヒ、同心一和可為專要候事、

一海陸兩軍不失時機、互ニ相救應可致事、

一別紙諸法度条々堅可相守事、

右之条々於相背ハ、可被処御軍法者也、

六月

御判

諸法度条々

一長官々々之指図ニ随ヒ、諸事嚴肅ニ覺悟アルヘキ事、

- 一 一勝ニ驕慢シ、一敗ニ挫折スヘカラサル事、
- 一 行軍ハ六里内外之定則ニ候得共、先鋒寡兵ニ付、可成速ニ応援之覚悟可有之事、
- 一 各藩ヨリ一兩人ツ、御本宮ヘ可相詰事、
- 一 賊地近傍之小藩、不得止之情態モ可有之候間、先鋒之隊其心得可有之事、
- 一 於駅々聊モ權威ケ間敷振舞無之様可相心得事、
- 一 未方向不定之藩々モ有之、道中筋賊徒潜伏モ難計候間、無油断探索セシメ、不審之儀モ有之候ハ、早速中軍ヘ可申出事、
- 一 猥ニ神社・仏閣ヲ毀チ、民家ヲ放火シ、家財ヲ掠ル等乱妨狼藉ハ勿論、押買等堅禁制之事、
- 一 喧嘩口論又ハ陣場之争ヒ、堅致間敷様可相心得事、
- 一 外國人ニ行違、乱妨無礼難捨置節ハ召捕置、中軍ヘ申出候ハ、曲直其国之公使ヘ相札、至当之御所置可有之候ニ付、猥ニ放砲断殺等堅禁制之事、
- 一 銃砲・彈藥並金穀等分捕之品々ハ、中軍ヘ可申出事、
- 一 病人・手負療養方之儀、病院ニテ精々尽評議、折角行届候様可相心得事、
- 右之条々堅可相守者也、

六月

五二八 諸道府県ニ勅シテ天災兵害ニ罹リシ者ヲ賑恤セシメ便宜事ヲ行フヲ許ス

コノ日、諸道府県ニ勅シテ、天災兵害ニ罹リシ者ヲ賑恤セシメ、便宜事ヲ行フヲ許ス、ソノ書左ノ如シ、

諸道府県ヘ

方今 王化天下ニ洽カラント欲ス、此時ニ当リ無辜之生民兵燹之災ニ罹リ、加之洪水暴漲慘毒之至、近畿最甚シ、且東北諸路賊徒平定ニ至ラス、生民之塗炭一端ニアラス、皇上深ク難被為忍、救恤阜財之道被為尽度勅旨、痛切ニ被 仰出候付テハ、至仁之 聖意ヲ体認シ、其民ヲシテ安堵セシムルハ今日府県ノ責ナリ、即今創建ノ初、救荒ノ典未タ立スト雖、一日斯民ニ莅ム者、即一日斯道ヲ講セスンハアラス、況ヤ今日眼前ノ窮厄ヲヤ、故ニ賑救ノ急務左ニ記ス、

一 兵燹之厄洪水之害、窮民流離路頭ニ立者一村ニ幾人、且其破損蕩家等一々細詳ニ查点シ、救助其宜ヲ得ヘシ、若兵厄・水害ヲ被ムル地ト雖トモ、搜括其宜ヲ



得ス、徒ニ金穀ヲ給スレハ、却テ蠹弊ヲ生シ、下民ノ怨望ヲ起シ宜シカラサル事、

一没田之民ハ、全ク其租賦ヲ免シ、其他漲溢ノ田畑ハ

荒敗ノ輕重ヲ量リ、蠲免其宜ヲ得ヘキ事、

一堤防・橋梁之破壊急々修理可致事、

但普請等私利ヲ營マサル廉吏ヲ撰ヒ、水理ニ精キ

者ニ任シ、人夫等ハ其地ノ窮民ヲ賃シテ相用ヘ

キ事、

一厄害ノ等ヲ弁シ、救恤ノ道ヲ立ツ、今日ノ事ハ奏可

ヲ待タス府県ヘ專任ス、宜ク可得其道事、

五二九 島津忠義近日上京ニ付更ニ扈從ノ兵ヲ増

加スヘキヲ達ス

二十四日、藩庁ニテハ忠義近日上京ニ付、更ニ扈從ノ兵

ヲ増加スヘキヲ達セリ、ソノ達書左ノ如シ、

御城下

一拾五番隊

右同

一拾六番隊

右同

一拾七番隊

右同警衛

一壱番隊

一御兵具方足輕二小隊

一加治木大砲一座

右ハ近々

太守様御出軍之筈候付、御供ニテ被召列候条可被申渡

旨、大隊長並領主御兵具奉行江申渡、可承向ヘモ可申

渡候、

但此節上京被仰付置候諸郷、並同番兵御兵具方附士

隊

御出軍御供被仰付候段ハ、先日申渡置通ニ候、

六月

刑部

(朱書)  
一辰六月廿四日

御本文之通、大隊長並加治木留守居・御兵具奉行ヘ

申渡候、

取次

猪飼 央

五二〇 堀為影ヨリ田尻務・黒田清綱へ書翰

二十五日、堀為影直太郎平瀧ヨリ書ヲ田尻務・黒田清綱ニ贈リ、戦況ヲ報ス、ソノ文左ノ如シ、

一昨廿四日大島辺へ火之手相見得、備前藩ヨリ追々注進之処、戦相初候間、早々援兵指出呉候様申来、指式番隊拾方并野崎平左衛門一列並日置人数十四五人一列故繰出、都城隊モ繰出候処、拾式番隊之間ニ逢、外ハ遅ク候故、戦相済候後ニテ引返申候、右ハ一昨夜大風雨ニ凌兼、備前番兵少々引取候ヲ、夜ノ紛レニ忍入、備前宿陣ノ受持大島・新町辺へ火ヲ懸、賊押寄備前少々発砲候処、逃散候内、柳川ヨリモ一小隊馳付、十二番隊モ馳付候故、備前力ヲ得候テ追討々々、其上受持場ヲ被焼候故憤激イタシ、勢ヒニ乗シ追懸、ムヤミニ深入、拾式番ヨリ指止ヲ不相用、險難要所ノ賊固場へ押懸候付手負多ク、十七人備前ノ馬鹿軍中ニ引サレ、此方モ十二番ノ内半隊長堀孫六モ戦死、碓山真十郎兩人深手負申候、敵三四百之由ニテ、度々攻撃追散少々打倒シ候由候得共、賊モ能死体等モ引上ケ、此方へ打取首無之、残多候得共、追テ進撃之節、悉ク打平ケ可申、只今ニテハ

後勢皆着ヲ相待、イマタ愉快之一戦モ不相調、少々ノ小セリ合ニテ、未指テノ事モ無之、兵士等ニハ日々進撃ノ願等申出、返答ニ面倒致申候、御推察可被下候、今日ハ取込急敷候故、追テ尚御届旁可申上候、以上、

六月廿五日

堀 直太郎

平瀧ヨリ

田 尻 務 様

黒田嘉右衛門様

五二一 廣幡忠禮ヲ宣命使ト為シ伊勢大廟及ヒ熱

田神宮ニ遣ハス

二十六日、内大臣廣幡忠禮ヲ宣命使ト為シ、伊勢大廟及ヒ熱田神宮ニ遣ハシ、大政復古ヲ告ケ、且ツ東北平定ヲ祈ラシメラル、

閏四月十八日達書

内大臣広幡忠禮

伊勢両宮・熱田社為勅使参向被仰出候事、

五二二 堀為影奥羽追討総督参謀ヲ命セラル

コノ日、軍賦役堀為影直太 奥羽追討總督參謀ヲ命セラル、  
【参照】

二十六日(六月)直太郎奥羽追討總督參謀ヲ拜シ(軍  
事ニ参与シ)、七月白川口總督正親町公薰ニ附從ス、

同賞状戊辰之夏參謀之命ヲ奉シ、奥州ニ進ミ云々、

五三三 平松時厚ヲ戰士慰勞等ノ為奥羽ニ遣ハス

二十七日、平松時厚ヲ奥羽ニ遣ハシ、征討ノ諸軍ヲ犒ヒ、  
且ツ令シテ庶民ヲ虐使セサラシム、ソノ書類左ノ如シ、  
五三三ノ一

平松甲斐權介

為戰士慰勞、東下被 仰付候事、

六月

五三三ノ一  
諸軍ヘ達書一通

六軍東ニ下テヨリ已ニ数月ヲ閱ス、加之ニ霖雨滂沱風  
氣順ナラス、又重ルニ炎熱ヲ以テス、然ルニ將士東ニ  
馳セ西ニ走リ、山谷險難ヲ跋涉シ、矢石ヲ冒シ、死生  
ヲ顧ミス奮戰勇闘、至ル処城ヲ陥レ賊ヲ斃ス、其忠勇  
義烈、深ク 叡感被遊候、其功賞追テ 思食被為在候

へ共、不取敢軍士慰勞トシテ勅使被差立、酒肴下賜候  
事、

六月 (二十七日)

五三三ノ二

春來賊徒処々ニ於テ 官軍ニ相抗シ候砌、其土地人民  
兵火ニ罹リ、賦役ニ疲レ、或ハ糧食ヲ送り、或ハ彈藥  
ヲ運ヒ、朝夕奔走、実ニ戰地ノ習ヒ無執事トイヘトモ、  
均シク 朝廷之赤子、深ク 御憐愍被 思食候ニ付、  
厚ク好生仁慈之 御旨趣ヲ奉戴シ、愈以テ安撫救恤之  
道ニ心ヲ尽シ、仮初ニモ非道之驅使無之、人民令安堵  
候様 御沙汰候事、

六月 (二十七日)

○日誌本条ヲ二十二日ノ条ニ載ス、而シテ時厚ノ命  
ハ本日ニアリ、按スルニ未タ使命ヲ發セスシテ、先  
其事ヲ宣布スルノ理ナシ、日誌蓋シ誤レリ、

五三三ノ四

○時厚事蹟略ニ云、七月五日京都出立、御親兵二小隊・  
軍監大橋慎三隨行、廿日東京西丸へ着、為 勅使下向  
ノ段、大總督官始面会、夫々打合、廿七日東京ヲ發ス、  
八月五日平瀧ニ宿ス、九日中村城下西光寺へ着、直ニ

今般下向云々、打合トシテ四條隆訶陣所へ赴ク、被下ノ酒肴ノ儀、総督参謀示談ノ上、現物ニテ被下方ニ決ス、是日城中ニ宿ス、十日朝七字相馬城中ニ於テ徵兵、長州・因州・筑前・筑後・肥後・藝州・伊州等ノ隊長々々へ 叡旨ヲ伝フ、三春口薩州・大村・佐土原・備前・柳河等へハ、総督四條ヨリ被達旨ナリ、十一日相馬ヲ発ス、十八日総督鷲尾隆聚本陣ニ於テ、黒羽・彦根・肥前・佐久山・薩州・長州・土州・阿州・尾州・紀州・大垣・忍・館林・平潟ヨリ合併ノ分、薩州・備前・柳河・佐土原・大村等ノ隊長々々へ 叡旨ヲ伝フ、二十三日今市着、人吉藩・中津藩・肥前・今治藩等ノ軍監・隊長等呼出シ、 叡旨ヲ伝フ、二十四日今市ヲ発シ、日光山本坊ニ宿ス、直ニ藝州参謀二川主税呼出シ、 叡旨ヲ伝フ、九月一日東京ニ着、大総督府鎮將府等へ行向、夫々慰勞ノ箇所々々、其外途中ノ形勢等談話、九日東京ヲ発シ、十一日横濱揚礎、十四日神戸へ着、十七日帰京直ニ参 朝、江城ニテ折合ノ条々・同所形勢・出張中処置ノ件々委曲言上ノ事、

五二四 島津主殿書ヲ在藩家老ニ贈リ、小松帶刀以下五名藩ノ俸禄返上ノ願出ニ付交渉ス

コノ日、島津主殿書ヲ在藩家老ニ贈リテ、小松帶刀・岩下方平・町田民部・大久保利通・吉井友實ノ五人徴士・参与ヲ命セラレタルニヨリ、藩ノ俸禄ヲ返上センコトヲ願出テタル件ヲ交渉セリ、ソノ文左ノ如シ、

小松 帶 刀

岩下 佐次右衛門

町 田 民 部

大 久 保 一 藏

吉 井 幸 輔

右ハ徴士・参与被仰付候付、被下置候御役禄返上仕度、銘々別紙之通被申越候、就テハ先達テ旧国之事ニ不致關係様ト之趣モ被仰渡、位階等モ被仰付候付テハ、御城代等之名目少々不相当ノ訳モ有之候得共、イツレ君臣之情義ハ難逃、其上今般 朝政御一新之折柄、尚更此御方御用致關係候儀ハ不少候、付テハ不相替当職被仰付置候、尤現年御用相勤候付テハ、御役料高等之儀ハ、是迄之通被下置相当之事ト存候、乍然別段従 朝

延之御宛行モ有之、御双方ヨリ大祿被下置候付テハ返上仕度、情実ニヲヒテハ尤之儀ニテ、右ハ願通返上被成御免、別段妻子養料等之名目ヲ以、夫々等級ヲ以被成下候テモ可然哉ニモ候ヘ共、ソレニテハ名目被相替候丈ケ之事ニテ、被下方ニ付テ、当人共趣意ニハ相背キ、矢張り同様之事ニ候、仍テ是迄多年内外之勤方且往々御用向相勤、尤不相替御城代其外在職被仰付置候事ニ候ヘハ、右之御取訳ヲ以、是迄之通御役料高等被下置候儀、当然之儀ニテハ有之間敷哉、左候テ從朝廷諸所へ被差出候節、此御方御用モ無之節ハ、別段道中御賄料等不被成下筋被仰付可然哉、乍然当分御在国中之事候付、於其許尚又被致吟味、被奉窺候儀ハ其通ニテ、被仰出之趣何分可被存候、左候ヘハ其趣ヲ以夫々申渡候様可取計、此段申越候、以上、

辰六月廿七日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

五三五 在長崎汾陽光遠ヨリ藩ノ月番家老ニ浦上

村耶蘇宗門徒処置ノ狀況ヲ報告ス

二十九日、在長崎汾陽次郎<sup>七世</sup>右衛門ヨリ藩ノ月番家老ニ、浦上村耶蘇宗門徒処置ノ狀況ヲ報告セリ、ソノ書左ノ如シ、

当地浦上村ト申在方、邪宗門へ一円致帰依候趣、風聞承居候付、崎着後猶又承合候処、右浦上村ハ当所西之方老里位有之、余程手広ノ村方ニテ、已前ヨリ黒組ト相唱候種族有之、右ハ寛永比ヨリノ余族ト申伝、此節邪宗へ致帰依候モ多ク、右ノ種族ニテ当三月比、多人數連印ヲ以邪宗願ノ旨趣、御代官所へ訴出候由御座候処、其節表通之沙汰不相成、右書面ハ内々ニテ申下イタシ、連印ノ者共ハ、説得人ヨリ理解イタシ候様トノ義ニテ相済居候由、然処追々右宗門ノ勢盛ニ成立、村中へ諸所天主堂相建、異人ヲモ同所へ引受、且村人共右浦天主堂へモ夜分群集イタシ候時機成立、無抛当月十四日奉行所ヨリ人数被差、<sup>(同脱之)</sup>重立候人数六拾九人程召捕相成候由、当所ノ儀、穢多ノ内ヨリ目明シ相勤候付、右ノ者ヲ案内トシテ参候由、尤穢多共ノ儀、同村ニ罷在ナカラ、右ノ宗門へ一切相傾キ不申候付、邪宗堂兼テ意恨ニモ存候哉、先ニ参候目明ノ三人ヲ、邪宗堂ヨリ召捕候付、暫時ハ動揺イタシ候由、乍然邪宗堂ヨリ

外人數へハ手迎モ不致、悉ク召捕ニ相成、我々御上ニ  
向ヒ手迎イタス所存ニ決テ無之、乍然穢多体ノ者ノ手  
ニ掛リ候訳ハ無之候付、召捕候趣申立、右ノ穢多三人  
共、手足モ不相叶程打擲ノ上差返候由、左候テ、当所  
市中ヨリ段々帰依ノ者有之、追々召捕相成、過分ノ人  
數ニテ牢内差支、小島ト申所へ前以新牢屋出来、双方  
へ被入置候由、尤右人数少シモ畏怖悔悟ノ体ハ無之、  
此罪ニ依御取扱ニモ相成候得ハ本望ト、一同申居候由、  
先達テ横濱へ同様ノ義有之、右ノ御所置振掛合ニ相成  
居、追テ其例ヲ以取扱相成管候由、最早此後子細ハ有  
之間敷ト申事ニ御座候、爰元地頭人吉田宗次郎ト申者、  
右一件立障候由御座候付、手続内々シラセ呉候様頼入  
置候処、別冊ノ通申出候間、相添御届申上候、以上、  
〔頭注〕〔別冊ナシ〕

明治元辰六月廿九日

汾陽次郎右衛門

御月番

御家老様

追テ申上候、此節ノ一件ニ付、異人共ヨリ別段申立  
候義モ無之由ニ御座候、

五二六 神葬祭希望ノ者ハ此ノ式ニヨリ執行スル

ヲ許可ス

此ノ月藩庁ニテハ、曩時礼葬祭式取調方・祭典方ニ命ジ  
タルモノ、去月報告アリタルニヨリ、神葬祭希望ノモノ  
ハ、此ノ式ニ抛リ執行スルモ妨ケナキコトヲ達セリ、其  
ノ文左ノ如シ、  
五天ノ一

但シ礼葬祭式略ス、

抑葬送之次第、往古ハ無申迄神葬一筋之取扱ニ候処、  
仏法盛ニ被行候テヨリ、当分通仏葬相用事候得共、神  
道学之儀ニ付テハ、追々從太政官被仰渡趣モ有之候付、  
以来神葬望之者ハ、銘々勝手次第被仰付候条、祭式之  
儀ハ、別冊並凶面之通相心得、致省略候儀ハ不苦候、  
此旨不洩様向々江可致通達候、

但神葬ニ付テハ、有間敷事ナカラ、僧侶トモ葬地苦  
説等敷不申立、無異儀引渡候様可被申渡旨、神社  
奉行江可申渡候、

六月

刑部

取次

細瀧権八

別紙之通葬祭之儀被仰渡候間、此段致通達候条、各郷  
写取無滞相廻、留ヨリ早々拙者方江返納可有之候、以  
上、

七月廿一日 地頭所取次

大久保半介

阿久根・高城・水引・高江・東郷・中郷

噯中

五二六ノ一 礼葬祭式取調報告書

士分以上士分トハ衆中  
以上ヲ指ス

礼葬祭式（略ス）此ノ式次第書ノ後ニ  
書シ差出シタルナリ

右ハ葬儀之儀ニ付、取調可申上旨被仰渡、先哲博古之  
者共取調置候儀式ニ基キ取調仕候処、右之通御座候、  
此段申上候、以上、

辰五月 祭典方

五二七 其ノ他六月中ノ藩庁達書

五二七ノ一  
コノ月以上ノ外藩庁ニテノ達書左ノ如シ、  
一敷舞台之事、

御対面所三之間

右之通被相改候条、向々江可致通達候、

六月 刑部

五二七ノ二

一

御側役 壹人

御小納戸 貳人

御小姓 貳人

御医師 壹人

御草履取 貳人

御笠持 壹人

右ハ於京都官武一途之供列被仰出候付、以来五社御  
參詣其外、屹卜立候節迎モ、右之通被召列、御長柄  
迄為御持相成候旨被仰出候条、此旨向々江不洩様可  
致通達候、

但御先（拾也）弘横目四人・又者抑式人被召列候、尤御行

列立別冊之通被仰付候別冊之  
ヲ逸ス

六月 備後

五二七ノ三

一海陸軍隊服之儀、以来年頭其外屹卜立候御祝儀等之  
節ハ、黒之戎服相用、平日調練等ハ筒袖・細袴ニテ、

色合ハ勝手次第不苦候条、此旨大隊長并御船奉行江申渡、可承向ヘモ可申渡候、

六月

備後

刑部

五七四

一 諏訪神事之節、大官司於役宅御寄合等之御式被廢候段ハ、先達テ申渡通ニ候間、詰御役々等都テ引取ニテ、取締横目之儀ハ是迄ノ通、

一 頭屋神事能之節、詰御役々等都テ引取ニテ、是亦取締横目之分是迄之通、

一 稻荷神事付御名代神前江御参詣濟、棧敷江御入有之候得共、以来献幣使ハ神前勤迄被仰付、棧敷詰御役々等ノ儀モ、都テ引取被仰付候、左候テ取締横目ノ儀ハ、是迄ノ通申付候、

一 吉野御馬追ノ節、若年寄・御用人・御目付被差越来候得共、引取被仰付、右江差添候役場モ引取申付、横目并御番医師ノ儀ハ、是迄ノ通被差越、扣所ノ儀ハ騎兵所役々扣所ノ内ヘ罷在、怪我人等有之候節、医師勤方ノ儀ハ、横目ヨリ致差引候様申付候、右可承向ヘ可申渡候、

六月

刑部

五七五

一 七月廿八日

諏訪神事

一 十一月三日

稻荷神事

右ノ節献幣使御一門方

右ハ是迄御名代被差立来候得共、以来右ノ通献幣使

被差立候、

一 正月廿日

加世田野間権現御祭礼付献幣使地頭

右ハ是迄御参代被差立来候得共、以来右ノ通献幣使被差立候、

右ノ通被仰付候条、可承向江可申渡候、

六月

刑部

五七六

一 此比諸所寺院二王或ハ仏体等相毀、殊ニ先日多賀下江安置ノ仏像并石碑、及夜陰致破却候族有之、粗暴ノ所業別テ如何ノ至候、右ニ付テハ從朝廷モ厚被仰出趣モ有之、其段ハ人々奉承知通ニ候、依之糺方申



付置候間、相分候ハ、屹ト可及沙汰候間、向後右体心得違ノ儀一切致間敷候、此旨頭人・主人等ヨリ嚴重可被申渡旨、向々江不洩様致通達、地頭・領主江モ可申渡候、

六月

圖書  
内膳

五二七ノ七  
一毎月 十一日 廿一日

右ハ再聞式日右之通被建置候得共、以来糺明同日ニ相遂候様被仰付候条、糺明奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

辰六月廿六日

龍衛

五二七ノ八  
一御城下又ハ近在ニ於テ、猥ニ銃砲打間敷トノ段ハ、追々申渡置通ニ候処、至比日於御城下致砲発候者不<sub>レ</sub>少、既ニ過日不<sub>レ</sub>凶銃丸ヲ受及死命候者有之、不便ノ至ニ堪ス、早速糺明申付候得共、未<sub>レ</sub>発砲ノ者不相知候、就テハ乍怪失<sub>レ</sub>現在及非命候ヲ致聞知候ハ、自<sub>レ</sub>ラ砲発ノ形行申出候儀、当然ノ事候処、当座不<sub>レ</sub>頭ヲ幸默思蓋蔵イタシ居候姿ニ相見得、別テ如何ノ至ニ

候、依テ以来ハ夫々被定置候通相守、屹ト取違有之間敷候、尤横目別段取締掛申付置候得共、方限ハ教育掛、其以下ハ奉行頭人ヨリ取締申付候条、右之旨趣父兄等モ篤ト相心得、兼テ子弟江戒置候、乍此上万一不守ノ族於有之ハ、其身ハ勿論、父兄等迄モ屹ト可及沙汰候間、見留次第名前承届、不<sub>レ</sub>闕言上可致候、此旨向々江不洩様可致通達候、

六月

備後外四人

五二七ノ九  
一衆中以下伍保ノ組合被建置候段ハ、先達テ申渡置候通ニテ、三町居住ノ衆中郷士ハ、右ノ人数ニテ組合儀相当ニ候得共、市中諸所へ致居住取締向ニ付、混雜ノ筋ニ相聞得、尤兼テ町内居住内ハ町作法通兼守ノ仕来、付テハ家格ニ相付候儀ハ、別段伍法ノ組合等、都テ市中作法通申付候条、此旨町奉行兼帯へ申渡、糺明奉行其外可承向へモ可申渡候、

六月

刑部

明治元年(1868)

〔稿本表紙〕

明治元年  
七月  
忠義公史料  
八

〔稿本にて補正〕

五二八 本藩ニ傭聘ノ仏人土質学者コニエ上坂セ  
シムヘキノ令達

七月一日、曩時本藩ニ傭聘シタル仏人土質学者コニエ、  
今般政府ニ雇聘スヘキ弁事官ヨリノ令達アリシニヨリ、  
上坂セシムヘキ旨、大坂運上所ヨリ留守居へ、并ニ島津  
主殿ヨリ市來六左衛門へ通報アリタリ、ソノ書類左ノ如  
シ、

〔行間書込先〕  
「コワニといひてモンプランの周旋にて、岩下氏帰朝の際本

藩に傭ひ来りしものにて七人位なりし、その中の頭立ちしものなりと、後生野に至り居しと、田中蜻洲(朝倉省吾氏の話の由(有馬氏)なりしと、又山ヶ野金山にペー・オジエといふもの居りしこと薩摩郡永野郷土史にあり、此時の一人なるか、

(大意)小松清緝日記八月九日ノ部ニ、明日岩下新之丞殿仏人ト同道上京致さるゝ由ニ付、兄上様への手紙認方いたし候事、仏人は朝廷より御用召にて上京之由承り候、トアルハコニエナルカ」

五二八ノ一

薩州

其藩へ兼テ雇置候土質学仏人コニエト申者、今般貨幣吹立ニ付、西洋器械御取寄ニ付、相用度旨会計官ヨリ申立候間、早々大坂表へ差出シ可申事、

六月

五二八ノ二

薩州

留主居へ

仏人土質家コワニ儀、其藩へ雇ヒ相成居候処、御用有之候間、早々上坂イタシ候様、別紙之通被仰付候間、可被得其意候、

七月朔日

大坂  
運上所

五二八ノ三

仏人

土質家

コワニ

右薩藩へ被相雇居候処、此節政府之要用有之候間、早々上坂可致事、

外国官

大坂

七月朔日

運上所判

五二八ノ四〔采〕「ワニ」

仏人土質、コニエ儀、別紙之通弁事官ヨリ被仰渡候付、

則別封へ委細申越候間、御自分着之上被差出候儀共ハ、

何分モ宜取計、此旨心得旁申入置候、以上、

辰七月朔日

島津主殿

市來六左衛門殿

島津忠義家記

五二九 公現親王布告文

二日、入道公現親王會津ヨリ仙臺ニ入り、伊達慶邦・上杉齊憲ニ令シ、奥羽諸藩ヲ督シテ我カ藩兵ヲ撃タシメ、公議府ヲ設ケテ布告文ヲ発シ、諸藩ノ連合ヲナサシム、ソノ諸文左ノ如シ、

五元ノ一

嗟呼薩賊久懷兇惡、漸恣殘暴、以至客冬欺罔幼主、威脅廷臣、違先帝遺訓、而黜攝關幕府、背列聖垂範、而毀神祠仏閣、陽徇王政復古、陰逞私慾、百方構架、以負冤於故幕府及忠良十余藩、遂至脅挾鸞輿駐蹕於浪華、矯令諸侯而興六師、虐使百姓、而奪恒産、四海鼎沸、五倫將墜、大逆無道千古莫之比焉、今以匡正之任囑之、其藩宜明大義、論諸遠近克殲虎之力、速殄兇逆之魁、以上解幼主憂惱、下濟百姓塗炭矣、都勉哉、天下所望雲霓已久、四民所迎食漿、維新勝算固不容疑者、輪王寺一品大王鈞命執達如件、

大圓覺院

慶應四年戊辰七月

義觀花押

清淨林院

堯忍花押

仙臺中將殿

米澤中將殿

各通

戊辰事情概旨  
仙台藩記

按スルニ、大圓覺院ハ覺王院ノ改称、清淨林院ハ龍  
王院ノ改称ナリ、

五二九ノ一  
副書

此度、奥・羽・越列藩天下匡正、奸賊掃攘之義挙有之  
段、於 宮御方厚御依頼之御事ニ候、就テハ諸事列藩  
會議之上取計候儀ニハ可有之候得共、自然管轄之任無  
之候テハ、行届兼候儀モ可有之哉ト 思召候間、当分  
之内仙臺中将殿・米澤中将殿両所ニテ利鈍斟酌施行被  
有之、可然トノ御事ニ候、

戊辰事情概旨  
仙台藩記

五二九ノ三  
日光宮奥羽御動座布告文

薩賊ノ兇暴古今其比ヲ聞カス、恐多クモ 日光宮様ヲ  
禍ニ陥レ奉リ、徳川慶喜公ニ冤枉ノ嚴譴ヲ負ハシメ、  
其不真ヲ雪白スルニ路ナク、涙ヲ吞ミ手ヲ束ネテ、殆  
ト屠戮ニ就ントセリ、 宮様累年ノ厚誼ヲ 思召シ、  
深く御憂憫マシマシ、慶喜公ノ冤枉ヲ明白ニセント、

二月下旬法興ヲ馳テ、駿府城ニ至リ給ヒ、 大総督ノ  
宮へ御対顔アリ、伏見ノ事ノ起原ヨリ具ニ仰ラレケレ  
ハ、薩賊 勅命ヲ矯テ曰、慶喜恭順ノ実効相立候得ハ、  
必 寛典ニ処セラレ、家系祿地等皆憂フルコトナシト、  
宮様其誣罔詭詐ヲ洞察シ給フトイヘトモ、 勅命ノ称  
至敵ナレハ、江戸ニ歸リ慶喜公ニ告給フ、既ニシテ慶  
喜公祖宗創業ノ城ヲ開キ、水戸ニ退隱シ、兵器軍艦等  
ヲ朝廷ニ奉リ、実効残ル処ナク立ラレケレトモ、朝敵  
ノ嚴譴終ニ御赦免ナク、徒ニ他郷荒陬ニ孤囚ノ身トナ  
リ給フ、 宮様益御哀愍マシマシ、屢御書ヲ 大総督  
宮へ遣リテ、寛典ニ処セラレ候様仰進ラレケレトモ、  
薩賊壅蔽シテ之ヲ通セス、剩へ 宮様ノ御英明ヲ忌ミ  
テ、除キ奉ランコトヲ謀リ、屢御上京ヲ促シケル、江  
戸士民之ヲ知りテ、市中及ヒ近郷数万ノ人々、各歎訴  
状ヲ捧ケ、 御発興ヲ留メ奉リシカハ、其至情深ク御  
不憫ニ思召サレ、御延引遊ハサレケルニ、薩賊又 総  
督府ノ命ト称シ、御登城ヲ促シ、城中ニ留メ奉ラント  
セシニ、 宮様御所勞ニテ御断遊ハサレ、其外種々ノ  
奸計ヲ連ラシ、除キ奉ラント謀レトモ、皆々相違シケ  
レハ、終ニ三條實美等ト相謀リ、五月十五日未明東叡

山ヲ暴襲シ、

勅額ノ掛リシ中堂諸社、宮様御殿ニ至ル迄、砲彈ヲ以焼打シ、僧徒ヲ殺戮シ、財物ヲ掠奪シ、殘刻貪婪ヲ極メ、宮様ヲ搜索スルコト甚嚴密也、日光山モ已ニ賊軍ノ抛トナリ、途方ヲ失ヒ給ヒシカ、奥羽列藩大義會盟ノヨシ、遙ニ聞召サレ、勿体ナクモ皇胤ノ御身ヲ以、下賤ノ微装ヲモ着シ玉ヒ、鯨波ヲ凌キ險路ヲ攀チ、遼遠僻隅ノ奥羽ニ下ラセ給ヒ、兇賊ヲ平定シ、朝廷ヲ清明ニセン事ヲ諸侯ニ託シ玉フ、素ヨリ宮様

二八、

先帝ノ勅命ニテ出家入道シ玉ヒ、確乎タル御道心ニテ、慈悲忍辱、仏法ノ本旨ヲ以、万民ノ塗炭ニ苦シムヲ救ハセラレントノ思召ナリ、万民ノ塗炭ニ苦シムハ、必竟薩賊ノ為ス所ナレハ、此賊ヲ討滅シ、国家太平万民安楽ニ歸スルハ、即チ仏法ノ本旨、宮様ノ御深意ナリ、嗚乎誰カ皇國ノ民ナラサラン、誰カ皇胤ノ尊ヲ知ラサラン、薩賊ノ兇暴奸詐已ニ此ノ如クナレハ、仮令天日地ニ落ち、海水涸ル、コトアリトモ、誓テ此賊ト世ヲ同フセシ、庶幾ハ遠近ノ衆庶、宮様ノ尊意ヲ感戴シ、カヲ尽シテ雲霧ヲ開晴シ、東叡山ニ

歸シ奉ランコトヲ、天下ノ士民其事実ヲ詳ニセス、

宮様ノ御深意ヲ弁ヘス、南北両朝ノ故事ヲ附会シテ誣罔ノ説ヲナサンコトヲ恐ル、故ニ其大略ヲ記シテ、遠近ニ布告スルモノ也、

慶應四年戊辰七月

奥・羽・越公議府

戊辰事情概旨  
仙合藩記

五三〇 薩藩奥羽鎮撫軍ノ狀況并ニ白川口・上野

戦争ノ狀況届書

コノ日、我カ藩奥羽鎮撫ノ狀況并ニ白川口戦争・上野戦争ノ狀況届出ヲナセリ、ソノ届書左ノ如シ、  
五三〇ノ一 届書

副総督澤殿、四月二十三日新庄<sup>〔山形県〕</sup>へ御着陣之処、賊自朝

敵ト名乗、即日当領内境目へ先状等差出候ニ付、実ニ不堪憤恚、即夜副総督手勢ヲ以速ニ討入之令ヲ被発、当地へ八里程有之候最上川ヲ下リ、半町程有之候湯村ト申所ヨリ上陸、山谷之嶮阻ヲ進行候処、直ニ賊軍寄、

大鼓ヲ打、兵ヲ繰出シ、川ヲ隔テ砲台ヨリ、大砲繰打ニ打出シ、長・薩之惣計百三十三限リ候兵、携白砲二門其外ハ小銃而已ヲ以、大凡千人内外之賊兵ト接戦、終ニ川原迄押出シ、猶敵兵ヲ挫キ候処、賊ニ之台場ヲ捨杉山ニ引入、大小銃透間ナク打出候ヘ共、両藩弥奮戦、終ニ川ヲ押渡、四方ニ分隊イタシ、陣屋迄押付候、今早朝ヨリ昼八時過比迄及苦戦、然ル処城下許ヨリ繰出、賊兵遙之山岡ヘ相見ヘ、無二之死地ト相成候ニ付、両藩共必死ヲ決シ、敵陣ヘ打入可申旨談候ヘ共、今総督ヲ御一人孤城ニ残置、賊之為致死亡候テハ、奉対天朝大罪之至ト衆議一決シ、一先兵ヲ引揚、土陽村ニ至リ、夫ヨリ古口ト申所ヘ宿陣、翌廿五日朝新庄ノ本営マテ引揚、人数ヲ整頓罷在候之処、同日庄内勢六十里越ト申所ヘ繰イタス、味方全無勢ニテ、最上川ヲ守候弊藩兵士川路七次郎・篠崎東次郎指揮役申付有之候処、四月廿九日川越ニ戦争、閏四月四日賊千人計川ヲ越天童ヘ打入、城下不残致放火候、仙臺人数二万ニ及候ヘ共、一向応援之兵一人モ不差出候、夫ヨリ新庄ヨリ五里有之候桶岡ト申所ヘ賊兵押寄候、不得止副総督ニハ城下ヨリ一里有之山寺ヘ潜メ上置、同五日両藩押

出候処、賊軍大ニ恐怖シ五六里ヲ隔テ引退キ候ニ付、追討トシテ、山形・上山両藩同七日ヨリ天童ヘ繰出、同八日米澤伊勢守ノ陣屋ヲ焼キ、賊ヲ追撃、大砲等少々分捕之段、同九日注進有之候、実ニ暫時累卵之危キニ至候段、出兵先ヨリ閏四月九日付ヲ以、申越候ヘ共、疎漏之儀モ御座候ニ付、今一往報知之上可申上ト扣置候ヘ共、于今報告無御座候ニ付、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

新納嘉藤二

七月二日

五三〇ノ一

同藩届書写

五月十五日、上野屯集之賊徒御誅伐被 仰出候ニ付、当朝未明ヨリ大下馬ヘ人数相揃、西郷吉之助指揮シテ、御下知奉待居候処、六ツ時過湯島ノ賊兵ヲ打払候様御達相成、直様大下馬ヲ発シ湯島ヘ繰出シ候処、賊兵不相見候ニ付、暫時同所ヘ相扣ヘ、本郷ヨリ横合ニ打掛候、長州其他之兵ヲ相待候内、早砲声相響候ニ付、何方ヨリ戦相初候歟ト斥候差出候処、黒門口ヘ差向候一番遊撃半隊小倉壮九郎・足輕隊川路正之進等、八拾人

計ニテ、上野ノ正面ニ押出シ、砲戰致候段相聞ヘ候ニ付、直様大砲隊飯牟禮喜之助、砲五門ヲ以テ黒門口ト御徒町ヘ押出、又小銃一番隊鈴木武五郎・三番隊篠原冬一郎・一番遊撃隊半隊一同ニ押出シ、町口ノ台場容易難乗落、此方ニモ置ヲ積重、俄ニ砲台ヲ構ヘ、猶本郷ヨリノ懸口ト相応候賦ニテ、猶予イタシ居候内、肥前勢ヨリ横合ニ大砲ヲ放掛、続テ肥後・久留米モ同様打掛候内、賊兵ヨリ味方ノ後ヘ火箭ヲ打込、町家燃上リ、漸々後ヨリ焼来候ニ付、不忍池之涯ヨリ町家ヲクバリ敵合近ク押付候ヘ共、黒門ノ台場堅固ニシテ容易ニ不落、追々火ハ廻リ、最早本郷ノ味方ト相応スルニ不及、策ヲ決シテ正面ヨリ突入候処、藤堂・因州ノ兵モ同時ニ駆込、堅固ニ相守居候黒門ノ台場終ニ乗落シ、山内ニテ良久砲戰諸所放火ニ及ビ候、一番隊鈴木武五郎ハ山内ヘ突入直ニ取テ返シ、黒門口ヲ相固メ居候処、残賊跡ニ廻リ候ヘトモ、直ニ打払申候、本郷ヨリ打掛候長州・大村・佐土原等ノ兵ハ、根岸辺ニテ難戰ニ及ヒ、夫故互ニ救応不相叶由、其日ノ戰朝六字頃ヨリ五字頃迄ニ終リ申候、戰死・手負等相応御座候段、江戸表ヨリ申越候ニ付、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

七月二日

新納嘉藤二

五三〇ノ三

届書

昨廿五日朝五時頃ヨリ二番・四番半隊、大垣・長州二拾人ツ、賊四方間近相見エ候風聞御座候ニ付、奥州街道大田川宿迄地形探索トシテ差越申候処、同所ヘ仙臺凡百人程致屯集候ニ付、直ニ打払申候処、致退散候間、同所ヘ又々致屯集候テハ、攻撃難渋之場所柄ニ付焼払、夕七時白川ヘ引取、戰死・手負別紙之通御座候、以上、

二番隊

四番隊

五月廿六日

戰死 東郷助之丞 深手 堅山莊八

別紙之通、出兵先ヨリ申越候間、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

七月二日

新納嘉藤二

五三〇ノ四

届書

昨廿七日三字頃ヨリ、北ノ方十八町位御座候會津街道

筋大谷地村ヲ根拠トシテ、追々賊山上ニ兵ヲ分配シ襲  
来候ニ付、二番隊・四番隊・足輕隊・大垣一小隊・土  
州二小隊、左右ヘ相分レ及進撃申候処、五字過ニ至リ、  
賊致退散、大谷地村迄致追討候処、已ニ夜ニモ入候ニ  
付、大谷地村ハ白川ノ要口ニ付、焼払ヒ、六字過ニ兵  
隊都テ引揚申候、討取ノ死骸十五六位モ御座候哉、山  
中諸所ニテノ戦ニテ、取調不相調候、四斤半大砲一挺・  
彈藥等分捕御座候、尤怪我人別紙ノ通ニ御座候、敵千  
人計モ御座候哉、山中諸所ニ致屯集候、此段成行不取  
敢御届申上候、以上、

五月廿八日

島津(久志)式部

二番隊

四番隊

浅手 二番隊 西吉左衛門 同 美坂彦八

深手 足輕 松崎覺次

別紙之通出兵先ヨリ申越候間、此段御届申上候、以上、

七月二日

薩摩少将内

新納嘉藤二

五三〇ノ五  
届書

今朝七字頃ヨリ、仙臺・會津・石川・棚倉・湯元ノ五  
道ヨリ會・仙・棚倉・相馬之賊徒人数凡二三千位ニテ、  
山上又ハ街道筋ヨリ襲来致候ニ付、五番・六番小隊並  
白砲隊ハ、大垣固メ居候會津・湯元ノ両街道ノ為応援  
繰出シ、二番隊ノ内三分隊ハ、棚倉街道長州固メ居候  
横合ヘ押出シ、最初ハ防戦ノ賦御座候処、賊徒山ニ寄  
進兼候ニ付、迎モ埒明兼候処ヨリ、追々進撃致、四番  
隊ニハ原街道固メ居、二番隊一分隊ハ本街道ヘ同断ノ  
処、賊徒襲来モ無之、然ル処、諸所ヨリ襲来ノ賊徒追  
々敗走致候ニ付、四番隊ニモ半隊繰出シ追撃ノ処、賊  
兵散々ニ敗北シ、三字比止戦、実ニ山中之戦ニテ、存  
分ノ狙撃モ出来兼候ヘ共、百人位ハ討取モ有之候半ト  
存申候、左候テ味方手負・戦死、別紙ノ通御座候間、  
總督府ヘ御届相成候儀トモ、可然様御取計被下度奉願  
候、肥後藩モ未タ着陣不致、甚切迫ニ付、折角相待居  
申候、左候テ其地御繰出シノ模様如何ニ御座候哉、此  
地甚切迫ノ事情ニ付、一日モ早ク御出軍相成候様、御  
働被下候様呉々モ願居候、先ハ此段御届旁如斯御座候、  
以上、

島津式部



五月廿六日

隊中

追テ黒羽藩ニモ、去ル廿三日、旗宿ト申所ニテ賊徒  
追払、且今日モ於白坂、大垣ニ小隊・黒羽三小隊ニ  
テ及戦争、賊徒悉ク追散候ニ付、同藩ヨリ総督府へ  
御届旁出府ノ段承候ニ付、右へ相頼御届申上候間、  
当地ノ形勢等委敷御聞取可被下候、

戦死

樺山清五郎〔實記〕 有馬十郎次〔純風〕

手負

田代五郎左衛門 三原七左衛門  
郷田猪之助 伊勢佐七郎  
大迫市郎左衛門 齋藤藤太  
江田正之丞 税所笑右衛門  
相良為二郎 染川彦八  
比志島孫太郎 畠山盛之助  
夫卒 金五郎  
別紙ノ通、出兵先ヨリ申越候間、此段御届申上候、  
以上、

七月二日

薩摩少将内

新納嘉藤二

五三一 四條隆誥仙臺追討総督ヲ命セラル

三日、大総督府ソノ参謀四條隆誥ヲ、仙臺追討総督ト為  
ス、ソノ達書及概略左ノ如シ、  
五三二 達書

四條少将

仙臺追討為総督出張可有之候事、

七月

四條隆誥事蹟  
鎮台日誌

五三二

隆誥諸道記概略

大総督府参謀勤務之俛、七月廿日仙臺為追討、江城発  
途ニ付、従軍如左、

薩州藩人数 長州藩人数 吉川藩人数  
備前藩人数 筑前藩人数 柳川藩人数  
久留米藩人数 郡山藩人数 藝州藩人数  
佐土原藩人数 大村藩人数

同月廿一日、品川港ヨリ軍艦ヲ発シ、廿二日夜奥州小  
名濱へ着艦、直様上陸、中島村自生院ヲ以為本陣、軍

議決定、諸口手配ヲ示ス、

五三二 板垣退助・伊地知正治建言書

コノ日、奥羽出軍ノ參謀補助板垣退助・伊地知正治、下參謀衆ニ戰地罹災人民ノ撫恤ニ勉メ、御仁政ノ趣意ヲ布告セラレンコトヲ建言セリ、ソノ文左ノ如シ、

建言書

棚倉城地回復之後ハ、奥地之人氣追々官軍ニ迎ヒ来リ候勢ニ有之、乍併 天朝之御浩福、諸將士之勉強ト、且ハ賊徒多日滞在、其乱妨ニ堪兼居候故儀ニ相違無御座候得共、先以兵糧人馬之手当旁大幸之至ニ御座候、然処白川・棚倉近辺ニツイテモ、度々ノ戰爭ニ付、官軍賊徒之兵火ニ罹リ、家居ヲ失候モノ不少、無罪之良民雨露之困苦不少、不忍徒見次第御座候、然処此中ヨリ字都宮其外ニテモ火燵ニ罹リ候窮民ハ、願立之上御救助筋被為仰付儀ニ御座候得共、奥羽ハ方今一円賊地之姿ニテ、到处悉申立候共、御国力旁如何ト奉存候、依之吟味仕候処、昔ハ兵燹・水火・饑饉之困ニ逢候国々ニハ、必ス其品ニ応シテ全ク年貢ヲ免サレ、或半減被

仰付候例モ御座候欵、何卒夫等之御旧章ヲ以テ、可然御廟計相立候上、早々御仁政之御趣意、遠近ニ御布告相成度奉存候、尤是等之事件ハ、早ヨリ 御廟議相決居候事トハ奉存候得共、差当リ当地時機之処モ御座候ニ付、片時モ早目万民子育之御趣意御知セ相成候ハ、夫ヨリ遙ニ奥地へ進發相成候共、恩威並行レ、良民安堵、 皇業御成就之一旦ニ候半ト評議仕、此段言上仕候、恐惶敬白、

奥州出陣

參謀補助

辰七月三日

板垣退助

伊地知正治

下參謀衆

東征総督記

五三三 島津伊勢一行報告書

コノ日、先月五日京都ヲ出発シタル島津伊勢一行、同廿八日江戸ニ着シテ、途中見聞セシ概要並ニ尔後ノ行動等ニツキテ、京都本營ニ報セリ、ソノ文左ノ如シ、

報告書

去月五日京都発軍、被定置候宿割通止宿行軍伊勢殿一列兵隊、去廿八日姫路邸へ着陣相成候、我等一列京都出陣之七番隊并外城之一番隊、二番隊之儀ハ、草津駅ヨリ越後発途被仰付候処、右三小隊之儀モ、先日越後長岡江着陣之由、右ハ彼方ヨリ飛脚參着ニテ、着陣之段承届、然処左衛門殿一列兵隊人数モ、先日船路ヨリ奥州平潟江着陣、直様戦相始候処、彼地ノ儀、賊兵所々々屯集ニテ、左迄墓々敷戰爭モ無之、其段ハ別冊彼地ヨリノ問合写差遣候、棚倉ノ儀ハ、白川口江出張ノ御国兵隊等、去月廿四日進撃ニ及候処、賊兵悉ク敗走ニテ、棚倉落城ニ及ヒ候由、誠ニ見事之一戦ト承及候、

一今度御国許ヨリ異船御借入、大砲隊並御城下二小隊モ、先達テ志州鳥羽江直乘、彼地ヨリ上陸、東海道興津駅ヨリ、甲州路行軍越後表江被遣、其内ニ番兵ニ番隊モ、右三小隊江一列ニテ、同駅ヨリ行軍ニテ被遣候、

一我々一列四小隊ノ内、九番・十一番・三番・大砲隊ノ儀ハ、明後四日三邦丸ヨリ乗付、前文平瀨表江渡海ノ筈、跡番兵一番ノ儀ハ、別段蒸氣船御借入、是以明後日方ニモ候半、同所江渡海ノ手筈折角相動申候、

一当五月廿日ヨリ廿五六日方迄、箱根関門並小田原辺ニヲヒテ、賊徒乱妨ノ次第承得候処、同月初比賊徒數願筋ニ名付、式百人位沼津江參候処、其尽当所江御預相成、然処右之内百人位同十九日脱走、其砌大村藩和田藤之助名前ノ者、当駅江止宿ノ所江、前文賊徒七八人無暗ニ切入候付、藤之助ニハ其場切抜候得共、同人家来切害ニ逢ヒ、右旁ニ付沼津駅大キニ騒立候由、左候テ前文脱走ノ賊三嶋ノ様押来、勿論残百人御預ケノ同列モ、同日夕刻脱出、一隊ト相成、三島江張出、同所ヨリ宿割ノ者一両人箱根江差越、宿致手当、跡二百人計リノ人数追々着、然処箱根関所大キニ混雜、早打ヲ以城下へ報知相成候処、小田原人数二百人計、先陣・後陣ニ差分リ繰出、先陣ノ人数箱根関所ニヲヒテ、賊徒応接イタシ候処、賊ヨリ是非関門罷通度申募リ候得共、右先陣ノ内江佐土原並大村・土州藩モ、一両人位ツ、相加候処、関門差通候一切不相成段、右三番ヨリ申切候処、賊モ致方ナク関所手前山手江取登、小田原先陣百人計ノ人数ハ、関所ノ上山手江陣ヲ取、廿日夕方ヨリ砲戦、翌廿一日朝五ツ時分迄ノ戦ニ候由、右ニ付、賊之勢ヒ烈敷候処、終ニ小田原敗走ノ色ニテ、賊ニ

隨從後人百人位ノ人数、箱根権現要地江陣ヲ取候処、

小田原勢前後ノ人数同士軍ニ相成、早其節ハ佐土原等

ハ後陣ニ相加候由、其節後陣小田原人数過半戦死、佐

土原藩等モ同断之由、然処後陣小田原兵モ共ニ賊ニ与

シ、城下ヲ差テ押来、中途因州藩中江半五郎主從四人

関門ノ戦争聞付、早打ニテ差越候ニ、賊兵行逢、是以

大勢ノ中江被取込被打果候由、右通始末ニテ、廿一日

ヨリ関門賊ヨリ相固、然処江戸ヨリ因州並藤堂・長州・

肥前等之官軍着陣、小田原駅出逃レ、所々ニテ同廿四

日戦争有之処、賊徒悉ク箱根ノ様敗走、其砌所々賊ヨ

リ火ヲ掛、左候テ賊兵ハ、箱根峠ヨリ伊豆アダミ江心

サシ、同所ヨリ舟ニテ大島ノ様渡海ノ由承得申候、

一小田原君公ハ、当分ハ本源寺ト申寺院へ蟄居謹慎イタ

シ候由、城中ハ藤堂ヨリ相固メ、勿論兵器等ハ都テ官

軍へ差出候由、

一前文沼津江御預ケノ賊ハ、当四月比下総国五井駅ニヲ

ヒテ、一戦ニ打負候者共之内ニテ、房州辺ヨリ船路ニ

テ、沼津江相渡候者ト、専取沙汰有之由、

右之通着陣、且途中筋聞合ノ形行アラ方御問合申進候

間、被申上儀共旁宜敷御取計可給候、且我等宿駅通行

ノ節ハ、少モ異変ノ儀無之候、

七月三日

江戸姫路邸在陣

本宮

京都本宮役所

五三四 藩庁達書

コノ日、藩庁ニテハ、城下五番組ノ小組区域ノ変更ヲナ

シ、又造士館入学程度ノ変更ヲナセリ、ソノ達書左ノ如

シ、

五番

一小与二番 岩崎方限

一小与三番 冷水頭ヨリ紙屋谷迄

右島津仲支配

一小与四番 城谷方限

一小与五番 滑り川尻ヨリ堅野馬場上之原通

一小与六番 吉野・實方・帯迫・菖蒲谷迄

右川上右膳支配

一小与七番 磐若院境小路边ヨリ内ノ丸廻り坂迄

一小与八番 廻り坂上ヨリ中程迄

一小与九番 廻り頭ヨリ催馬楽迄

右支配寄名越左源太

右之通与替被仰付候、

一諸士兒童四書五經素読相濟之上、造士館へ罷出候様被究置候へ共、此節思召之訳被為在、以來四書素読相濟候ハ、造士館へ罷出候様被仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

七月三日

右衛門

官中日記  
黒田長知家記

五三五 諸藩ノ艦船ヲ大坂・兵庫ニ回航シ、征討

用ニ充テシム

四日、諸藩ニ令シテ、其ノ所有ノ艦船ヲ大坂・兵庫ノ二港ニ致サシメ、以テ征討ノ用ニ充テラル、ソノ令達左ノ如シ、

達書

兵隊線出方並諸品輸送等、船手ニテ相連ヒ候ハ、都テ便利ニ付、奥羽・北越之賊徒鎮定ニ至迄、諸藩之軍艦・蒸氣船ハ勿論、帆前船迄不残御借上ケ被 仰付候間、即今既ニ公務ニ相用ヒ候船ハ格別、其外各藩所持

之船艦、大坂・兵庫両港へ至急差出候様御沙汰候事、

但右差出候軍艦之内、破損等有之分ハ、於朝廷御修

覆被 仰付候、且又諸藩ヨリ出陣先へ用向之者、

並ニ諸品類、便船ニ乗組致度儀願出候ハ、御聞

届ニ相成候間、此旨可相心得事、

七月

五三六 藩庁達

コノ日、曩時伏見・鳥羽戦争、戦死者ノ靈社ヲ鹿兒島ニ創建中ナリシカ、落成ニ付、之ヲ靖献靈社ト名ケ、明後六日ヲ以テ、忠義祭祀ヲ施行シ、軍局士官並ニ戦亡者ノ親族ニ参詣ヲ許スヘキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

達書

今般為戦亡靈御設建被下候靖献靈社江、明後六日御直詣被下、引統軍局士官及戦亡候人数親族共江、拜礼被仰付候、尤諸人拜礼勝手次第被仰付、同日於調練場御弔調練被仰付候、且戦亡人数親族之儀は、右靈社近辺

江立宿申付置候間、前以差越居、出役之向より差引ニ  
応し可致拜礼候、

大砲五座

陸軍一大隊

右御先御供

陸軍二大隊

海軍一小隊位

騎兵隊

右御跡御供

右兵隊陸軍方江控居、御出之節練立、御供之次第右

之通ニテ、調練場江被為 入候ハ、大砲調練相始、

陸軍一大隊ツ、引統騎兵調練、海軍は少人数故、陸

軍江入候て調練可仕候、

一六日 御目見後、靈社江 御直詣、兵隊御供被召列、

夫より調練場へ被為 入諸隊調練御覽、

一六日 御直詣之御刻限不係、靈社神祭之式被仰付候、

一悦之助様方御視相成候ハ、靈社撰对所江御控ニテ、

神祭御視 御直詣之節、御跡より調練場へ御出可相成

候、

一兵隊靈社江拜礼之儀ハ、英式ニテ行軍之俣可仕候、

一靈地江被為 入候節、招魂冢 御覽、

明後六日靖獻靈社江 御直詣之御次第、別紙三通之通  
候条、向々江不洩様早々申渡、大隊長江も可申渡候、

七月四日

内膳

右慶應四年辰正月、伏見・鳥羽戦死之靈御創建、今

般御成就相成候間、右通同七月六日、太守様 御

直詣被成下候事、

五三七 大山綱良ヨリ久保田藩主先鋒ヲ願ヒ出テ

タル旨ヲ岩下方平ニ報ス

五日、奥羽鎮撫総督府參謀大山綱良、書ヲ岩下方平ニ贈

リテ、昨四日久保田侯ハ、仙臺ヨリノ使者ヲ斬リ、之ヲ

梟シテ藩論ヲ定メ、先鋒ヲ願ヒ出テタル旨ヲ報ズ、ソノ

文左ノ如シ、

會津容保、積年暴逆奉凶 宸襟候ノミナラス、慶喜伏

罪反逆謀主ニ候処、仙臺儀モ之ニ左袒シ、逆威ヲ恣ニ

シ、剩輪王寺入道親王之謀姦ヲ名トシ、尊氏ノ惡例ヲ

学ヒ候段、実ニ天地ニ不容之逆賊タルニ依テ、此度奉

總督之嚴命唱大義候付、先誅戮其賊徒以梟首軍門也、

七月四日

仙臺賊近習当藩有志

梟首

志茂又左衛門

同

同人家来二人

同

右同

生捕足輕

土橋市平

梟首

山内富治

梟首十分

内野順治

家来二人

家老組下用人

生捕

北島虎之進

足輕生捕

猪形市次郎

以上九人

外ニ盛岡足輕老人

右之者共同様逃去手向ニ付討取候、

【参照】

大山綱良岩下方平ニ贈ルノ書(其一)

七月朔日、盛岡ヨリ九條殿(道孝)並ニ醍醐殿当久保田城へ御着陣、尤肥前・小倉之兵隊随從、澤殿ニハ当領内野代港ト申処ヨリ同日御一所へ御着陣ニテ、六ヶ月目始テ御対顔且諸兵既ニ黙然トシテ、拭涙ノ外他事無之候、然ル処当久保田ヨリモ列藩会盟等種々相拒ミ候ニ付、翌二日久保田侯御呼出ニテ御議論ニ相成候処、主人ニハ弥無他心決心ニテ、即チ出兵ノ御請致候へ共、尚諸役人共種々申出候趣有之、不得止ニ付、五藩申合、莊内征討先鋒願出候ニ付、則被命候処、國中一昨三日ヨリ、正義党凡三百人計リ会集、君公へ相迫リ、是非先鋒他ニ不讓旨ヲ以、追々人数相増昼夜相詰候ニ付、昨四日朝久保田侯參陣、是非当藩へ懇願仕度、無左候テハ是ヨリ早々激党打入之旨ヲ以申立候ニ付、尚当藩へモ被仰付、国中大ニ振り立、然ル処仙臺重役兩人、相馬・新庄之役人ヲ引テ当地へ出張、御三卿之儀ハ早々当地

ヨリ御出船ニテ御帰京、且薩・長之人数ハ兼テ御約定  
之通、早々追払ヒ候様、相促シノ使者ニ候処、昨四日  
断然之決策ニ相成、悉ク誅戮ヲ加ヘ、幸ヒ宜シト則軍  
門ニ梟首シ、弥以正義一徹ニ相成、既ニ久保田国境ヘ  
相廻リ居候米澤・仙臺且莊内、明日ヨリ征討昨日御治  
定ニテ、実ニ官軍如水魚不日奥羽モ平定ニ近カルヘク  
候、合衆国諸部ニモ順逆ヲ弁シ候ハ往々有之、不日奇  
妙之一左右可申上候、以下略之、

七月五日

大山格之助

岩下佐次右衛門様

侍史

右

(其二)

以飛札奉啓上候、当春以来絶テ御消息モ不奉伺候処、  
先以其御地ニテ弥御安寧、日々御善政共被為施候筈ト、  
遙ニ奉恐悦候、然ハ奥羽ノ形勢追々注進トシテ、夫々  
差登申候付、巨細御聞取被下候筈ト奉存候、既ニ七月  
朔日、南部森岡ヨリ九條殿並醍醐殿当久保田城<sup>羽州久保田二十方石余佐竹</sup>  
へ御着陣、尤夜前ヨリ肥前・小倉ノ兵隊侍従、澤  
殿ニハ当領内野代港ト申所ヨリ、同日御一所ニ御着陣

ニテ、六ヶ月目ニ始テ御対顔且諸兵黙然トシテ、拭涙ノ  
外他事無之候、然処当久保田ニ於ヒテモ、列藩会盟ノ  
賊党種々相拒候付、翌二日久保田公御呼出ニテ、御議  
論ニ相成候処、主人ニハ弥無他心決心ニ相成、弥出兵  
ニ御請ハイタシ候ヘ共、猶諸役人共種々申出趣有之、  
不得止候付、五藩申合、莊内征討先鋒願出候付、即被  
命候処、国中一昨三日ヨリ正義党凡三百人余会集君公  
ヘ相迫リ、是非先鋒他ニ不讓旨ヲ以、追々人数相増シ  
昼夜相詰候付、昨四日朝久保田公參陣、是非当藩ヘ懇  
願仕度、無左テハ、是ヨリ早々激党打入候旨ヲ以申立  
候付、尚当藩ヘモ被仰付国中大ニ振立、然ルニ仙臺重  
役兩人相馬・新庄<sup>羽州新庄六万八千石余戸沢上</sup>  
地ヘ出張、御三卿ノ儀ハ早々当地ヨリ御出船ニテ御  
帰京、且薩・長ノ人数兼テ御約定ノ通、早々追払候様  
相促シノ使者ニ候処、昨四日断然ノ決策ニ相成、悉ク  
誅戮ヲ加ヘ、幸宜レト則軍門ニ梟首シ、弥以正義一徹  
ニ相成、已ニ久保田国境ヘ相迫居候米澤・仙臺且莊内<sup>酒井</sup>  
候也、明日ヨリ征討昨日御決定ニテ、実ニ官軍如水魚不  
日奥羽モ平定ニ趣クヘク候、合衆国ノ処モ南部兩藩・  
津輕・新庄・六郷<sup>羽州本庄二万石</sup>・六郷<sup>筑前守</sup>等内応致シ、只今ハ賊ニ



相加リ候へ共、事ヲ挙ハ只今内ヨリ相反スル盟約ニ相成、不日ニ奇妙ノ一左右申上度、実ニ是迄ノ遷延ニ及候事不得止次第、幾重ニモ多罪此事ニ御座候、尚巨細申上度御座候得共、昼夜ノ大混雑故、任幸便不敢敢荒々可奉得尊意如是御座候、恐惶謹言、

七月五日

大山格之助

岩下佐次右衛門様

尚々同勤世良事ハ斬首セラレ、肥前藩前山精一郎関東ヨリ参謀トシテ、命ヲ蒙リ只今ハ兩人ニテ仕合ノ至御座候、

### 五三八 養老ノ典行ハルニ付キ達書

六日、諸藩府県ニ養老ノ典ヲ行ハシメ、齡百歳以上ノ者ハ毎歳三人口俸、八十八歳以上ハ二人口俸ヲ賜フ、ソノ達書左ノ如シ、

達書

宮・堂上・諸藩並中下大夫

上士

今般、養老之典被為挙、府県ニ於テ八十八以上之者へ

ハ毎年二人扶持、百歳以上ハ三人扶持下賜候、付テハ宮・堂上諸藩並中下大夫・上士ニ至ル迄、右之御趣意奉体認、夫々所置可致旨被 仰出候事、

七月六日

官中日記  
徳川茂承家記

### 五三九 薩州・長州・土佐三藩老臣へノ達書

コノ日、本藩及ヒ長藩等十一藩土佐・尾張・因幡・備前・彦根・大垣・松代・加賀・高田ノ老臣ヲ召サレ、其ノ藩主ヲ輔翼シテ、報効ノ実ヲ揚ケ、士氣ヲ振作セシヲ賞シ、物ヲ賜ヒ且ツコレヲ奨励ス、ソノ本藩・長門・土佐三藩老臣へノ達書、左ノ如シ、

達書

各通 薩州

重役

長州

重役

土州

重役

積年 王事ニ勤勞、殊ニ当春以來所々出兵、国力ヲ竭シ、士卒ヲ勵シ、奮勇銳進之段、全ク其藩主精忠無二之夙志ヨリ従事報効有之事ニ候へ共、於其方共モ 朝命奉戴、鬪藩士氣振作鼓舞行届候儀ト、深ク 叙感被為在候、依之此品下賜候、愈以其藩主ヲ輔翼シ、可遂忠節旨 御沙汰候事、

七月

五四〇 岩下方平ヨリ西郷・桂ニ書ヲ贈リ、奥羽

同盟ヲ報シテ出兵ヲ議ス

七日、岩下方平、書ヲ西郷隆盛・桂久武ニ贈リ、奥羽同盟ノ事ヲ報シテ、出兵ノ事ヲ議ス、ソノ書左ノ如シ、  
過日、豊瑞丸出帆之砌、岩倉公ヨリ承知之趣ヲ以、  
御上京被遊候様申上、内田ヨリモ同様申上越候由、然  
処昨日、岩倉卿ヨリ仙臺等再及会盟、弥固結シテ官軍  
ヲ拒クニ決シ、不日大挙シテ白川城ヲ拔ト云之儀決候  
由、慥成筋ヨリ御聞取相成候付、不日ニ仙臺ヲ襲候策  
第一ト思召候間、最初ヨリ被仰出候趣モ有之、且薩大  
兵ヲ引テ江戸へ向フト云説頻ニ被行、是カ為ニ、因循

藩ハ恐縮罷在候由旁ニ付、此度ハ御国元ヨリ、直様不日ニ江戸へ

御出被遊度、船ハ江戸海へ手当相成居候様、三條卿迄御申越可被成候間、先江戸へ御乗込、夫ヨリ兵隊ヲ仙臺へ、船ヨリ松島迄御廻シ相成候様、万一急々

御発成兼候共、二大隊位ハ是非仙臺へ御廻シ相成度候間、早々飛脚差立可申上越旨、御沙汰被成候、金ハ三万位ハ御戴之筋ニ相運候由ニ候、過日申上候肥前大挙之儀ハ、弥其通不相替事ニ候、左候へハ東地一時ニ討挫策ニ出可申、右等之趣内田等申談候処、内意ニ御座候間、御軍議之上、イツレ共早々御決策可被下候、

〇東地近報慥成事聞得不申、先休戦之形チニ候、越後口ハ一時ハ官軍甚難儀ニ候処、追々援兵モ着相成、其後之左右不承候得共、賊退縮之風聞ニ御座候、〇先便モ申上候通、岩倉卿御留守相成候テハ、京師之処甚以懸念ニハ候得共、不得止勢ヒ且ツ東北ヲ討破候ハ、俗論モ却テ静リ可申ト存候間、随分直様江戸へ御着相成候テモ、不苦欵ト存候、猶御熟考可被下候、京江戸之間ハ兎モ角モ、何分ニモ早ク兵隊御繰出、引

続

御出馬ハ偏ニ奉願候、肥後モ去月末出帆、阿州モ此頃出帆相成候由ニ御座候、先ハ右申上度、町便取仕立申上越候間、早々御評決被下候様奉冀候、以上、

七月七日

岩下佐次右衛門

桂 右衛門様

西郷吉之助様

二白、西郷君御立前願出候私共御役之儀ハ、急々相運候様奉願上候、両方ニ被成候テハ、甚不安心ニ御座候、

島津忠義家記

#### 五四一 戦死者ヲ加茂川東操練場ニ祭ラル、ニ付

キ達書

十日、今春以来朝命ヲ奉シ、戦死セシ者三百七十四人ヲ加茂川東操練場ニ祭ラル、コト、二日ニ及ヘリ、本藩ノ殉難者ハ、載セテ六月十五日ノ部ニ在リ、祭祀ニ就テノ達書、左ノ如シ、

五四二ノ一  
布告

当春以来征討奮戦忠死之靈、来ル十日・十一日両日、

於河東操練場祭奠式被 仰出候事、

右ニ付、十日巳ノ刻ヨリ申ノ刻迄、十一日辰ノ刻ヨリ未ノ刻迄ノ内、諸官參詣可為勝手事、

右刻限之内、諸人參拜被差許候並有志之輩、詩歌ヲ供シ且兵隊操練式等、慰靈魂儀可為勝手事、

但靈前詰之者へ夫々相断、不及混雜様可致候事、

且從 朝廷御祭奠金下賜候へハ、他方ヨリ料物奉納之儀被止候事、

右之通被 仰出候事、

七月(六日)

官中日記  
太政官日誌

五四二ノ一

達書

当正月以来、以 朝命奮戦死亡之靈、来ル十日・十一日於川東操練場祭奠式被 仰出候、右ハ其勲勞深ク思召候処ヨリ被 仰出候儀、一同厚可相心得、依テ其藩々身寄之者等ハ、別テ追慕參拜モ可致儀ニ付、玉串雛形為見置候間、夫々申通可有之事、其藩々役々並身寄之者等致參拜候節ハ、以名札神前詰之者へ可相届候事、

右之通為心得相達置候事、

七月

神祇官

附箋

参拝刻限等ハ、別段御布告有之候事、

榊枝之本ニ

藩名 姓名

黒田長知家記  
井伊直憲家記

五四二 志岐外二名越後長岡ヨリ帰京シ援兵ヲ申

出ツ

十一日、志岐太郎次郎・村田新八・西郷従道、昨晝越後長岡ヨリ帰京シ、援兵ヲ申出テタルニヨリ、島津主殿・岩下方平ハ、一昨九日着坂ノ一小隊ヲ直ニ出軍セシムルコトトシ、更ニ右三名ヲ藩庁ニ遣ハシ、出軍ノ事ヲ在藩家老ニ商議セリ、其ノ文左ノ如シ、  
五四二ノ一

志岐太郎次郎

村田新八

西郷信吾

右ハ去ル三日越後長岡表出立、昨十日既爰許へ到着、

彼表是迄戦争之形行並応援之兵、早々被差統度旨申

出、何レ急速出兵不相成候テハ不相濟時機合付、即軍

務局へモ御届申上、兵庫又ハ於長崎、西洋船借入方等

之儀共致手当、右人数へ諸事委細申合、今日急ニテ差

立候間、篤ト被承届、

御両殿様被達

貴聞候儀ハ其通ニテ、一大隊位ハ早々出軍相成候様可

被取計候、此段申越候、

辰七月十一日

島津主殿(久世)

岩下佐次右衛門

島津備後殿(忠盛)

島津圖書殿(久治)

桂右衛門殿(久武)

川上龍衛殿(久勝)

新納刑部殿(久橋)

町田内膳殿(久慈)

島津隼人殿(久光)

五四二ノ二

岩川一小隊、一昨九日着坂相成候旨、今日相達、然処

越後表ヨリ、昨朝村田新八外三人事着京ニテ、彼表之

事実承候処、追々戦争ニテ賊軍屢敗走之向ニハ候へ共、

何分官軍少人数ニテ、間々苦戦ニヲヨヒ候由、承届趣有之候付、右岩川一小隊之儀、

朝廷へ伺之上、越後口之様出軍被仰付候付、早々進軍可取計候賦ニ候、尤先達テ、其許ヨリ志州鳥羽へ向出艦相成候中原猶介其外一列之儀、先月十三日着舟ニ付、右一列モ総テ越後表之様出軍被仰付、甲州路ヨリ進軍相成候間、御心得旁此段申越候、尚巨細之儀ハ村田等へ申合越候条、御細達之上

御兩殿様被達

貴聞候儀共、何分宜被取計候、以上、

辰七月十一日

島津主殿

岩下佐次右衛門

島津備後殿

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

島津隼人殿

五四三 大山綱良ヨリ西郷・大久保・吉井へ書翰ヲ

贈り奥羽ノ形勢ヲ報ス

コノ日、奥羽鎮撫總督府參謀大山綱良、書ヲ西郷隆盛・大久保利通・吉井友實ニ贈リテ、奥羽ノ形勢ヲ報ス、ソノ文左ノ如シ、

一 輪奉拜呈候、追々残暑酷敷御座候処、乍恐君上益御機嫌克被遊御在京、随テ各様弥御康健被為成御精勤候半恐悦奉賀候、陳ハ去ル五日、当藩ヨリ飛脚被差立候付、当秋田へ御三卿共、去ル朔日御着陣ニテ、則ヨリ御軍議相成、逆賊征討決拳ニ付、当藩モ漸々正義ノ列ニ相連リ、致振起候趣申上儀ニ御座候間、御覽被下候半奉存候、然処去ル六日当地繰出、新庄戸田上総介羽州六万八千二百石口へ肥前・小倉・薩・長之兵ヲ進メ、当秋田ヨリ新庄国境迄廿八里也、此領内へ別紙〔頭書〕〔図面ナシ〕繪図面之通、賊兵相迫リ居候処、新庄口ヨリモ内応、既ニ昨夜襲撃ノ決策相成候間、十分策ヲ不失様、一時ニ賊党攻撃可疑儀無之ト、安堵イタシ居申候、明朝限ニハ報知可有之ト、相待居申事ニ御座候、且亦秋田ヨリノ庄内賣口、海辺ヨリハ、秋田勢・筑前二小队、肥前百五十余大砲隊相合シ責入、

既ニ昨日ヨリ繰詰申候間、是以明朝限ハ報知可有之賦

ニ御座候、然処奥羽会盟ノ列藩、追々悔悟奮發隣藩六

郷兵庫頭(正徳)羽州本庄二・岩城左京大夫(松邦)三石二・生駒大内蔵、

自ラ軍門ニ来テ先降ヲ乞ヒ、罪ヲ謝ス、夫々応援ノ出

兵相達シ、南部美濃守(利剛)是モ使者ヲ以出兵ヲ願フ、則命

シテ新庄ヘ出張ス、同八戸モ同様出兵ス、津軽ニ於テ

ハ秘術ヲ尽シテ、歎願ニ及トイヘトモ、秋田・盛岡ノ

両藩陰ニ仙・庄等ヘ密ニ相通シ、刺越後路ヘ出兵ノ聞

得有之候ヲ憤リ、一向是ヲ免サス、乍然国情只管愁苦

イタシ、押テ出兵恥辱ヲ雪キ候勢ニ御座候、

一 庄内ノ儀モ、去ル六日ヨリ白川口切迫ニ付、千人余繰

出シ、内ハ空虚也、全ク秋田ヨリ官軍討入ノ儀ハ夢々

不知、尤秋田是迄同盟密議モ致居候付、大ニ致安心候

様子ニテ、国ハ差置出兵ノ様子ニ御座候、是又自滅ノ

表ナラント申事ニ御座候、

一 箱館表ヨリ亜軍艦砲七門、春日丸同様ノ舟ナリ、右ヲ

清水谷殿ヨリ御差廻ニ付、幸ニ去ル七日当湊ニ致出張、

異人ヘ談判、而南部・秋田合シテ、官軍ノ艦則日取入

ニ相決シ、五万六千両ニテ、右之肥前海軍百五十人乘

込、是ハ(七日)八戸表ヘ滞在ニテ、過ル七日彼湊ニ

相廻シ、アルムストン四丁積込、来ル十四日限、酒田

港ニ乘廻候賦ニ御座候間、海陸ヨリ一時ニ打破リ候ハ

、不日ニ落城無疑哉ト奉存候、十分軍配モ相調、殊

更当春已来賊徒ニ相苦ミ、一時ニ機会到来、兵隊ノ氣

鋒御遠察可被下候、

一 御三卿御揃、別テ御機嫌克被成御座候、

一 当秋田君侯ハ、弥正議ノ御方ニ候得共、内官ヘ五人ノ

姦臣有之故ニ、種々仙・米等ヨリ差図ヲ得、周旋シ居

候処、此節皆退役蟄居被申付、是モ奥羽ノ変革魁トモ

可申力、一笑珍事ノミ御座候、暫時ノ処ハ既ニ暗殺ニ

モ可逢ノ勢ヒニ御座候ヘトモ、唯今ハ別段ノ頭形ニ相

変シ、君公モ毎々參陣ニテ、大小ノ事モ預相談候件々

有之、少シハ東モ白ミ可申カト致愚考候、イツレ不日

吉左右申上度、先ハ今日迄ノ形行、任幸便概略如此御

座候、恐惶謹言、

慶應四辰七月十一日

大山格之助

西郷吉之助様

大久保一蔵様

吉井幸輔様

再白

乍恐、御家老中様江別段不奉言上候間、宜敷様御披露可被下候、

一仙臺辺並秋田・津輕等、是迄之情実書翰等差上申候、  
一羽州上山・山形之兩藩、弥逆徒ニ与カシ、越後路江  
出兵且又新庄表江出兵、更ニ悔悟之形路無御座、引  
続キ責落可申候、

#### 五四四 越後口在陣ノ黒田清隆等彈藥類ノ請求ヲ

ナセリ

コノ日、越後口在陣ノ黒田清隆・川南東右衛門・淵邊高  
照、書ヲ京都本營ニ贈リテ、戦争ノ状況ヲ報シ、彈藥・  
軍用金・毛布等ノ請求ヲナセリ、ソノ文左ノ如シ、

去月廿四日御仕出之問合、去ル七日相達、追々彈藥等  
払底相成候処、実ニ力ヲ得申候、拟先達テ御兵具方足  
輕大重喜十外ニ忝人差立、申越候五拾万発之小銃<sup>彈藥</sup>、  
急速御繰出可給候、尤大津駅ヨリ御差出相成候三小隊  
之儀モ、彈藥等相少次第、勿論志州鳥羽ヨリ上陸之兵  
モ、彈藥如何程持越相成候欵モ不相知候間、前書之五

拾万発丈ハ繰出、致急傳候様御頼申進候、亦外ニ小銃  
彈藥式拾万発、是以引続御差続可給候、

一金五千兩

但追々冷氣ニテ候故、一統戎服等モ相渡、且今一度

御賦金等モ相渡答候間、旁御推量可被成給候、

右ハ初四小隊半之目途ニテ持越相成候処、至只今ハ都  
合拾式小隊ニモ相及候得共、先前書丈ハ是非御差続相  
成候様、御頼申進候、尤此一件ハ吉井氏ヨリモ別段申  
越相成候得共、猶我々トモヨリモ御頼申進候、

一フランケット千枚

右ハ爰許追々冷氣相成候間、右之内先達テ大迫慶藏出  
立前御買入相成共、五百枚丈ケハ急速御遣可給候、跡  
五百枚ハ御買入次第御遣可被成下候、

但式枚続キ、

一スナイトル彈藥拾万

但見本差遣候事、

右市中御探索早々ニ御買入御差続可被成候、

一是ヨリ下新潟辺迄ハ広平之地形ニテ、迎モ初テ之兵員  
ニテハ進撃難出来、六月二日今町之敗レ後ハ、兵ヲ一  
緒ニ引円、土壘相築キシカリ相守、諸口致防禦援兵之

来ルヲ相待居候、然処長州干城隊一大隊位・我藩之三小隊致着津候得共、素諸口手薄キ事故、皆共防禦ニ振向進撃之策更ニ立兼候、然処志州鳥羽ヨリ上陸兵モ近日着陣之筈、肥前モ同断、越前モ先手文ハ着陣、先三四日モイタシ候得ハ、皆着之積候間、夫ヨリ一策ヲ施シ、進撃之算モ可相立ト存申候、尤對壘中諸口江賊徒不日ニ致突出候得共、皆トモ討散シ毎度官軍勝利ヲ得、実ニ愉快成事トモニ御座候、不遠新潟津川口相堅メ、會城江相望候左右可申越候、扱先達テ村田新八外ニ式人致帰京候間、同人ヨリ細事御聞取為相成筈、御国許ヨリ兵隊致着候ハ、御吟味次第可被成給候、一戰死人数遺髪右差遣候間、御国許江御下シ相成候儀トモ、可給御頼申進候、

右旁申進度如斯御座候、以上、

越後在陣

辰七月十一日

黒田了介

川南東右衛門

淵邊直右衛門

京都本宮役所

五四五 諸藩ニ令シ郡邑ノ公私所属ヲ明ニシ、其ノ石高ヲ録上セシム

十三日、諸藩ニ令シ、郡邑ノ公私所属ヲ明ニシ、其ノ石高ヲ録上セシム、ソノ令達及ヒ本藩ノ上申書左ノ如シ、於其藩別紙案之通、國中一円 御領・自領・他領・寺社領・旧幕麾下、未方向不分明ニ候共、其知行等モ不殘、郡々毎村石高不洩様取調、生紙堅張ニ相認、当九月中迄ニ当官へ可差出候事、

七月十三日

會計官

各藩

公務人

今日、會計官ヨリ御呼出ニ付、御留守居付役兼務益山八右衛門罷出候処、御用掛内海太次郎ヲ以、別紙之趣相達、猶又書写候様致承知候付、写三通サシ上候事、

七月十三日

内田仲之助

表紙

何郡

何国 村々高附帳



何国何郡

何之誰支配所

一高何石

何 村

一高

何之誰預所

一高

何之誰領分

一高

何之誰知行所

一高

何社領

一高

何寺領

一高

小以高何石

一高

内

一高

高何石

一高

何之誰支配所

一高

何之誰御預所

一高

何之誰領分

一高

何之誰知行所

一高

何社領

一高

何寺領

一高

何 村

一高

何之誰預所

一高

何之誰領分

一高

何之誰知行所

一高

何社領

一高

何寺領

何郡

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

一高

高合何石

内

高何石

何之誰支配所

高何石

何之誰御預所

高何石

何之誰領分

高何石

何之誰知行所

高何石

何之社領

高何石

何之寺領

薩摩少將

日向

大隅国

薩摩

薩摩国一円

一高三拾壹万五千五石六斗

大隅国一円

一高拾七万八百三拾三石四斗五升壹合

日州諸縣郡之内

一高拾貳万貳拾四石五斗八升

琉球国

一高拾貳万三千七百石余

合高七拾貳万九千五百六拾參石六斗三升壹合余

右ハ、國中一円御領・自領・他領・寺社領・旧幕廳

下イマタ方向不分明ニ候共、其知行等モ不殘、郡々

毎村石高不洩様取調可申上旨承知仕候、少將領分薩・

隅一円、日州諸縣郡之内並琉球国高石之通ニ候、外

々御領・他領・寺社領等入交候儀無御座候、此段申

上候、以上、

薩摩少將内

九月十日

内田仲之助

島津忠義家記

五四六 白川口ニ戦死ノ本藩以下五藩ノ兵士ヘ香

花料ヲ賜フ

コノ日、白川口ニ戦死セル本藩・長州・大垣・土州・忍

ノ兵士ヘ香花料ヲ賜フ、ソノ文左ノ如シ、

御沙汰書

奥州白川口戦争死傷ノ者、深ク不愍ニ被

思食、香花料並保養料トシテ、左之通り下賜候事、

但シ死亡・重創ノ者ヘハ金拾兩宛、薄手負ハ五兩宛

下賜候事、

金八百五拾五兩

薩州

金四百五拾兩

長州

金二百八拾兩

大垣

金八拾兩

土州

金拾五兩

忍

七月

五四七 在京家老島津主殿伏見・鳥羽役殉難者石

塔竣工ニツキ書ヲ在藩家老ニ贈ル

コノ日、在京家老島津主殿、書ヲ在藩家老ニ贈リ、相國寺内林光院ノ伏見・鳥羽役殉難者石塔竣工ニ付、供養並施餓鬼執行ノ旨ヲ報シ、且ツ毎年ノ香華料・供養料等ノ事ニ付商議セリ、ソノ書左ノ如シ、

金壹枚

右

御両殿様ヨリ、

右ハ当正月三日以來、伏見・鳥羽辺戦争ニ付、戦死人數相國寺内林光院へ埋葬、石塔御見計ヲ以、建立被仰

付置候処、此節別紙繪<sup>〔領註〕</sup>「檢圖面ナシ」<sub>〔紙註〕</sub>圖面之通成就相成、右供養並施

餓鬼、去ル十日合祭執行イタシ度旨、林光院申出候、先年長州人犯

闕之節、戦死人數施餓鬼料トシテ一人ニ付百匹ツ、年々寺納被仰付来候の例ニ候間、供養並施餓鬼料之儀

モ同様被仰付、且亦此節之儀ハ從

朝廷、別段御深衷之御儀モ被為

在、一社迄御取建、忠魂永祭被仰付候段被

仰出候御訳モ有之候間、追テハ祠堂銀等モ可被召付、

乍併当年之儀ハ差当リ之儀ニ付、

御在国ニハ被為 在候得共、從

御両殿様、別段華香料当年限御手向被下候筋ニモ可有

御座哉、於其儀ハ

御相中将様ヨリ右之通寺納被仰付、相当可仕哉、左候テ

施餓鬼料之儀八年々不及伺、相渡候様被仰付置度旨、

御留守居申出候付、都テ吟味通被仰付候、左候テ祠堂

銀員數等之儀ハ、追テ致吟味申出候様申渡候、別紙繪

圖面相添此段申越候条、

御両殿様被達

御聴、其元申渡相成候儀ハ、何分モ可被取計候、以上、

但石塔供養並施餓鬼料金三拾貳兩貳分ニ相及候間、

此段ハ為御心得候、

辰七月十三日

島津主殿

島津備後殿 島津圖書殿

桂 右衛門殿 川上龍衛殿

新納刑部殿 町田内膳殿

島津隼人殿

朱書

本文致承知、達

貴間難有奉承知候様、銘々親類等へ可被申渡旨、大

隊長へ申渡候、左候テ施餓鬼之名目追遠会ト被相替

候付、御留守居等へモ可被達置候、別紙絵図面扣置

此旨及御返答候、以上、

辰八月廿三日

町田内膳

島津主殿殿

島津忠義家記

五四八 越後口総督嘉彰親王布告文

十五日、越後口総督嘉彰親王柏崎ニ至リ、出張軍隊へ着

陣ノ布告ヲナス、ソノ文左ノ如シ、

布告

松平肥後始終暴逆ヲ恣ニシ、近傍諸藩ヲ煽動シ、屢々

王師ニ抗衝ス、故ニ万民塗炭之苦ヲ被為救候叡慮貫キ

兼、且勤王之大小諸藩、数旬対壘及難戰、死傷モ不少

段達天聰、大ニ被為惱宸衷候、依之今般此軍為総督早

速出馬遂成功奉安宸襟候様、厚キ蒙勅命、不肖之身敢

雖不当其任、危急之場合辞スルニ暇ナク、今日当地へ

致着陣候、此上偏ニ諸藩ト同心合力、奉奏成功度頼存

候、右勅意之趣、且着陣之布告為可致如件、

七月十五日

嘉彰花押

越後口出張

諸藩へ

五四九 大坂開市場ヲ開港場ト改ム

コノ日、大坂開市場ヲ改メテ、開港場トナス、ソノ布告  
左ノ如シ、

大坂地、是迄外国人開市相成候処、今度改テ開港ト被

仰出候事、

〔貼紙〕 大山格之助

五五〇 奥羽鎮撫總督諸藩兵深く賊中ニ入り艱苦  
久シキヲ以テ、ソノ勞苦ヲ賞ス

十六日、奥羽鎮撫總督以下參謀並ニ兵隊ニ書ヲ下シテ、  
ソノ賊中ニ入り艱苦ヲ嘗メ、大義ノ為ニ勇奮勉勵シタル  
ヲ賞シ、賞金ヲ下賜シテ、之ヲ奨励セラル、ソノ文左ノ  
如シ、

九條左大臣

澤三位

醍醐少將

參謀

〔貼紙あり〕  
当春以來、賊軍中ニ於テ、梳風沐雨、久敷金穀輸送ノ  
道モ相絶、兵士ヲ引率シ、現地ノ艱難其情深ク 御憫  
察被為遊、乍些少 思召ヲ以テ、金七百兩拜領被 仰  
付候事、

七月

官中 日記  
九條道孝・沢為量以下履歷書

本条、參謀ハ綱良ヲ指ス、賜金為量ハ五百兩ニ作り、  
忠敬ハ三百兩、綱良ハ二百兩、

七月

当春出陣後賊徒猖獗、殊ニ仙臺其他諸藩反覆候ニ付テハ、賊  
軍ノ中ニ孤立シ、千辛万苦益大義ヲ重シ勉勵候條、其忠情篤  
志神妙ニ被 思食候、此後時月遷延及冷寒候テハ、艱苦不容  
易儀ニ付、今度肥・因及諸兵隊迅速被差向候間、諸軍ヲ鼓舞  
シ、同心戮力直ニ賊之巢窟庄内ヲ屠リ、奥越之 官軍ト相  
応シ、速ニ平定ノ功ヲ奏シ、可奉安 宸襟 御沙汰候事、

五五一 久留米藩蒸氣船千歳丸兵庫出帆、鹿兒島  
へ回航スヘキヲ報ス

コノ日、兵庫軍務官ヨリ我カ役人へ、藩兵ニ大隊越後口出  
兵ニ付、久留米藩蒸氣船千歳丸ニ御貸渡ノ小銃・雷管・ハ  
トロン等積入、本日兵庫出帆鹿兒島へ廻船スヘキヲ報シ、  
又大橋謙助ヨリハ、曩時帰藩セシ村田・西郷等ニモ、此  
ノ旨ヲ報セリ、ソノ文左ノ如シ、  
五五二 達書

今般其藩兵隊ニ大隊、越後へ出兵被仰出候付、諸藩船  
又ハ洋船之内御貸渡小銃千挺可相渡旨、本藩ヨリ達越

候付、久留上藩蒸氣千歳丸へ小銃五百挺・雷管・ハトロ  
ン共積入、今十六日当港出帆申付候、尚四五日中ニハ  
洋船借入、残り小銃・胴乱等積込差廻シ可申候、右可  
申達如此候、以上、

兵庫

辰七月十六日

軍務官

薩州藩

役人中

<sup>五五二</sup>今般越後表へ、貴藩兵隊二大隊出兵被 仰出、諸藩船  
並洋船之内、御貨渡且小銃渡方等之儀、当月十二日本  
官ヨリ達越候、然処当港ニ碇泊之諸藩船・洋船共無之  
候付、大坂港碇泊之久留米千歳丸・雄飛兩艦へ及御沙  
汰、一昨十四日粗当港へ廻着之処、兩艦共器械損所有  
之、昼夜ニ掛ケ修補為致、千歳丸今日修覆相調候付、  
右艦へ小銃五百挺・ハトロ二拾八万三千発・雷管四  
拾万積込、出帆申付候間、右様右船へ御乗込可被成候、  
兩三日之中ニハ、人数八百人計モ乗組出来之洋船廻着  
之由ニ付、右船廻着次第シナイトル四百挺・シャーフ  
ル百挺・ハトロ・胴乱等積込可被差廻候間、鹿兒島

着船之上二大隊不殘乗込相調候ハ、千歳丸之儀モ早  
速当港へ御差廻シ可被成候、右可申達如是候、以上、

辰七月十六日

大橋謙助

西郷信吾様

村田新八様

追テ千歳丸石炭及欠乏候節ハ、貴藩ニテ入用丈ケ御

渡方御取計可被成候、以上、

島津忠義家記

五五二 在京家老島津主殿越後口ノ状況ヲ在藩家

老ニ報ス

コノ日、又在京家老島津主殿書ヲ在藩諸家老ニ贈リテ、  
村田・西郷等出発後ノ越後口ノ状況ヲ報ス、ソノ文左ノ  
如シ、

越後長岡表其外是迄戦争之次第ハ、村田新八外武人へ  
委細申合越通ニ候、然処彼地へ差出置候当所手形所書  
役村山源七、去ル十一日彼地出立、今朝到着イタシ候  
付、其後之形勢委細承届候処、右新八其外出越後格別  
之戦争モ無之候、互ニ砲台相守居、其内官軍ハ進撃、

然如御国兵隊東海道ヨリ分隊之諸隊モ、追々ト着越、  
其外長州干城隊一大隊・越前兵三百余、肥前・岩國等ヨ  
リモ不日着陣之賦ニテ、官軍大ニ力ヲ得、来ル廿日頃  
ニハ大勢着陣、其上一同大挙討賊之筈候旨、彼地出軍  
吉井幸輔其外ヨリ申合越候、猶追々吉報委細可申越候  
へ共、近日大坂ヨリ蒸気船出船之賦ニ付、為心得大頭  
迄此段申越候条被達

貴聞候儀ハ、何分モ可被取計候、以上、

辰七月十六日

島津主殿

島津備後殿

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

島津忠義家記

### 五五三 藩庁達書

コノ日、藩庁ニテハ、忠義出征ニ付左記ノ隊ニ隨行、大

砲隊ノ狙撃隊ヲ命スル旨ヲ、ソノ領主・地頭ニ達セリ、  
ソノ書左ノ如シ、

但二十一日狙撃隊  
ヲ免セラレタリ

一 谷山

一 櫻島

合大砲一座

右狙撃隊

國府半隊

蒲生半隊

合一小隊

一加治木大砲一座

右同

加治木半隊

都城半隊

合一小隊

右ハ此節

太守様御出軍付、右大砲二座御供ニテ被召列候旨申渡  
置候付、右之通狙撃被仰付候条、銘々領主・地頭へ申  
渡、可承向へモ可申渡候、

七月

右衛門

刑部

朱書

辰七月十六日御本文之通、銘々領主・地頭へ申渡、大隊長へモ申渡候、

取次

西 筑右衛門

五五四 江戸ヲ東京ト改メ、鎮將府ヲ置イテ駿河

以東十三国ヲ管理ス

十七日、詔シテ江戸ヲ東京ト改メ、鎮台及ヒ關八州鎮將ヲ廢シテ、更ニ鎮將府ヲ置キ駿河以東十三国ヲ管理ス、ソノ詔書及ヒ職制左ノ如シ、  
五五四ノ一

詔書

朕今万機ヲ親裁シ、億兆ヲ綏撫ス、江戸ハ東国第一之大鎮、四方輻輳之地、宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ、因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン、是朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ、衆庶此意ヲ体セヨ、

辰七月 〔十七日〕

五五四ノ二  
副書

慶長年間、幕府ヲ江戸ニ開キシヨリ、府下日々繁栄ニ赴候ハ、全ク天下之勢斯ニ帰シ、貨財隨テ聚リ候事ニ候、然ルニ今度幕府ヲ被廢候ニ付テハ、府下億万之人口、頓ニ活計ニ苦候者モ可有之哉ト、不便ニ被思食候処、近来世界各国通信之時態ニ相成候テハ、専ラ全国之力ヲ平均シ、

皇国御保護之目途不被為立候テハ、不相叶事ニ付、屢東西

御巡幸、万民之疾苦ヲモ被為問度深キ

叡慮ヲ以テ、

御詔文之旨被

仰出候、孰レモ篤ト

御趣意ヲ奉戴、徒ニ奢靡之風習ニ慣レ、再ヒ前日之繁栄ニ立戻リ候ヲ希望シ、一家一身之覺悟不致候テハ、遂ニ活計ヲ失ヒ候事ニ付、向後銘々相当之職業ヲ當ミ、諸品精巧物産盛ニ成行キ、自然永久ノ繁栄ヲ不失様、格段之心懸可為肝要事、

辰七月 〔十七日〕

官中日記  
嵯峨實愛家記

官中日記  
嵯峨實愛家記



職制

東京在勤

一鎮將

右東国事務ヲ総裁ス、

一議定

一参与

右立法ノ權ヲ執、議政官之体ニ法ルヘシ、

一判事分課

諸侯 軍務 社寺

刑法 會計

一弁事

右行法之權ヲ執、行政官之体ニ法ルヘシ、

一史官 筆生

右ハ鎮將被差置、東国政務御委任被 仰付候ニ付、駿

河・甲斐・伊豆・相摸・武蔵・安房・上総・下総・常

陸・上野・下野・陸奥・出羽十三国管轄致シ、諸侯之

事件ニ至ル迄、總テ取扱可致事、尤大事件ハ時々奏聞

ヲ遂ケ候様被 仰付候事、

一東京府

知府事 掌府内事務

判府事

權判府事

京・攝ハ申ニ不及、諸府県ニ至ル迄、政務一定之規則

被為立候 御趣意ニ付、彼是齟齬不致様被 仰出候事、

但於諸藩モ 御趣意ヲ奉体認、右政体ニ法リ追々改

革、終ニ天下一定之規則相立候様之心懸可為肝要

候事、

七月 丁七日

官中日記  
嵯峨実愛家記

五五五 奥羽鎮撫總督參謀大山綱良ニ肥前藩卜同

心協力スヘキ旨達セララル

コノ日、奥羽鎮撫總督府參謀大山綱良ニ令シ、此度肥前

藩ノ老臣鍋島茂昌<sup>上總</sup>ニ羽州出陣ヲ命セラレタルニヨリ、

同心協力シテ、速ニ平定ノ功ヲ奏スヘキ旨達セララル、其

ノ文左ノ如シ、

五五五ノ一

大山格之助

此度別紙勅詔写之通、鍋島上総早急出陣被 仰付候条、

諸事無伏臘遂示談、同心合力、速ニ平治ノ功ヲ奏シ、  
可奉安 宸襟 御沙汰候事、

七月

官 中日記  
大山綱良履歴書

五五五ノ二  
別紙

鍋島上総へ達書

鍋島上総

其方武術拔群、且兵隊精鍊之趣達 天聰、先般 御沙  
汰被 仰出候処、此度上着 御満足被 思食候、就テ  
ハ東北脱走ノ賊徒散乱蔓延、會津・庄内等ノ賊軍ニ合  
シ、近隣ノ小藩ヲ剽劫シ、恣ニ 王土ヲ掠メ、王民  
ヲ苦シメ、大逆無道至ラサル処ナシ、斯ル形勢ニテ自  
然遷延、誤時機及沍寒候テハ、万民ノ艱苦不容易儀ニ  
付、深キ 思召ヲ以、今度其方羽州出陣被 仰付候条、  
迅速発向、彼地出張之総督ヲ輔翼シ諸軍ト戮力、直ニ  
賊ノ巢窟庄内ヲ屠リ、奥・越之官軍ト相応シ、速ニ北  
地平定、可奉安 宸襟 御沙汰候事、

七月

官 中日記  
鍋島直大家記

五五六 相良治部白川方面ノ戦況報告

コノ日、白川出張ノ相良治部ヨリ、同方面ノ戦況ヲ報セ  
リ、ソノ文左ノ如シ、

届書

昨十六日淺川駅之方ニ当リ、砲声相聞候ニ付、釜子駅  
出張之弊藩人数ヨリ斥候差出候処、會津・仙臺等之賊  
徒八百人位襲来候故、彦根・土州之兵ト砲戦之様子ニ  
付、為応援黒羽一小隊・弊藩一小隊繰出シ、態ト印旗  
ヲ伏セ、賊之背後ニ迫テ山上ヨリ追々進寄、一時ニ砲  
撃之上、二字比人数引上凱陣仕候、此方手負別紙之通  
御座候間、不取敢御届申上候、以上、

白川出張

薩州

七月十七日

相良治部(長巻)

別紙

手負

川路正之進(利巻)

手負

緒方藤之丞

五五七 飢饉ノ虞アルヲ以テ地方官ヲシテ予メ備

ヲナサシム

十八日、地方官ニ諭シテ、乱後飢饉ノ虞アルヲ以テ、之  
ヲ備ヲ為サシメラル、ソノ達書左ノ如シ、

達書

古人ノ説ニ、大乱ノ後ニ必ス飢饉アリトイヘリ、且洪水大旱ハ古来聖明ノ世ト雖トモ免レサルトコロナリ、春來霖雨滂沱水災農民ノ患ヲナシ、氣候不順既ニ苗蝗ノ害アリ、此上七八月ノ末ニ至リ、万一大風甚鋪(マツ)トキハ米価倍々騰貴シ、諸藩ハ鎖津ヲ致シ、奸商ハ買占等ヲ専ラニセハ、窮民ノ難渋ハ申スニ及ハス、鰥寡孤独何ヲ以テ餓死ヲ免レン、民ノ上タルモノ予メ策ヲラスンハアラス、況ヤ 皇政一新、億兆ノ民ハ再ヒ父母ヲ得ルノ念ヲ生スル時ニ当リ、賑恤ノ典一日モ怠ルヘカヲサルヲヤ、依之府県ノ諸役人此事ニノミ心ヲ尽シ、其支配所民口ノ多少ニ応シ、予メ米穀ノ流通ヲ謀リ、鎖津買占等ノ所業ヲ禁シ、或ハ彼地ヨリ此地ニ輸シ、此地ヨリ彼地ニ送り、互ニ有無相助ケ、今日ヨリ其ノ目算ヲ立ヘシ、其上不足ノ見込ナレハ、機会ニ応シ、非

常ノ取計アルヘケレハ、府県ノ諸役人能々相考ヘ、早々言上致スヘシ、

七月 十八日

官中日記  
京都府史料

五五八 藩庁青山勇藏ヘ出軍諸郷兵ノ差引ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテ、青山勇藏ヘ今回出軍ノ諸郷等兵隊ノ差引ヲ命ス、ソノ辞令左ノ如シ、

青山勇藏

右ハ此節諸郷等兵隊出軍付、為差引被差出候条可申渡候、

七月

刑部

朱書

辰七月十八日御本文之通、勇藏江申渡、大隊長ヘモ申渡候、

取次

西 筑右衛門

五五九 在藩家老新納刑部ヨリ忠義東征先鋒兵ノ

上京ヲ在京家老ニ報ス

十九日、在藩家老新納刑部ヨリ、忠義東征出発ノ期近キニアルヲ以テ、左記ノ先鋒兵ヲ上京セシムルコトヲ、在京ノ岩下方平・島津隼人ニ報セリ、ソノ文左ノ如シ、

一 清水・日當山

合一小隊

一 財部・末吉

合一小隊

一 諸郷番兵二小隊

一 御兵具方附士二小隊

一 櫻島・谷山

合大砲一座

一 國府半隊

一 蒲生半隊

合一小隊

右大砲一座狙撃隊

一加治木一小隊

右ハ出兵之儀被申越、

太守様当分踊之内米之尾

御光越中付、

中将様達

御聴、

太守様御出軍御供被仰付置候内、為御先鋒右之通出軍

上京被仰付候、左候テ豊瑞丸・平運丸不日帰帆次第被

差出候旨、今日申渡候、此段為御心得申越候、以上、

但西郷吉之助儀出軍総差引、青山勇蔵ニハ差引トシ

テ被差越候趣申渡候、此段ハ為御含候、

辰七月十九日

新納刑部

岩下佐次右衛門殿

島津隼人殿

参考

辰七月廿二日

一 清水・日當山 一小隊

一 財部・末吉 一小隊

一 諸郷番兵 二小隊

右ハ先達テ出兵被仰付、早々致出府候様申渡、急速相

揃、出立迄モ被仰付候処、順風無之滞船相成居候処、

折柄御下向ニ付被召留、御供被仰付、当分致滞府居、

然処是迄於諸郷ニ富家之者共へ出兵申付、差出来候得共、追々出軍付貧富無差別致出兵、長々滞府ニ付、用金等払底イタシ、銘々差統方之儀モ出来兼、一統難渋之段相聞得候付、役者兵士無差別滞京、同様三人賦被相渡、尤飯米・味噌等之儀、当分御春屋ヨリ被相渡候得共、野菜・油等之儀ニ付、難黙止内情モ承得候間、三人御賄金迄被成下度、就テハ以来之儀日数三拾日相過、長滞在被仰付候節ハ、此節通被仰付度致吟味、大隊長申談候付、陸軍所掛御役へ申出、刑部承之、

橋口彦次

一物奉行へ相調候処、滞府ニ就テハ、道中滞在同様之訳ヲ以、滞在旅込一日老人ニ付、即老奴八分ツ、現人数へ被相渡旨申出事、

一會計奉行へ相調事、

朱書

物奉行シラベ通ニテ申出之通申付候事、

五六〇 藩庁西郷隆盛ニ出軍総差引ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテ、西郷隆盛ニ今回ノ出軍総差引ヲ命ス、

ソノ辞令左ノ如シ、

辞令

西郷吉之助

右ハ此節諸郷等兵隊出軍付、為総差引被差出候条可申渡候、

七月

刑部

朱書

辰七月十九日

御本文之通、吉之助名代江申渡、大隊長へモ申渡、  
原辰左衛門江取次証文ヲ以申渡候、

取次

西 筑右衛門

五六一 人馬奉行・普請奉行等ニ出軍ヲ命ス

コノ日、又人馬奉行・普請奉行等左記ノ人々ニ、兵隊ト同時ニ出軍ヲ命ス、ソノ文左ノ如シ、

人馬奉行

木脇次郎右衛門

普請奉行

武 清 太

御作事方

下目付

相良 此右衛門

右同筆者

弟子丸 彌藤次

郡方筆者

白濱八郎右衛門

右ハ出軍被仰付置候付、豊瑞丸・平運丸帰帆次第、兵隊一緒ニ被差出候条可申渡候、

但大工夫並御作事方人足之儀モ、揃居候分ハ都テ此節被遣候、

七月

刑部

朱書

辰七月廿日

御本文之通、内用頼御用人へ申渡、大隊長へモ申渡候、

取次

西 筑右衛門

五六二 当春分捕ノ銅砲五挺ヲ集成館へ下附シ、

兵具方ニソノ管理ヲ命ス

コノ日、当春分捕ノ銅砲五挺ヲ集成館へ下附セラレタルニヨリ、兵具方ニソノ管理ヲ命ス、ソノ文左ノ如シ、

命令書

銅砲五挺

但銘々葵紋付、又ハ銘書有之、

右ハ当春上方表逆賊

御追討之節、分捕砲ニテ、集成館江御差下相成居候付、御兵具方格護被仰付候条、此旨御兵具奉行・集成館掛御役々江申渡、可承向へモ可申渡候、

七月

刑部

朱書

辰七月十九日御本文之通、御兵具奉行並集成館掛御役々江申渡、大隊長へモ申渡候、

取次

西 筑右衛門

五六三 大総督府横濱軍事病院ヲ東京ニ移ス

二十日、閏四月以来横濱ニ設立シテ、兵士ノ創痍ヲ治療セシ病院ヲ、下谷津藩邸ニ移シテ、東京医学所ト称ス、  
五六三ノ一

東征総督記抜萃

閏四月十五日、今日ヨリ横濱へ河田精之行、病院取立之事也、十七日河田横濱ヨリ帰ル、病院成就之事申上ル、

五六三ノ二

神奈川裁判所総督へ用翰

抑過日ハ英医之儀申入候処、早速御廻シ、於大総督モ深辱被思召候、就テハ右英医ミニストル之悴病氣相預リ居候間、当地滞留難仕由、横濱へ手負人相廻シ、治療致シ度旨申出候ニ付、右手負人相廻シ申候間、横濱ニテ病院ノ儀、御取計可給候様、大総督宮御頼ミ候、委細ハ使太田銚太郎ヨリ可申入候間、御聞取可給候、

閏四月十四日

東征総督記

文部省第一年報ニ云、是ヨリ先キ、横濱ニ病院ヲ開キテ、兵士ノ創痍ヲ療ス、七月廿日横濱病院ヲ東京津藩邸ニ移シ、英医シユトルヲシテ之ヲ療セシム、

五六四 伊地知正治ヨリ大久保利通へ戦況ヲ報ス

二十一日、東山道先鋒総督參謀伊地知正治、書ヲ在東京大久保利通ニ贈リ、平潟口ヨリ進撃セシ官軍ノ状況ヲ報ス、ソノ文左ノ如シ、

五六四ノ一

尚々其御地ニテ、御徳政ヲ被為行ノ御趣法存寄モ候

ハ、可申上旨被仰越候ニ付、乍恐別紙奉差上候、

先日ハ有馬七左衛門差上、警城平ト当所手合之上可致進撃候、都合宜敷候半トノ段、申上越候処、豈測シ哉、十七日迄ニ浜手之參謀棚倉表ニ来ル、會議可仕トハ全ク偽言ニテ、今日迄影モ姿モ不相見、剩へ一人之使者、一紙之書状モ不差遣、言語同断之次第ニ御座候、乍併其近辺ニ残賊等未ニ罷在候トヤラノ事ヲ、名ニハ可致欵、実ハ遲滞遁逃之笑ヲ憚テ、手合ノ合戦ヲイヤガリ候儀ト奉存候、然処去月廿四日、棚倉攻落之涯ハ、近郊全ク無敵候処、既ニ三十日位手出不仕候故、近日ハ須加川白川ヨリ六里、石川白川ヨリ六里余等ニハ、仙・會・米之賊徒追々出張ニモ相成候次第、壯士輩切齒ニ堪へ兼、且ハ先度大総督府ヨリ被仰渡候御書面等モ候故、棚倉表ヨリ吟味之上、野津七二・池上四郎左衛門、昨日ヨリ出立、

磐木平ニ下向、彼表御国人数之分ヲ引分、三春・守山ニ、進撃之手合致サセ候筈之由、其策成否実ニ如何ト奉存候、夫兵ハ国家之大事、日費千金内外騒動、近クハ奥羽収獲之時ヲ害シ、不遠テ寒冷之節ニ至候ハ、無此上一大事ニ候処、右通兒女之戯ニ均敷事ニテ、追々破竹之勢ヲ失候儀、甚以残念之次第ニ御座候、依之何卒先達テモ御願申上候通、鷲尾殿ヲ以テ、平湯通リノ官軍惣督兼務被仰付、左候テ浜手之人数ニモ、其御下知ニ從テ進止分合可相勤旨、大総督府ヨリ御書付ヲ以テ、屹度被仰渡度奉喚願候、無左候テハ、譬へ此節ハ進撃之手合モ出来候共、仙臺是ヨリ四十里、津輕是ヨリ二百里ト承及候、進路僅成ル官軍中ニテ、折々相談六ヶ敷候テハ、無詮方事ト奉存候、何分可然御指揮奉希候、

一為当方之後続、近々肥後兵出張相成候由、大慶此事ト奉存候、実ハ今日會計方何某其表江出府金御渡方之催促ニ御座候由、夫当年會計方之儀モ、一向我物ト心得相勤候モノ無之処ヨリ、色々入込候子細モ御座候得共、夫ヨリハ拙速ニ成功ヲ遂候様ノ御手配有之儀、方今之御急務ト奉存候間、此上一日ニテモ早日相運候処奉願

上候、先ハ右旁得尊意度如斯御座候、恐惶謹言、

辰七月廿一日

伊地知正治

大久保一蔵様

侍史中

五六四之二

尚々其後廿一日ニ浜手之參謀木梨精一郎、棚倉迄参リ、別紙之通軍議相決候処、何分不日進撃之大機會ヲ得候上ハ、何レ表之守衛專要不可欠之事ニ御座候、昨夜樺山休兵衛掃陣、肥後藩出兵御免之由相分、又々手筈致相違、当惑之儀ニ御座候、尤浜手御差廻之官軍、十分之進撃出来ノ勢見受候ハ、別ニ申上候程之儀モ無御座候得共、此中ヨリ申上候通、遅漏旁之次第ニテ御座候故、万事情美御洞察被下度、早々如斯御座候、敬白、

辰七月廿三日

伊地知正治

大久保利通様

侍史

五六五 薩藩及佐土原藩北越出軍達書



二十二日、北越ノ賊勢猖獗ナルニヨリ、初メ北越出軍ヲ羽州出軍ニ更命セラレタル我藩兵及ヒ佐土原藩兵ハ、初ノ如ク越後ニ出軍セシメラル、ソノ達書左ノ如シ、  
五六五ノ一  
達書

薩州

過日其藩兵隊一小隊北越出陣被免、更ニ羽州へ進軍被仰付候処、今復越後路至急進撃致候様、改テ 御沙汰候事、

官中日記

五六五ノ二

佐土原

過日北越出兵被免、更ニ羽州へ進軍被 仰付候処、今復越後路へ至急進發致候様、改メテ 御沙汰候事、

官中日記